法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-07

# 2014 年度 国際文化情報学会発表要旨

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
11
(終了ページ / End Page)
121
(発行年 / Year)
2015-04

Hosei University Repository

# 2014 年度 国際文化情報学会発表要旨

## 論文部門【学部生】

林利奈（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

### エドウィン・O・ライシャワーはなぜ天皇制維持を主張したのか？

**第一章　論文の目的**

1945 年 8 月 15 日の太平洋戦争の敗戦により、天皇の処遇問題が浮上した。その占領政策を最終的立場として起草にあたり国務省の決断に影響を及ぼしたのが、エドウィン･O･ライシャワーだ。彼は 1961 年から 5 年半アメリカ駐日大使を務め、学者大使として人気を博した。この論文は、彼がなぜ天皇を罰し、退位を強いることに反対したのか、1987 年発行の彼の自伝や関連書籍を基に明らかにしていきたい。また、彼がこのような判断がなぜできたのか、検討していきたい。

**第二章　彼の生い立ち**

エドウィン・O・ライシャワーは 1910 年（明治 43 年）10 月 15 日、東京・港区の明治学院大学のキャンパス内に生まれた。彼の両親はキリスト教長老派の宣教師として、1905 年に日本へやってきた。彼の子供時代には日本生まれのアメリカ人、とくに宣教師の子は BIJ（Born In Japan の頭文字）と呼ばれた。彼は日本を“発見”する必要がなかった。彼が日本に存在するすべてのものをごく自然で、正常なものに思うということだ。両親の宣教活動により身を持って日本のナショナリズムに共感し、自分たちだけが帝国主義ゲームを遊び、その中に入ってこようとする日本人を非難する西洋人に怒りを覚えた。こうした共感や怒りは生涯にわたり彼の思考を方向づけることになる。

**第三章　天皇制維持への理由**

1945 年 11 月､日本の敗戦後､彼はスウィンク（SWNCC）と略称された国務･陸軍･海軍三省調整委員会の下部組織、東アジア小委員会に所属し、日本・朝鮮をめぐる種々の立案と助言に携わった。その中でとりわけ大きな問題は天皇の処遇問題だった。当時、天皇と天皇制をどう扱うべきか、世界中で激しい論争の的になっていた。天皇を戦争犯罪者として裁き、退位を強要すべきか、それとも民主化と非軍事化という占領目標のために天皇を利用すべきか。新聞とアメリカ世論は、正当な理由のない日本の真珠湾奇襲に復讐しろと声高に要求した。だが、ライシャ

Hosei University Repository

ワーは断固としてそれを否定し、政策決定者を説得した。1982年発行の「日本への自叙伝」には、その理由が以下のように記述されている。

「天皇個人は戦争と無関係だ、天皇は単なるシンボルだったにすぎず、このことは日本人みなよく知っている。天皇個人としての行動はつねに戦争に反対するものだったし、『何とか平和にいけないのか』というものだった。だから、天皇を罰することは、個人への正義の見地からは非常に不当なものとなろう。また、天皇を罰し、退位を強いるようなことをすれば、後になって日本の中には大変危険な反動を生じかねない状況を作り出すことになる。それは避けるべきだ。（中略）天皇は大変有用な存在となり、われわれにとって大いに力となるであろう。」

また、1967年発行の「日本 過去と現在」には、以下のように記述されている。「たしかに軍国主義者が権力を握るのを助長したのは天皇制であった。（中略）しかし、天皇制に付随する危険性はけっして天皇自身にあったのではなく、天皇に対する国民の態度にこそあったのであり、その態度は、天皇を罰し、あるいは国民の願いに逆らって天皇制を廃止したところで到底変えられるものではない。」

**第四章　下支えした根拠**

では、天皇制を維持し、天皇を裁いてもいけないと主張した根拠は何であったのだろうか？それは、ライシャワーが日本人に民主主義に適応する能力があると信じていたからである。軍部を敗北させ、解体すれば「善き日本人」がかつての大正デモクラシーのような姿を取り戻すだろうと考え、天皇制を抜本的に改革することに反対したのだ。軍国主義時代を議会制民主主義の一時的な逸脱だと考えたのだ。

そして、彼がこのような判断ができたのは、彼が日本を西洋の基準で考えることなく、歴史を分析し国民の心情を理解することができたからだと私は考える。

**参考文献**

・日本≪過去と現在≫　エドウィン・O・ライシャワー　1964年　時事通信社
・日本への自叙伝　同上　1982年　日本放送出版協会
・ライシャワー自伝　同上　1987年　文藝春秋
・ライシャワーの昭和史　ジョージ・R・パッカード　2009年　講談社

---

向田一成（大澤・島田ゼミ）

●発表タイトル

## 海外映画と日本映画の違い

**①テーマ設定**

自分は今回日本とアメリカの文化的違いなどから日本映画とハリウッド映画を

Hosei University Repository

比較して「日本映画はハリウッド映画に勝てない」という結論に至りました。なぜそのような事が言えるのか論証知っていきたいと思います。

はじめに、このようなテーマを選んだ理由は、そもそも私自身、日本映画よりハリウッド映画のほうが好きだということや、近年、TSUTAYA に行っても日本映画よりハリウッド映画をメインにした配置になっていることに疑問に思ったことがあったからです。さらに言えば私も将来、俳優になりたいという夢があるので、日本とハリウッドにどのような差があるのか知っておいたほうがいいだろうと思い、このようなテーマ設定をしました。調べる前まではただ単に「アメリカの方が人口も多く映画の量が多いから TSUTAYA にもハリウッド映画がたくさん置いてあるんじゃないか」と思っていました。しかしクラスメートに意見を聞いたところ、「違う」ということに気付きました。なぜかと言うと私たち日本人は日本映画よりも「ハリーポッター」などのハリウッド映画のほうが知っており見ているからです。

**②ハリウッドの歴史**

まず私はハリウッド映画の歴史について調べました。当時、アメリカの映画はニューヨークやシカゴを中心に作られていました。

しかし、映画製作を手掛けていた中小企業は機器やフィルムを使う際に発生する特許料が高額で払えなくなってしまいました。そこで大手企業が協力して片っ端から特許料の払わない中小企業を摘発していきました。中小企業はその弾圧から逃れるため逃げ回りました。そして様々な場所で映画を作り続けました。その後、中小企業は気候もよく映画に最適なロサンゼルスまたの名をハリウッドに行き着きました。そのようにして今のハリウッド映画が生まれたのです。自分たちが見ているディズニーやソニーなどの映画は全てハリウッド映画なのです。

**③ハリウッドと日本の収入差・予算差**

次に本題である日本映画とハリウッド映画の収入の差や予算の差について調べました。調べてみて驚きの事実がたくさん見つかりました。一番の驚きは予算面です。ハリウッドでは前作の収入・海外へ売る上映権・DVD の売り上げを予測・銀行などの大手企業一社からの出資、その全てを使っています。それに対して日本は政策委員会方式という政策により沢山の企業からの出資のみで映画製作を行っています。でもそれだけであれば、そんなに変わらないのではないかと思う人もいるかもしれません。しかし日本とアメリカの映画文化・監督や一般人の映画に対する気持ちは全く違います。その理由は日本とハリウッドの収入の差について調べてみて思い知りました。図にもありますように「DVD になってから見ればいい」と考える日本人とは違い、入場料やスクリーン数などからアメリカではすぐに映画を見に行ける環境が整っていると言えるでしょう。「ハリウッド映画の制作会社はこんなにも儲かっているんだ」と思ったのですが、そうではないよ

Hosei University Repository

うです。以前までは1億ドル以下で作っていたハリウッド映画の予算ですが、物価の上昇、迫力ある映画を作るためのCGの多様化、役柄が豊富な事、そして何より俳優陣への出演料が高額になったことにより予算が大幅に増えていきました。昨年のジョニーデップさんの出演料は約81億8,000万円だったそうです。ちなみに日本映画に出ている俳優は出演料だけで5億円未満だそうです。そのような出演料に差が生まれる理由は、それも日本とハリウッドの文化的違いに理由があります。ハリウッドでは俳優陣はスターとして持て成され、皆からあこがれも存在でもあり、俳優という職業は競争率が非常に高い職業なのです。それに対して日本では「俳優になりたい」という夢を抱いている人が少なく、「安定した職業に就きたい」という人のほうが多いのが現状です。ハリウッドでは映画産業が国を支えているといっても良いくらいなのです。また出演陣にこんなにもお金をかけられる理由は、先ほどの収入構造にも書いてあるように高い予算をかけてもしっかりと利益を出せるからです。つまり海外展開をしているので収益の出ている国があればそこからの収益のほとんどが利益になるのでその分予算がかけられるということです。また先ほど言ったように俳優陣や映画人は人気ある職業なので映画に出ているのは数億人の中から勝ち残った人たちであり、素晴らしい人たちばかりなので地位や名誉があり国内、英語圏以外に非英語圏であっても受けられるように編集されています。儲かるということが分かっているからお金をかけられる。このような強い自信も映画産業が発達しているだからなのだと思います。

**④収入差が生じる理由**

では、なぜ日本は興行収入などにこんなにも差が出てしまうのでしょうか？理由の一つは予算をあまりかけられないということです。ハリウッド映画と違い、日本映画は世界をマーケットとしておらず国内だけで予算を回収しようとしているからです。自国のためだけに作っている日本映画は一言で言いますと、海外展開に向いていないと言えます。

**⑤日本映画が海外展開に向かない理由**

それには日本映画の特徴がいくつか関わってきています。一つ目はドラマの続編が映画化されることです。海外受けが悪いのも目に見えます。二つ目は売れている芸人やアイドルを俳優として使って映画化してしまうことです。きちんとしたレッスンもせずに出演してしまうため演技能力が未熟で視聴者の心をつかめないというのが事実です。また海外と違い、芸能界を目指す人が少なく俳優同士の争いがないです。もうひとつ言えることは日本の場合、アニメ映画のほうが低予算で興行収入も高いという理由から映画業界の監督やスタッフがアニメ業界に移ってしまっています。要するに良い監督と良い俳優が揃わないというのが興行収入に出ているのだと思います。はじめから海外展開を目的にしていないという点から日本は文化の壁を超えることが不可能なのです。

Hosei University Repository

**⑥結論**

調べてみた結果、アメリカと日本の映画産業の違いがはっきりとわかることができました。第一に日本映画は売り上げが出ません。売り上げが出ないので予算もかけられません。少ない予算だと世界に通用するような作品を作るのは無理があります。作品の質が悪いのでDVDまでの二次利用しか行かず、利益の出せる期間が短くなってしまいます。そして海外のように次の作品への予算がかけられなくなるという負のローテーションが巻き起こってしまいます。

現実問題、日本とアメリカの映画の収益差

は全く違います。実際に見て比較してみてもハリウッド映画のほうが質が高いなというのは誰が見てもはっきりしています。つまり予算が高いから質が高く、良い映画になり、収入が出るので、日本の状況とはまったく違う

のです。そのような理由から「日本映画はハリウッド映画に勝てない」と言えます。

**⑦改善策・今後の目標**

では日本映画はハリウッド映画に近づくための改善点は何なのかというのが問題視されました。それは映画の質を上げる、またその映画を視聴者に見たいと思ってもらうことだと思います。そのためには、テレビ局や映画配給会社･原作出版社･広告代理人などと協力して宣伝活動を幅広く行い、興味関心を持ってもらうことです。そして海外をマーケットにおいて海外展開をすることができたら、二次利用による収益も増えていけば予算もかけられ良い映画もできるようになっていくでしょう。以上が私の思う少ない予算で奮闘することのできる日本映画の最後の手段だと思います。それでもやはり予算がかかっているハリウッドのようなクオリティーに行くまでは何十年もかかるのが事実です。

---

佐々木美紀（今泉ゼミ）

●発表タイトル

## 地域語を含めた複言語主義の考察　～欧州とフランスにおける言語政策にみる～

欧州評議会の言語政策（「ヨーロッパ地域少数言語憲章」･「ヨーロッパ言語共通参照枠」）とフランスにおける言語政策（単一言語主義･多言語主義）を取り上げ、政府の「複言語主義」政策のもとで、複数言語を習得することはどのような意味を持つのか、またそこに地域語という観点が含まれた際にどのような問題提起が可能であるかを考察する。

「複言語主義」という考え方の背景には、母語や自分が使いたいと思う言語を自

Hosei University Repository

由に読み書き話せること、つまり他言語に脅かされない権利を保持するとともに、他者の言語を尊重するというフランスの「言語権」思想がある。フランスにおける公用語と地域語に関する従来の研究は、言語を「選択する権利」とした人権の観点から両語の関係性を分析するか、もしくは地域語と公用語の社会的優位性などを論じているものが多い。しかし、ヨーロッパとしての言語政策の枠組みの設定、つまり「地域少数言語憲章」と「参照枠」の２つを背景とした「複言語主義」と、フランスの単一言語主義的な政策との関係、あるいは地域語を母語とする話者を含めたフランスの言語教育との関連づけは行われてこなかった。報告者はこの点を踏まえて、フランスにおける公用語と地域語の双方を対象とした「複言語主義」とはどのようなものであり、複数言語を人々が駆使することの意義についても考察する必要があると考える。

以上のような問題関心のもとに、本学会では以下の内容に焦点をあてて報告する。

ヨーロッパでは、欧州評議会に加盟している国々の人々をヨーロッパ市民として教育するため 2001 年より「ヨーロッパ言語共通参照枠（以下、参照枠と略記）」の中で「複言語主義」が提唱された。これは、複数の言語が存在しているヨーロッパ社会の中で人々の経済活動を活発化させ、欧州全体の経済促進・相互理解につなげるため、個々人が複数の言語を習得することを目的としている。主に、各国の公用語となっている言語の試験のレベルや評価基準を統一させ、簡略化させた公用語レベル言語間の学習を提供している。各言語試験の評価基準が設定されているのは各国の公用語あるいは公用語に準ずる言語で、地域語は対象とされていない。しかし、「参照枠」の次のような記述より、報告者は「参照枠」が対象とするは公用語レベルの言語のみならず、地域語のような言語も含まれていると捉えている。

・ヨーロッパの文化生活の豊かさと多様性を維持し、更に発展させること。そのためには、お互いが今まで以上に各国の言語、地域言語についての知識を、あまり教えられる機会のない言語についても、持つことが必要である。

すなわち「参照枠」は実際には「複言語主義」を唱えている。一人一人が複数の言語を自身に取り込み、ネイティブのレベルまではいかずとも互いにコミュニケーションや相互理解が図れるレベルで複数言語を使いこなせることである。この点で参照枠は「知る」、「知識を持つ」ことは掲げても、話者となることは提言していなのではないか。だから地域語ネイティブに公用語能力を高める「一方的」なものになる点が問題と考えられる。

この問いを考えるにあたり、欧州評議会において 1992 年に採択された「ヨーロッパ地域少数言語憲章（以下、地域少数言語憲章と略記）」がどのような議論をフランスにもたらしたか、フランス独特の単一言語主義政策から多言語政策へのシフ

Hosei University Repository

トの過程を中心にみたいと考えている。また、公用語と地域語の双方の言語を話す社会の具体的な事例としてドイツの国境と接しているフランスのアルザス地方を取り上げ、アルザス社会の公用語と地域語の関係性から地域少数語憲章やそれを受け入れたフランスの「複言語主義」を捉えなおしたい。

---

中村思保（今泉ゼミ）

●発表タイトル

## ペルー・アンデスの社会運動―先住民運動との関係を中心に―

本報告では、ペルー共和国（República del Perú、以下ペルー）のシエラ農村部の社会運動の特徴と変容を明らかにし、そのなかで先住民による組織や運動を考察する。

ペルーは、コスタ、シエラ、セルバの3地域から成り立っている。本論文の対象地域であるシエラは、アンデス山脈の高地の部分で、ペルーの国土約129万平方キロメートルのうち、約28%を占める。人口は857万人で全国の33%にあたる。ペルー人口の47.7%が先住民に分類され、その半分以上が農村部に住んでいる。シエラに住む先住民人口を特定することは難しいが、農村には約440万人が住んでいると推定されている。

1532年にスペインに征服されて以来、1821年の独立後も、ペルーにおいて政治を動かすのは白人系であるクリオーリョたちであり、先住民たちは表舞台から排除され続けてきた。

しかし、先住民の権利主張、地位向上を求める動きも、時代を超えて広く存在してきた。クリオーリョたちによる「インディヘニスモ」と呼ばれる先住民擁護運動は、その起源を西洋人が「新世界」の住人と初めて接触した時まで遡る。

これに対し、「先住民としての」地位や権利を、先住民自らが求める運動を「先住民運動」という。しかし、この先住民運動が現れるようになるには、独立から150年もの時間を要した。植民地時代に起きた反乱や、20世紀の農民運動はいずれも先住民による政治運動であった。しかし前者は、クリオーリョ層との同盟の強化を試みるものであり、彼らの世襲財産や膨大な私的権益には手を触れなかった。また、後者も、階級闘争として農民としての土地の権利要求に終始しており、先住民としての権利を主張するものではなかった。特にシエラでは先住民組織の組織化が遅れ、現在も国政に関わる社会運動には至っていない。

このような特徴から、先住民運動が活発なボリビアのような南米諸国と対比して「ペルーの先住民運動はなぜ不活発なのか」という問いが論点となってきた。

Hosei University Repository

政治学者の岡田勇は、ペルーに強力な運動が起こらない要因に関する従来の分析を次のように整理している。

第１に農民組合の階級闘争への固執、第２に都市への大規模な移住による居住・就労環境の変化、第３に大規模な農地改革の後、継続的な政治参加に至らなかったこと、である。岡田は、これらの分析を 1970 年代以降の運動形成過程に限定して論じている点に問題があると評し、先住民運動を理解するには、顕著な抗議運動や社会組織が出現した時点や地域だけでなく、各国の政治や社会の中で先住民がどのような位置と役割にあったのかを継続的に理解する必要があるとしている。その上で岡田は、ペルーの先住民運動を特徴づけるうえでの重要な時期として、次の２つを挙げる。第１に、ベラスコ革命政権の時代（1968―1975）で、上からの改革が行われたことが、ペルーの社会運動に力を持たせなかった。第２に、フジモリ政権の時代（1990―2000）で、国、県、村の政治が乖離していることで、複数の地方をまたぎ、同時にローカルに基盤を持つ政治運動を構築することが困難になった。そのためペルーでは社会運動が国政に影響しにくく、先住民運動が起こる機会はあったものの、強力な運動にならなかったとする。そしてこの社会構造が、現在も先住民運動に影響を与えていると論じている。

本報告では、以上の岡田の分析を踏まえ、ペルーがおかれた国際情勢の変化や他国からの圧力などが先住民運動にいかに影響したかを分析する。具体的に述べれば、社会主義の国際路線の変化が先住民運動の出現について関係していることを明らかにする。以上の分析を通じて、ペルーの社会運動の特徴、また先住民運動への理解をより深いものにしたい。

---

森井みなみ（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

## 国際紛争を解決する手段としての共感力（empathy）について～文化摩擦としての“靖国問題”を解決するために

なぜ昨今靖国問題は騒がれているのか。私はメディアで報道されてきた靖国問題という言葉と日本と他の国々の関係がこの靖国問題を通して悪化していることしか知らなかった。そこで私は様々な国でどのような意見があるのか、靖国神社問題の様々な観点からどのように解決していくのかを考えていきたいと思う。みな靖国問題という言葉を多く使っているが靖国問題とはどのようなものなのか。靖国神社の宮司である松平永芳さんによってＡ級戦犯が靖国神社に合祀されたことにより中国や韓国などの周辺諸国から反発が起こったことである。そもそもなぜ松平永芳宮司はＡ級戦犯を靖国神社に合祀したのだろうか。松平氏は元々“東京

Hosei University Repository

裁判を否定しなければ日本の精神復興は出来ない”という考えを持っていた。つまりA級戦犯を合祀することによって東京裁判否定、戦後の精神復興ができると考えたのである。また靖国神社境内にある歴史博物館「遊就館」の一部展示の説明文はアメリカや中国の人々を傷つけるものであるとアーミテージ元国務副長官は産経新聞の紙上で指摘している。この遊就館のパネルに記された歴史観は、日米開戦は資源禁輸で日本を追い詰めた米国による強要であり、日本は「自存自衛」と「白人優越世界打破」のために立ち上がったという内容だ。太平洋戦争で敵国だったアメリカの歴史観と真っ向から衝突する。こういった靖国神社のあり方や小泉純一郎元首相の靖国神社参拝への各国の反発を抑え解決するための方法として様々な案が持ち上がったのだ。例えば千鳥ヶ淵戦没者墓苑があげられる。しかしこの千鳥ヶ淵戦没者墓苑は国で保管していた引き取り手のない遺骨を収納するための墓であり靖国神社にとって代わるものではないかと靖国神社から反発が起き物議を醸されたのである。こういった様々な問題を抱え、現在も多くの国との関係に影響している靖国神社。どのようにしたら靖国問題は解決方向に向かうのか、また解決しないにせよ良好な国家間の関係を築く方法を共感力を通じて考えていく必要があると思う。

**参考文献**

・靖国戦後秘史　A級戦犯を合祀した男　　毎日新聞「靖国」取材班

---

工藤綾子（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

## 日本人の対中イメージ改善に向けて―中国残留孤児を育てた養父母の視点から―

**＜第一章　はじめに＞**

昨今、日本の首相による靖国神社参拝や領土問題などにより日中関係は冷え込む一方である。互いの国の名前を聞いた時に、ネガティブイメージを抱いてしまう人も少なくないだろう。しかしながら戦後の大陸には、かつての敵国日本の孤児達を助けた中国人がいたのだ。厚生労働省はソ連参戦以後、居住地を追われ避難する中で肉親と離死別し孤児となって中国人に引き取られ、自己の身元を知らないまま成長した子供を「中国残留日本人孤児」と呼び、肉親調査と帰国援護を行ってきた。[1]彼らは中国人の養父母に育てられた。戦後も続いた政治闘争や飢饉の中でも、多くの養父母は日本人孤児達へ実の子同様に愛情を注いだ。スパイ容疑や迫害を受けたり、飢餓に苦しむ中でなぜ孤児を扶養したのか。養母の一人、郭玉珍さんはこう言う。「当時、私の主人は古着屋で貧しかった。なのになぜ、敵国の

Hosei University Repository

子どもを育てたか、日本人は聞く。敵、味方、民族の違いなど問題でない。食べものがなく、死にそうな子どもがいたから、手をのべた。ただそれだけ[2]」と。

中国残留孤児に関しては、残留孤児の帰国問題が多く取り上げられており、中国人養父母に関する研究は極めて少ない。本発表では、中国人養父母がどのようにして孤児らを育てたかを明らかにしていきたい。

残留孤児を拾い育てた中国人養父母に関する先行調査・研究を紹介するとともに、実際に残留孤児の方とお会いし、伺った内容についても発表の中で報告していきたい。

**＜第二章　中国人養父母と残留孤児の出会い＞**

1932年から1945年の間に多くの日本人が「満州農業移民」として満州農村に入植した。特に1936年8月には広田弘毅内閣の七大国策の一環として、20年間で100万戸･500万人の日本人移民を送出する「満州農業移民百万戸計画」が策定され、本格的な移民事業が推進された。こうして1945年8月までに、32万人以上[3]にのぼる「満州農業移民」が送出された。

1945年8月8日、ソ連は日本に参戦を通告し満州への進攻を始めた。同年8月9日、突然のソ連軍の進攻にさらされた日本人はその後何か月間にも及ぶ凄惨な逃避行を余儀なくされる。青壮年男性はほとんど徴兵され、残された女性達は鉄道路線、船舶がある河川、あるいは中国大陸南方を目指して、ただひたすらに中国東北地方をさまよい続けた。数ヶ月間に及ぶ逃避行の末、彼らがたどり着いたのは、都市部にある難民収容所だった。残留孤児の多くは劣悪な環境下での難民生活を送る中で「このまま死を待つか、現地中国人に助けを求めるか」という二者択一を迫られ、中には金銭・物資を引き換えに現地中国人（後の養父母）のもとへと引き取られた者もいた。

**＜第三章　中国人養父母が味わった苦難＞**

残留孤児を引き取った動機は様々だが、中国人養父母の多くは残留孤児を育てる上で多くの困難を強いられた。衰弱していた幼い彼らの衣食住の面倒を見て、中国語を一から教えた。日本人の子供と暮らしていると周囲に分かるとひどい目に遭うので、引っ越しを繰り返した家族もあった。

「養父は私のことを、『日本人ではなく、朝鮮人の子だ』と周囲に言い触らした。日本人だとわかると殺されたり、誘拐して棄てられるかもしれないからだ。養父は『やっと火の粉から救ったのだから、火中に返してはいけない』と言っていた」[4]

特に1966～1976年の文化大革命の時期に、残留孤児に対する差別は激化しスパイ容疑をかけられ迫害された。

**＜第四章　まとめ＞**

中国人養父母自身も生きることに困難だった戦後に、なぜかつての敵国日本の

Hosei University Repository

子供を引き取り、育てたのか。それは、「戦争は国と国の間のことで、子どもたちとは関係ない。彼らはかわいそうだ」[5]という言葉に理由を見出すことができるだろう。中国人養父母に共通する大きな理由として、国籍や国境の境界線を越え、一人の人間として彼らを重視した点を挙げられる。国家間の戦争や政治的な考えと、目の前で衰弱していく残留孤児とを切り離して考えたからだ。

以上のことから我々は、マスメディア等が発信する中国のネガティブイメージを一方的に飲み込むだけでなく、かつて日本人を救ってくれた中国人がいた事実を知るべきだろう。

**注釈**

1　厚生労働省平成 25 年度「中国残留邦人支援等に係る全国担当者会議資料」

2　『朝日新聞』1989 年 12 月 21 日　朝刊

3　1945 年 5 月時点で、一般開拓民とその家族が 22 万 257 万人、青少年義勇隊とその家族が 7 万 9879 人、訓練中の青少年義勇軍の隊員が 2 万 1738 人で、合計 32 万 1874 人。

浅野慎一・佟岩「中国残留孤児の「戦争被害」: 置き去りにされた日本人の戦後処理被害」（神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、2008 年 9 月

4　浅野慎一・佟岩「ポスト・コロニアルの中国における残留日本人孤児」（神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 ,2009 年 3 月）

5　張嵐「「中国残留孤児」を育てた中国人養父母―ライフストーリー調査をもとに―」（年報社会学論集（23）, 2010）

---

伊東篤弘（大澤・島田ゼミ）

●発表タイトル

## マリファナ（なぜ大麻が合法化されているのか）

大麻、マリファナと聞いてみなさんは何を想像するだろうか。危険なイメージ、社会的に法的に禁止されているドラッグなどを思い浮かべるだろう。それは当然である。しかしながら今、アメリカではこのマリファナが合法化され始めている。今年からコロラド州では嗜好品としても合法化された。じゃあなぜマリファナが合法化され始めたのか。

マリファナ合法化の第一歩は医療大麻としての使用を合法化したことから始まる。マリファナは危険だと言われている一方医療目的で使用されているのが現状である。日本では医療目的での使用でさえ禁止されているがアメリカでは多くの州で認められている。1996 年にカリフォルニア州で住民投票によって医療大麻が合法化されたのが初となり、そこから 20 年足らずで現在 23 もの州が合法化を認

Hosei University Repository

めている。医療目的の大麻の必要性が分かるだろう。では、そもそもなぜ大麻が医療目的に必要なのだろうか。それは、大麻には様々な効能があるからである。大麻には鎮痛作用・鎮静作用・催眠作用・食欲増進作用・抗癌作用・眼圧の緩和・嘔吐の抑制などがある。このように大麻は病気を治すというよりは薬の副作用の軽減のような作用を持っている。例えば抗がん剤による食欲減退や体力衰弱を防いだり出来るのだ。他にも緑内障や、てんかん、エイズなどにも有効である。こういった理由で医療目的として使われているのだ。

もう一つ合法化の理由としてあげられるのが、政府が大麻を管理し、税をかける事でマリファナのメキシコなどからの密輸を防ぎ密輸で稼いでいる麻薬カルテルの儲けを減らさせ、同時に税金収入を得られるからである。さらに、大麻の売人のような青少年の犯罪自体も減らせるという目的もある。実際に嗜好品としての大麻を合法化したコロラド州での犯罪率は、合法化後に10%も低くなっている。それ以外にも凶悪犯罪・自殺者・交通事故死者数までもが合法化後に減っているというのが現状である。アメリカ政府は下手な規制による問題発生をなくすために合法化をしたのだろう。

では危険と言われるものを医療目的・犯罪抑制のために解禁して、人体に影響や害はないのかというのが疑問点になるだろう。いかに薬の副作用が弱められても他で害があるのではないのかと思うだろう。ただでさえ日本では禁止されているものなのでこの疑問は当然である。よく言われるのが、危険なドラッグ類は依存性が高く、禁断症状や幻覚が出てしまうという話がある。これに関しては色んな大学や研究者が研究をしているが、結論を言ってしまえば一般人の想像する害はかなり少ないという事である。簡単に言ってしまえば、酒やタバコよりも依存も少ないが、無いとも言い切れないのが現状である。しかし害があるにしろマリファナに関しての依存などの害はカフェインと同程度しか無いとされている。大麻を長い間吸わなかったら幻覚が見えたり手がふるえるといったような体的依存は少なく、逆に酒の方が強いという研究結果が出ている。大麻による中毒死もないと言われている。その代わりに何に関しても精神的依存はあると思うのでそこは自己管理と言えるのではないだろうか。とにかく、害に関しては日本人が常識的に思っているほど危険な害は少なく、日常的にある酒・タバコの方が害があるから、アメリカでは合法に踏み出せるのだろう。

ではなぜ日本はここまで厳しく取り締まるのだろうか。日本では医療目的での使用でさえ一切認められていない。日本が他国よりも厳しいといえるのは、G8の中で唯一、大麻の単純所持をするだけで懲役刑に処せられてしまうという点から分かるだろう。しかし、そもそも日本は大麻を禁止していなく、戦時中も戦前も繊維業や喘息薬として栽培・製造・販売されていたのだ。これを禁止にさせたのがアメリカである。終戦とともにアメリカの要求により禁止という流れが作られ

Hosei University Repository

た。今の日本は未だに厳しい規則を適用しているのに、アメリカの一部では合法というのは終戦以降真逆の道を歩んでしまったような感覚を覚える。

結論を言ってしまえば、アメリカは純粋に大麻が医療目的に有効であること、合法化によって密輸防止・税収入があるという利点を見つけて合法化に踏み出したのだろう。だからといって今の日本において、害がないならば合法化しろというような意見を掲げるのは間違いであるといえるのではないか。

---

向田愛佳子（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

## 現代に生きる日本戦国武将の末裔～沙也可の子孫たち現在～

### 序章

16 世紀末、豊臣秀吉の朝鮮出兵で日本側から朝鮮側に投降した日本人武将がいた。その名は「沙也可」。沙也可は、その後も朝鮮に住み続け、現在もその子孫たちが韓国で暮らしている。彼の子孫たちの夢は日韓友好。日本と韓国は現在、歴史問題、領土問題などさまざまな問題を抱えており、決して良好な関係とは言えない。むしろその関係は冷え込む一方といえよう。政治・外交の面では、一朝一夕に関係を改善することは難しいかもしれない。しかし、民間レベルでは可能ではないだろうか。

本発表では、沙也可の子孫たちの活動に焦点を当て、民間レベルでの日韓両国の友好のあり方について考えてみたい。

### 第一章

沙也可は加藤清正の先鋒将として兵三千を率いて 1592 年 4 月 11 日、日本から出兵し、4 月 13 日に釜山に上陸。しかし、彼はこれを豊臣秀吉の大義なき出兵と考えた。当時の朝鮮の平和な社会、人倫、道義、文化などに憧れた彼は、上陸直後の 4 月 15 日に「暁諭書」を発し、4 月 20 日に兵を率いて朝鮮側に投降した。

上陸からわずか 2 日後に「暁諭書」を発表したことからも、彼が当初から朝鮮との戦う意志がなかったことがわかる。彼は朝鮮に帰順してから 1636 年に至るまで、生涯 6 回も戦場に出陣し、朝鮮王朝のために働いている。その功績により沙也可は当時の朝鮮王・宣祖王から朝鮮の民と認められ、金忠善（キム・チュンソン）という韓国名を賜っている。この名は、「忠臣」と「善行」を組み合わせたものだ。沙也可は、戦いで戦功を建てたほかにも、日本の進んだ技術を朝鮮側に伝授した。当時、朝鮮になかった鉄砲の製造技術、玉薬の作り方、射撃技術を伝えたとされる。沙也可は、朝鮮王朝と朝鮮の人々のために生涯を捧げ、1642 年 72 歳でこの世を去った。

Hosei University Repository

**第二章**

韓国南東部・大邱の郊外の山里には、沙也可とその一党が住み着いた「友鹿里（ウロンニ）」という集落があり、そこではいまも彼の子孫たちが暮らしている。「友鹿里」の名は、自然と交わり、つつましく暮らそうという意味で、沙也可自身がつけたものとされる。

この友鹿里には、沙也可が祭られている鹿洞書院や達城韓日友好館がある。鹿洞書院内には、講堂、記念館、向陽門などがあり、慕夏堂文集、親書、火縄銃などの遺品や遺物が展示されており、韓日友好館は、韓国と日本の歴史、伝統衣装、生活などを体験できる文化体験館、映像 PR 館のほか、韓日文化交流と友好の場として利用されている。子孫たちは「いつの日か両国の首脳会談が友鹿里で開かれれば」と夢を語っている。

子孫らは、日本の中でもとりわけ和歌山県との繋がりが強い。沙也可の正体は諸説あるが、その一つに和歌山県一帯に勢力を持った雑賀衆出身という説があるからである。韓日友好館の建設時には、和歌山県と和歌山市が展示物を提供し、2012 年 5 月 3 日のオープニングセレモニーには、大橋建一市長をはじめ、同市代表団が出席している。また和歌山市では「雑賀衆・沙也可（さやか）で街おこしの会」（辻健会長）が、「沙也可ゆかりの地マップ」を作成している。2010 年 11 月には、和歌山市の招きで、沙也可の子孫と「金忠善（沙也可）研究会」が同市で開催された沙也可顕彰碑除幕式（紀州東照宮境内）や沙也可日韓国際シンポジウムに参加している。

また、沙也可の子孫は、東日本大震災の際、被災者のために募金活動を行い、集まった義援金を自民党県連の地震緊急災害対策本部（二階俊博本部長）に送っている。このように、子孫たちは積極的に日本との友好活動を行っているのである。

**終章**

報告者は、今年 11 月 16 日に沙也可の子孫たちが暮らす韓国・友鹿里を訪問し、調査を行う予定である。そこで、沙也可の歴史や子孫たちの活動を調査するとともに、実際に子孫の方々に会って取材を行う予定である。学会では、この調査・取材の結果についても報告したい。

Hosei University Repository

吉野紗都（今泉ゼミ）

●発表タイトル

# 「中国における農村出身女性出稼ぎ労働者の実態―北京の「打工妹」の家政サービス業を中心に―」

本報告では、中国の農村出身女性の都市部への出稼ぎ家事労働者における低賃金労働や人権侵害などの問題を、北京の出稼ぎ女性を対象に明らかにする。

中国は、2003年にGDPが1000ドルを突破して以来、「世界の工場」を印象付けている。しかし、2012年の都市家庭1人当たりの可処分所得と農村家庭1人当たりの純収入には約1万6650元の開きがあり、現在でも都市と農村の地域間格差がますます拡大している。また、人口センサスによれば、2010年に都市部の常住人口は総人口の50％を占める6億6558万人であり、その4分の1は流動人口であった。この流動人口とは「農民工」と呼ばれる出稼ぎ労働者とその家族で、戸籍制度の制約によって都市において多くの社会問題を抱えている。また、「農民工」に関連する表現として農村出身の若い出稼ぎ女性を指す「打工妹」もあり、こうした表現が存在することにも、出稼ぎ女性は男性とは異なる対象として認識されていることが分かる。

打工妹は、中国の人口移動研究においてジェンダーの視点が欠けているとの問題が指摘され、その重要な対象として取り上げられるようになった。すなわち、中国の出稼ぎ女性の特徴には、女性に対する移動の選択の制限、低賃金労働者としての最も低い位置づけ、農村社会のジェンダー構造における性的分業の出稼ぎ先労働での再現の3点において、男性の出稼ぎとは異なるより深刻かつ複雑な問題が指摘されている。具体的に述べれば、農民工が低い職種階層に属する中でも、女性は最も低い職種階層、すなわちサービス業と工場労働に就業し、しかも上昇機会を与えられず低賃金労働に従事し続けており、その理由の一つには農村における男女の教育機会の不平等との関係性も指摘されている。打工妹が従事する低賃金労働のサービス業については、「家政サービス」業すなわち一般家庭の家事労働があり、こうした就労状況には市場経済への転換期における中国の再生産労働の再編と農村女性の都市移動の関係性が指摘されている。また、農村女性の出稼ぎの目的には、経済的要因に加え、生活に役立つ「技能」の習得や「交友手段」の確保などもあること、劣悪な労働環境下でも経済的自立を達成することで、農村出稼ぎ移動女性の考え方や自主意識とその変化が、家族や世帯をはじめ、農村全体のジェンダー構造に影響を及ぼすとの分析もある。

一方、打工妹の労働や生活の実態、問題の自覚や解決への動きを、中国のNGO「打工妹之家」の活動を通じて明らかにする研究もある。打工妹之家は北京市内の打工妹を支援する目的で1996年に設立され、女性出稼ぎ労働者のエンパワーメン

Hosei University Repository

トプログラムや法律援助、近年では権益保護アクショングループ、出稼ぎ女性のために法律相談ホットラインを提供し、傷害を受けた女性たちのためのアドボカシーもおこなってきた。その結果、農村女性自身が利害関係を語れることや、農村におけるジェンダー規範に気付き、女性に対する社会的期待とは異なるライフコースの選択にも向かわせる役割を果たしてきた。ただし、NGO の役割については、政府が統治構造の維持と経済開発を優先するという構造の矛盾に対する解決がない限り、打工妹が抱える問題は解決しないという批判もある。

以上の研究を踏まえ、本報告では北京の打工妹の家政サービス業の実態を明らかにすることで、中国の都市部と農村部の経済格差、これに由来する農村から都市への労働力移動、都市の農民工問題をジェンダーの視点から考察するとともに、NGO との接触からもたらされた打工妹の意識の変化にも視点を及ぼしながら、中国社会の格差問題を中国の「貧困の女性化」という観点から考察したい。

---

岩泉高志（今泉ゼミ）

●発表タイトル

## 東日本大震災からの漁村集落の復興ー宮城県石巻市鮎川浜を通して考えるー

本報告では宮城県石巻市の牡鹿半島に位置する鮎川浜が、どのように東日本大震災からの復興を進めていけばよいかを考察する。東日本大震災からの復興において、関東大震災以後の日本の復興観の主流となってきた土木事業中心の開発型の復興が強く唱えられ、被災者と被災社会が置き去りにされている。そこで、本報告では最初に、これまでの震災（特に関東大震災と阪神・淡路大震災）における開発型の復興がもつ問題を考察する。次に鮎川浜の被災者と被災社会を主体とする復興を考えるために、漁業と捕鯨を中心とした発展と衰退の歴史から地域社会の形成と特徴を明らかにし、これを踏まえて現在の行政と民間団体双方の復興をめぐる取り組みを検討し、鮎川浜にとっての復興を展望する。

鮎川浜は 1233 人（2012 年 4 月末）の漁村で、漁業資源が豊富な金華山沖に近く、江戸時代より漁業を中心産業とする浜であった。明治維新後も、しばらくは江戸時代からひき続いた漁業が営まれていた。一方、金華山沖は鯨が多く生息する地域でもあり、1906 年に鯨資源に目を付けた東洋捕鯨㈱（山口県に本拠地を置く）が鮎川浜に事業所を構え高業績を挙げると、多くの捕鯨会社が鮎川浜に進出して浜は栄えた。宮城県牡鹿郡を紹介するために 1923 年に出版された『牡鹿郡誌』によると、鮎川浜は、「十年以前までは僅々五十内外の荒寥たりし漁村」であったが「今や三倍以上の戸口を有し隠然市街を形成せり」と取り上げられており、当時の

Hosei University Repository

発展の様子を伺い知ることができる。捕鯨は第二次世界大戦中の一時中断を挟んで戦後も、金華山沖の小型捕鯨を中心に栄え、戦後日本の逼迫する食糧事情の中で、鯨肉を通して、貴重なタンパク質を国内に提供するという重要な役目を担った。その結果、浜の人口は、一貫して増え続け、1955 年に 3795 人となりピークに達した。しかし、1980 年代に商業捕鯨が停止に追い込まると状況は一変し、浜は衰退に向かった。したがって、現在は細々と調査捕鯨が行われている程度であるが、1953 年から「鯨祭り」が消防団、青年団、婦人会などを中心に開催され、現在まで継続して行われている（チリ地震と東日本大震災での一時中断を挟む）ことからも、捕鯨が地域社会の人々をつなぎ、まとめあげる重要な要素の一つとなっているといえよう。

東日本大震災で鮎川浜は牡鹿半島最大の 8.6 メートルの津波を記録し、壊滅的な被害を受けた。漁港や卸売市場、漁協組合事務所、鯨解剖所などの漁業・捕鯨関連施設が、津波で使用不可となり、浜の中心産業が大打撃を受けた。現在、漁港の 6 割は復旧が完了し、卸売市場は再開しているが、完全に復旧したとは言えない状況である。

鮎川浜の復興を研究するに当たり、社会学者の宮原浩二郎氏の「再生型」の復興の考え方に注目したい。「再生型」の復興とは、「災害によって衰えた被災者および被災者が再生すること」であり、被災者の生活や住宅の再建を周辺部に位置づける開発型の復興観に対して、人々の暮らしや住まいを復興の中心に据える考え方である。

東日本大震災からの鮎川浜の復興支援活動に関しては、建築家や建築学を専攻する学生によって設立された ArchiAid（アーキエイド）の活動に注目したい。ArchiAid は 2011 年 8 月に牡鹿半島の 30 の浜で 5 日間のワークキャンプを行い、浜の住民たちのたちと対話を重ね、浜ごとの復興プランを作成し、それを住民たちの前で発表を通して、一連の復興プランを最終報告書にまとめ石巻市に提出している 。ArchiAid の鮎川担当チームは、浜の住民からの意見を大切にし、街の中心部を高台移転に移転するプランとできるだけ沿岸部の嵩上げに再建する復興プランを提示している。本報告では、浜の歴史や特徴を踏まえたうえで、それらの復興プランが適切であるのかも考えたい。

以上を踏まえ、発表者は鮎川浜の地域社会の特徴を歴史な過程のなかで捉えた上で、開発型の復興を批判的に検討しながら、地域社会を主体とする復興を考えたい。

Hosei University Repository

光山佳絵（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

# 化粧の歴史から辿る日本文化とは

昔も現代も、女性たちが“美”を追求する姿勢は変わらない。では、女性たちは一体どのような“美”を追求しているのか、女性たちもしくは現代において、何が“美”とされるのかを考えた時、私は、数年前に流行った服装や化粧でも、今になって見てみると信じられないほどださく感じてしまった経験を思い浮かべた。また、明・清王朝期時代の中国では、纏足によってよちよち歩きをすることが女性にとってのステイタスとされていた。纏足というのは、女性の足に子供の時から布を堅く巻きつけ、成長してもできるだけ足を小さくする風習のことだ。それによって足の長さが通常の三分の一（約七～八センチメートル）になり、足が小さいほど美人であるとされたのだ。しかし現代を生きる私たちにとって、纏足という風習は足に健康的でなく、また大人の女性のよちよち歩きの一体どこが美しいのだろうかと捉えるであろう。したがって、“美”というものは、時代や文化、地域・場所によって大きく異なり、その“美”の歴史を辿ることで、一つの文化の歴史を辿ることができると考える。本研究では、“美”を追求するために誰もが行う“化粧”に焦点を当てることで日本文化の歴史を辿り、また“化粧”というものが現代ではどのように捉えられているのか、昔と比べて変化はあるのかを考察したい。

第一章では、「化粧」の意味を辞書から探る。辞書に表記されている言語やその意味というのは、その時代背景の影響を十分に受けているものだと考える。したがって、編纂された時代が異なるいくつかの辞書から「化粧」の意味を探ることで、「化粧」とは何であり、誰がするものであったのか、また「化粧」という概念の変化を時代を追って探る。次に、「化粧」が始まることとなった目的と機能に触れ、「化粧」を呪術・魔除け的観点から見ることや、顔を装う効果だけでなくこころや体への効果も探る。

第二章では、大きく時代区分して「化粧」の歴史を辿る。時代区分は古代～中世、江戸、近代、戦後、現代の５つである。各時代における化粧のきまりごとや、何が“美”とされていたのかを探ることで、時代ごとに深く日本文化を追求することを目的とする。

第三章では、「化粧」という行為自体に着目し、現代において「化粧行為」がもたらすこととは一体何かを探る。そうすることで、昔と現代の相違点を明白にし、また「化粧行為」から見る現代人の姿も明らかにする。

最後に、今までの研究を踏まえて、「化粧」の歴史から見てきた日本文化というものはどのような文化であったのかを考察したい。また、“美”と同様に「化粧」という行為も時代とともに変化し、文化的にも社会的にもとても密接した行為で

Hosei University Repository

あることを伝えたい。

**参考文献**

・石田かおり『化粧せずには生きられない人間の歴史』講談社現代新書 2000 年
・村澤博人『美人進化論　顔の文化誌』東京書籍 1987 年
・村澤博人『顔の文化誌』東京選書 1992 年
・平松隆円『化粧にみる日本文化―だれのためによそおうのか？―』水曜社 2009 年

---

中島望（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

# 変わりつつある韓国の対日感情

## １．問題の所在

「あなたは、韓国（日本）に、親しみを感じますか、感じませんか」これは、2014 年 6 月の読売新聞社と韓国日報社の日韓共同世論調査の質問項目の一つである。韓国ではこれに「感じる」と答えた人は 21%、「感じない」と答えた人は 77% に及んだ[1]。日本と韓国は解決の難しい歴史的、領土的問題を抱え、「近くて遠い国」とも言われるように、日韓関係は良好とは言えない。先の数値が表すように韓国人の半数以上は日本に対してあまり良い印象を持っていない。その原因として、しばしば論じられるのが、韓国の学校教育やマスコミ報道であるが、それらは本当に「負」の対日感情だけを韓国の人々に植え付けているのであろうか。

## ２．韓国の「負」の対日感情とその淵源としての学校教育、マスコミ報道

1980 年代以降、韓国の対日感情は急速に悪化していった。東亜日報社と朝日新聞社が 84 年から行っている共同世論調査[2]によると、日本が「好きだ」と答えた人は 84 年の 23% から、88 年は 14%、90 年は 5 %、95 年は 6 % と減少している。逆に「嫌いだ」と答えた人は、84 年に 39 %だったものが、88 年は 51%、90 年は 66%、95 年は 69% と増加している。

その原因として、しばしば論じられるのが韓国の学校教育とマスコミ報道である。

韓国の歴史教科書では、日本から受けた被害が詳細に記されており、植民地時代の章には、日本から受けた受難を「民族の試練」という題目でまとめた節もある[3]。世宗大学校日本文学科教授の朴裕河氏は韓国の教育について次のように指摘する。「私たちが反日意識からなかなか脱け出せないのは、私たちの歴史の暗い部分は覆い隠したまま、日本人の蛮行にばかりアクセントが置かれた教育を受けてきたせいである。」[4]

Hosei University Repository

また、ライターの崔碩栄氏は、韓国のマスコミ報道について次のように批判している。「（韓国での日本報道には）内容が正しいか、正しくないかは置いといて、とりあえず報道する傾向があり（中略）その影響で嘘、間違いが紛れ込んだ報道が溢れている。なぜか日本関連ニュースだけに高い関心を示す韓国社会にも問題があるが、それを利用し刺激的なニュースを繰り返して量産する韓国マスコミの責任と罪も少なくない。[5]」

**３．韓国は本当に「反日」的なのか？**

一方、注目すべきなのは、2000年以降になると、韓国の対日感情が改善に向かっていることだ。前述の共同世論調査によると、日本が「好きだ」という回答は、2002年、2012年には12%まで回復し、「嫌いだ」という回答は02年には57%、12年は50%と減少している。

それに相まってか、2000年以降に登場した韓国の教科書、あるいはマスコミ報道の中には、日本の「負」の部分だけなく、「正」の部分も伝えようという変化が見られるのである。例えば、セウォル号沈没事故の後に、日本の安全管理の先進性を紹介した一連の新聞報道などは、そのよい例だろう[6]。

こうした韓国の学校教育、マスコミ報道の変化は、1998年の金大中政権時代に始まった日本の大衆文化の開放とあいまって、韓国の若者の対日感情に変化をもたらしている。中央日報が2010年に行った世論調査によると、今でも日本は韓国人が「最も嫌いな国」ではあるが、その比率は5年前に比べ半分近くに減り、とりわけ20代では「最も嫌いな国」ではなくなっているのである。[7]

**４．結論――日韓両国の相互理解のために**

日韓両国には、韓国の「反日」というイメージが日本に伝えられ、日本の「嫌韓」やヘイトスピーチを生み出し、その「嫌韓」やヘイトスピーチが韓国に伝えられて、さらなる「反日」感情を生み出すという悪循環を繰り返してきた。しかし、国際文化学部に学ぶ私たちは、多くの韓国人が教科書やマスコミの報道から日本に対して悪いイメージを抱くように、マスコミやネットが流すステレオタイプの情報を鵜呑みにするのではなく、韓国にいま起こりつつある変化を正しく認識することが必要であろう。

**注釈**

1　『読売新聞』2014年6月7日朝刊
2　『朝日新聞』1995年7月29日朝刊
3　大槻健、君島和彦、申奎燮訳『新版韓国の歴史――国定韓国高等学校歴史教科書』（明石書店、2003年）
4　朴裕河『反日ナショナリズムを超えて：韓国人の反日感情を読み解く』（河出書房新社 2005年）
5　崔碩栄『韓国人が書いた韓国が「反日国家」である本当の理由』（彩図社、2012年）

Hosei University Repository

『中央日報・日本語版』2014 年 4 月 21 日
『中央日報・日本語版』2010 年 1 月 11 日

---

西村経立（大澤・島田ゼミ）

●発表タイトル

## ギャンブルは麻薬である。

メンタルクリニックに行く必要のある病的なギャンブラーの実に 8 割はパチンコやスロットをしている。他に競馬、競艇、麻雀等にはまる者もいるがほぼ病的なギャンブラーを生み出しているのはパチンコ業界である。駅前にあって、いつでも遊戯ができ、過大な広告や射幸性を煽る遊戯方式が危険である原因にあげられる。パチンコを始める年代は大体 18 歳から 22 歳と大学生くらいの年代が多い。大学生は遊ぶ時間が多くあり、学校の近くにパチンコ店があり、友達に先輩に誘われれば行く人も多いと思われる。友達と行く事が習慣になれば日に日にもっと大きなお金を得られるのではと考え始め、賭ける金額は次第に大きくなる。このように大学生にとってはギャンブルに触れるきっかけとなることが多い。身の回りのパチンコ等ギャンブルを経験したことのある 10 人に聞いてみたところ、9 人が友人や先輩に誘われたから、1 人が父親に連れて行かれたのがきっかけであった。このように、大学生は誘われる事で興味をもちパチンコを始める人が多く、ギャンブルを知る事でのちに大人になっていく上で病的なギャンブラーになりうる。

ギャンブルにはまってしまった人々特に病的ギャンブラーは、借金し、嘘をつくという 2 つの症状がある。ギャンブルはもちろん世間体の良い物ではない、親や友人にギャンブルしているのがばれないように嘘をつく。ギャンブルをして借金ができれば、嘘の理由で親にお金を借りそのお金またパチンコ店にいき、失った賭け金を取り返そうと考える。結果借金をするようになれば、借金はどんどん増えていき、だれにも言えなくなり嘘をついて、自分をあたかも真人間のように装う。ギャンブルによって借金が出来たとは友人には言えても家族に言う事は決して出来ないでしょう。しかし、借金が大きくなれば一人では返済出来なくなり、追い込まれる。社会的信用はなくなり、学生ならば学業に、社会人であれば仕事に支障をきたす事は間違いない。このように麻薬中毒のように、脳はギャンブルによって興奮し快感を得る事がやめられなくなっていている。エスカレートすれば借金で首が回らなくなり自殺する例は実際にあり、そのまま大人になり、子供が出来ても病的ギャンブラーは負けた腹いせに子供に虐待し、殺してしまう例もある。

このように、身近にいるギャンブルをしている人間が病的ギャンブラーにな

Hosei University Repository

れば最悪のケースになりうるということだ。現在日本では、深夜のテレビ等で競馬やパチンコの番組をお笑い芸人が楽しそうに行って、カジノを日本にも作ろうとする動きを国が行おうとしています。日本はこうしたギャンブルに対しゆるい考えをもっている。韓国も日本と同じようなパチンコがあるが、一方韓国では、2006年に依存症の危険性を認識して法律で禁止にした。日本も同じように依存症の危険性から禁止すべきだが、韓国より日本は大きな産業となっている。パチンコ産業は禁止にすれば景気が傾くと恐れられていているため国は見てみぬふりを続けている。

このように現在日本のギャンブル状況は大変危険であり、もはや覚せい剤、脱法ハーブと同じような依存性のもつ危険麻薬であると思われる。ギャンブルを行う人、またその身の回りにも悪影響を及ぼし、人生を破綻させる可能性を秘めている点全く麻薬と変わりない。危険であると認識されていないため、ギャンブルは触れるきっかけは多く麻薬よりも恐ろしい物であると考えられる。パチンコという変わった形式のギャンブルが横行しているため他の先進国と比較出来ず、日本はこの事実に盲目になっているとしか考えられない。今のギャンブル依存症たちの状況を把握し、パチンコ等のギャンブルは国民の生活を考え禁止するべきだと思われる。また、ギャンブルは麻薬等と同じく一回始めると中毒性が強くやめられなくなる危険性があり、誘われてもギャンブルはすべきではないと思われる。

---

古谷宏平（島野ゼミ）

●発表タイトル

## 洞窟から見た沖縄の宗教

本論文では日本国内の中でも独自の宗教観が発達してきた沖縄県の信仰について述べる。

さて、日本人にとって宗教とは非常にあいまいな存在である。仏教徒でありながらクリスマスを祝ったり祈願のために神社を訪れたりすることはごく日常的な風景であるが、このような現象には日本古来のアニミズム信仰が影響していると考えられている。一神教とは異なり日本には多くの神が存在するため、それにより宗教的な寛容さが根付いているといわれている。

日本書紀や古事記といった書物の中にもアマテラスオオミカミをはじめとして多くの神々が登場し国を形作ったとされている。実際には北は北海道、南は沖縄まである日本列島だが建国神話には沖縄はふくまれていない。しかし沖縄には独自の開びゃく神話があり、本土の建国神話とは異なる神が登場する。

沖縄の宗教の独自性の例は他にも代表的なものがいくつかあり、ニライカナイ

Hosei University Repository

と呼ばれるこの世とは異なる海の向こう（あるいは地下）に神々が住む世界があると考えられている。この沖縄独自の神々を迎える祈りの場である「御嶽（うたき）」や神を憑依させる女子霊媒師「ノロ」あるいは「ユタ」の存在など、琉球王府時代から存在する沖縄独自の宗教観が今も残っている。

独自の宗教以外の特徴として、沖縄にはニライカナイのような土着の宗教と本土から伝わった宗教が融合した神社が存在する。例えば、沖縄本島（沖縄島）には琉球王府から特別な保護を受けたような神社が8つ存在し、これらは「琉球八社」と呼ばれている。八社のうち七社は和歌山の熊野権現を勧請し、祀っている（残り一つの安里八幡宮のみ八幡宮を勧請）。さらにこの熊野権現について特徴的なことは多くが洞窟の中に社が存在することだ。これが、「宗教が融合した」と言える点である。沖縄には1000を超える洞窟があるといわれておりニライカナイへの入り口や生命再生の場などと考えられ、神聖な場として信仰の対象とされてきた。人々に外部からの神である熊野権現を受け入れてもらうために、神聖な場である洞窟を利用することでその存在に説得力を与えたと考えられる。

本論文では沖縄の開びゃく神話やニライカナイなどの信仰の特徴、琉球八社や現代の宗教観について研究を行ったが、そこから考えられることは沖縄の宗教に対する柔軟さである。神話の時代からの信仰であるニライカナイ信仰は現在でも人々に定着しているが、一方で熊野権現のような比較的新しい外部からの神も受け入れられており、しかもニライカナイ信仰と融合している。古くからの信仰を大切にし、新しい価値観も拒まずに受け入れることが沖縄の宗教における特徴の一つではないか。

沖縄は本土の人々には人気観光地であり多くの人々に愛される土地だが、内面について深く考える機会はあまりないのではないだろうか。沖縄の文化とは切っても切り離せない宗教観を知ることによって沖縄県とその文化をより深く知ることができるのではないだろうか。

---

齊藤光（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

## ゼロ号と呼ばれた男

今から70年前の1944年、一人の若者が空に散った。その若者は、久納好孚（くのうこうふ）という名の人物である。彼は特別攻撃隊、いわゆる特攻隊として命を落とした。そのとき、彼はまだ若く、私と同じ23歳であった。

どうして私が久納を取り上げようと思ったのか。それは、久納好孚がゼロ号の男と呼ばれていたという話を聞いた時だった。記録の中で特攻隊第1号とされる

Hosei University Repository

のは、関行男（せき　ゆきお）という海軍兵学校出身の人物なのだが、久納は関より4日早く出撃している。しかし戦果確認をされなかったため、出撃が未確認と報告され、一部ではゼロ号とされてきたのだ。未だに「特攻1号」問題として、どちらが最初であるか議論になることがあるらしいのだが、私が関心を持った点はそこではない。数多くの特攻隊員がいるなかで、こうしてゼロ号として議題に挙がっていた人物が、私と同じく法政大学で学んでいたOBだという事を知ったからだ。昨年、沖縄の集団自決についての映像制作を経験し、私自身、戦争の知らない面が見え、過去の『戦争』という事実を知らないことへの怖さを覚えた。しかし、その頃から、もっと自分たち学生にとって身近な視点から戦争を見つめることはできないだろうか、と考え始めた。そんな時に久納好孚という存在を知ったのである。彼ならば、大学のOBであり、私達と同世代の時に戦争に巻き込まれたため、彼の人生を後追いすることで、より近い目線で戦争について考えられるのではと考えついたのである。

久納好孚は1921年、回教師として日本から派遣された父・察冏と母・しずの四男として、朝鮮仁川府で生まれた。久納は幼くして父親を亡くし、教育上、自由放任主義であった母に育てられたことにより大衆の意見に屈しない人物へと成長していった。次のようなエピソードがある。久納が朝鮮にある大田中学校に通っていたころ、朝鮮では「内鮮一体政策」がとられ、日本の教育がなされていた。学内では日本人の成績の悪い子は「朝鮮人みたいなやつ」といわれて、子供の世界の日本人と朝鮮人の間柄は微妙なものであったのだが、久納好孚は違った。久納家には朝鮮人の下男がいた。ある日、その下男が日本人の子供にいじめられてきたことがあった。すると久納は、いじめた日本人の子供たちを殴り返して帰ってきたという。日本人の立場が大きくなっている世の中に左右されず、「新日本人」としての立ち位置に困惑する朝鮮人を助けようとしており、自由な思考を持っていたことがよくわかる。

また、特攻隊として我先に飛んで行ったため、軍国主義の人間だったのかというとそうではない。甥の久納慶一氏曰く、慶一氏が幼い頃の将来の夢として「陸軍大将」を挙げると、「バカを言うな、実業家になれ。」と話したという。当時の学生は、戦いに積極的であったのだろう、そうでなければならないのだという私の中の考え方を壊した記述であった。

そのほかに、久納は、音楽や映画にも興味を持っていて、今を生きる大学生にも似た姿も見せている。ラッパ演奏者を夢にしていた時期もあり、特攻に出撃する前夜にはピアノをひとり弾いていたであるとか音楽を身近なものとしていたことがうかがえる。また、映画を見るために映画館までの40キロの道のりを自転車で向かっていたという話もある。

今回の研究では、こうした久納好孚の一生を中心にして、特攻隊とはどういっ

Hosei University Repository

たものなのか、学徒として戦争に向かう学生の心境、戦前・戦時中の法大生・留学生の様子、という内容もあわせて、まとめていく。『当時の学生の立場から見た戦争』という視点を意識して、今を生きる大学生が戦争について考えるきっかけを作りたいと考えている。

---

齊藤ふみ（島野ゼミ）

●発表タイトル

## 自然環境の保護と観光の両立〜オルタナティヴ・ツーリズムの可能性

観光は、ゲスト側にとっては良い刺激となり、ホスト側にとっては大きな収入源となるものである。同時に、観光開発や観光客のマナーの悪さが、地元の自然を損なうこともある。それを解決する手段として、持続可能な観光を目指すオルタナティヴ・ツーリズムという考え方がある。そうした例も参考にしつつ、自然環境の保護と観光の両立の道を探っていきたい。

観光業による自然環境への影響の中の、観光開発による自然破壊の例としては、沖縄県西表島のトゥドゥマリの浜や、タイのサムイ島でのリゾート開発が挙げられる。

観光客のマナー問題、ごみ問題の例としては、静岡県の富士山やイタリアのベネツィアが挙げられる。

こうした問題を解決する為の手段として考え出されたのがオルタナティヴ・ツーリズムである。オルタナティヴ・ツーリズムとは、マス・ツーリズムや近代観光批判を前提とした、自然保護の立場から唱えられた観光方式である。その例としては、以下の様なものがある。

**①グリーン・ツーリズム**

農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動である。また、農産地を訪れるグリーン・ツーリズムを、更に体験型に特化し、積極的な参加型コミュニケーションを図ったものを、アグリ・ツーリズム（イギリスではルーラル・ツーリズム）と呼ぶこともある。

**②エコ・ツーリズム**

「環境問題が重要な社会問題と認識される世界において、自然を中心とした現象を主な対象とし、自然保護、環境問題への指向性をもった観光が生み出した諸々の社会現象」と定義されている。

Hosei University Repository

**・実践例**

**①北海道　知床**

地域内最大の観光地である知床五湖の遊歩道散策に関しては、自由利用可能エリアと要手続きエリアのどちらかを利用者が選ぶ、「２つの五湖」のルールが導入された。内一つは、展望台や無料高架木道のある道で、もう一つは森と湖を巡る地上遊歩道で、ヒグマに遭遇する可能性があるので準備が必要となる。

**②埼玉県　飯能市**

里地里山の景観をエコツアーの対象としている。エコツーリズム推進法に基づく推進協議会が2008年５月に設立され、2009年９月に認定された。メンバーは、学識経験者、自治会、商店街、観光強者、農林業、自然保護団体、文化財保護、伝統芸能保存会の代表と関係行政機関の職員から成る。全体構想の目的は自然環境の保全だけでなく、地域振興に大きな重点が置かれている。

**③長野県　飯田市**

グリーン・ツーリズムの一種であるラーニング・バケーションを行っており、体験活動の指導者育成を目指す「南信州あぐり大学院」や、農業後継者不足を解決するための「飯田型ワーキングホリデー」がその例である。

勿論、オルタンティヴ・ツーリズムも完全ではないので、自然や地域に与える影響を考慮せねばならない。『地域資源を守っていかすエコツーリズム　人と自然の共生システム』によれば、主に以下の様な影響が考えられる。

**①自然環境への影響**

登山者による高山帯の土壌侵食、高山植物の踏みつけによる植生破壊、動物の生息地への登山者の進入による行動変容や、登山者の屎尿による水質悪化等が挙げられる。

**②経済への影響**

宿泊業や飲食業、金融業など多岐にわたる産業に影響を与える。所得増減や季節の影響も受けやすい。

**③社会への影響**

交通混雑や華美な広告の蔓延といった直接的なものと、観光振興に伴い地域外から新たな文化・考え方が持ち込まれる事で生じる間接的なものがある。

こうした影響へのモニタリングを欠かさず、対処する事が必要である。

**・まとめとこれからの観光のあるべき姿**

自然を損なわないような配慮が欠かせない。観光客に迎合するだけでなく、地元民の利益も重視せねばならない。また、なるべく多くの人が関わることが望ましい。そして、地域全体の利益に関わる事ゆえ、行政の協力は不可欠である。

Hosei University Repository

高橋ゆりか（松本悟ゼミ）

●発表タイトル

# 幼い命を救いたい―チェコ共和国と岩手県の乳児死亡率研究―

本研究の目的は、チェコ共和国（以下、チェコ）と岩手県沢内村の事例研究を通して乳児死亡率が改善する要因を探究することである。

2015年までの貧困削減の国際目標を掲げたMDGs（国連ミレニアム開発目標）は達成困難であり、特に5歳未満の乳幼児死亡率の削減は目標に遠く及ばない（2010年版ODA白書）。どうすれば開発途上国の幼い命を救うことができるのか。それを明らかにするため、本研究では「なぜチェコは35年間で乳幼児死亡率を6分の1に減らすことができたのか」という問いに取り組む。

チェコは筆者が高校2年の1年間留学した国で、その後も興味を抱いて文献を読んでいたところ、この国が乳幼児死亡率を劇的に改善したことを知った。1970年から35年間で乳幼児死亡率は6分の1、1歳未満で命を落とす乳児死亡率は7分の1に減少した。一方で、1人当たり国内総生産（GDP）はほぼ横ばいだった。経済成長がなくても幼い命を救えることを示唆している。日本のチェコ研究は経済分野が中心で、社会的側面に当てる本研究は極めてユニークである。反面日本語の文献がほとんどないため、チェコ語の文献研究と現地聞き取り調査を主な研究方法とした。

問いへの仮説は、1960年代初頭に日本で初めて乳児死亡率ゼロを達成した岩手県沢内村（現在の西和賀町）の事例から導いた。経済的にまだ貧しかった日本の寒村でなぜ幼い命を救えたのか。70年代のチェコに類似した状況であり、途上国支援につながる教訓が得られると考えたからである。原因は2つあった。1つは出産や育児にかかる費用の実質無料化（太田ら、2010： p114-115）で、もう1つは地域医療や保健教育の充実（佐々木、p63）である。経済発展や医療技術の向上ではなかった。そこで筆者は「チェコも医療が無料化され、地域活動による住民への保健教育などの結果乳児死亡率が低下した」との仮説を立てた。

この仮説を検証するため、筆者は今年6月に2週間チェコのブルノを訪問し、アンケート調査、インタビュー調査、既存文献調査を実施した。その際、チェコ語から英語への通訳・翻訳を現地でお願いした。

調査の結果、仮説の1点目は支持された。社会主義体制だったチェコは医療費全額無料だった。しかし、それは全国一律の政策だったため、沢内村のような地域活動ではなく国全体で乳児死亡に焦点を絞った活動が行われた。したがって仮説の2点目は棄却された。国の取り組みのポイントは2点あった（Zdenek、2004）。第1に意識改革である。乳児死亡率に対する問題意識を政府と国民で共有

Hosei University Repository

した。第２に、乳児死亡率が高くなる原因を探ることである。継続的なモニタリングで細かい原因をみつけ、個別に対策を行った。その結果、チェコの乳児死亡率は劇的に改善したと言える。

沢内村とチェコに共通して言えるのは、乳児死亡率の低下は、必ずしも国全体の経済発展と関係しているわけではなく、むしろそれをターゲットにした医療費無料化や地域や国レベルの意識改革、細やかな保健政策が重要だという点である。乳児が死亡する原因について、地域特有の原因を分析し、それにあった対策を採ることで幼い命を救える。冒頭で筆者が述べた途上国支援の視点から捉え直せば、乳児死亡率の高い国にインフラを整備して経済発展をさせようというのは、この問題の解決にとって必ずしも効果的な方策とはいえない。MDGs 達成のためには、その国や地域をまずはしっかりとモニタリングしたうえで、それに見合った方法によるアプローチを行うことが重要である。

**参考文献**

・外務省、2010、2010 年度版　政府開発援助（ODA）白書.
・太田祖電ら、2010、沢内村奮闘記、あけび書房.
・佐々木久美子、2007、「岩手県における地域保健の充実の背景―広大な県土と貧しさが生んだもの―」、総合政策第９巻第１号、pp.59-68、岩手県立大学大学院総合政策研究科.
・Stembera, Zdenek, 2004, HISTORIE CESKE PERINATOLOGIE, MAKDORF.

---

和田望（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

## 小学生の英語教育

平成 23 年度に財団法人日本青少年研究所が米国、中国、韓国、日本の高校１年生から３年生を対象とし行った『高校生の生活意識と留学に関する調査報告書』によると、日本人生徒の 42.8％が留学に興味がないと答えており、これは他国と比べ最も高い数値となっている。彼らが留学したくないと述べる理由の上位３つは、“自分の国のほうが暮らしやすいから”“言葉の壁があるから”そして“外国で一人で生活する自信がないから”であった。この中で注目したい点は、２番目に多い“言葉の壁があるから”という理由だ。産業能率大学が 2013 年に発表した報告書では、新入社員の 58.3％が「海外で働きたいとは思わない」と答えており、その 65.2％が「自分の語学力に自信がないから」と答え一番多い理由となっている。このような傾向は“内向き志向”と呼ばれ、海外への興味を失った若者に引用され

Hosei University Repository

ることが多い。自分の国が暮らしやすく、外国での生活や言葉が不安だから、留学や海外で働くのはめんどくさい。確かにこれらの意見も納得できる。しかしグローバル化が進み、国家間の壁というものが薄くなってきている今、このように海外へ出ていく事を選択の一つに入れることが今後の個人、そして国の成長にががるのではないだろうか。

昨年 12 月にはグローバル化に対応した「英語教育課企画実施計画」が告示され、2020 年をめどに小学校第３．４学年から活動型、第５．６学年からは教科型の外国語授業開始が決定した。これに伴い、再び早期英語教育に関する議論が活発となっている。賛成派反対派両者には様々な意見があるが、そもそも早期と言われる小学生の英語教育は効果的なのだろうか。言語を学ぶ上で最も効果的な順序は、“聞く”“話す”“読む”“書く”だと言われている。これは人間が生まれてから文字を理解するよりも前に、周囲の人が発する言葉を聞き分けながら言語を習得していく事からも、いかに“音声”が言語学習にとって重要であることがわかるだろう。現在行われている脳科学の知見によると、児童期（およそ 13 歳まで）は日本語の音声形態がまだ完全には大脳に根を下ろさず、論理的裏付けなしに言語を吸収する時期[1]とされている。これは聴覚が視覚よりも優れている期間であり、聴覚が勝っていることによって、聞いた音声を母語で代用せずに再生する事が出来るということだ。E.H.Lenneberg のアメリカ移民の言語における調査においても、13 歳までにアメリカへ移民をした人々の方が、ネイティブと同じように流暢な英語を身に付ける事が出来る事がわかっている。つまり、まず身に付けるべき“聞く”“話す”にとって重要な音声の技能は、早期から教育を行うことで言語を学ぶ環境を整え、次のステップである“読む”“書く”へのスムーズな移行を導くのではないかと考える。

では、海外の早期英語教育はどのような事が実践されているのだろうか。本発表では韓国の事例を参考に、今後の日本の早期教育内容を検討していく。今回韓国の事例を取り上げる理由としては、２点ある。まず１点目は、英語を母語とする人が外国語を学ぶ場合の難易度を５段階で評価した場合、韓国語が日本語と同様の最高難易度の５を獲得[2]しているという事。２点目は、韓国が 1997 年から小学校３年生からの英語教育を実施しており、日本よりも長い歴史を持っているという点で、過去の事例から学ぶものがあるのではないかと考えたためだ。

以上の内容を踏まえ本発表では、いつから、どのような教育をすることで日本人のもつ英語に対する苦手意識を軽減させ、実践的な英語力を身に付けることができるのかを明らかにしていく。

**注釈**

1　八十木裕幸　三島出．(1980,03)．聴覚器官を重視した第二言語教育方法の研究．北海道駒澤大學研究紀要 15.

Hosei University Repository

2　KeikoYonaha. (2011,07). Elementary school English Education Two Influential Factors Found in Comparison of Japan and South Korea. 名桜大学紀行 .

---

柴田采佳（松本ゼミ）

●発表タイトル

# 本当にスラム街って住みにくいの？ - スラム街住民へのインタビューから考える -

## 1　背景と問い

本論文の目的は、なぜスラム街に人々が住み続けるのかを明らかにすることを通じて、スラム街への新たな視点を構築することである。筆者らの所属する国際協力をテーマとしたゼミは今年の夏にフィリピンでのフィールドワークを実施し、フィリピンの首都マニラの都市貧困地区を訪れた。事前に行った都市貧困に関する既存文献レビューから、フィリピンでは農村から都市への人口流入が毎年増加している（安食　2004）ことがわかった。また佐々木（1999）によると、これら都市へ流入する人々の多くはスクオッター（不法占拠者）と言われ、その数は300万人にも達しており、彼らの居住地区の人口密度は非常に高く、その環境の悪化が指摘され続けているという。これらから筆者らは「なぜ人々は劣悪な環境であるにもかかわらず、スラム街に住み続けるのか」という問いを設定した。

## 2．仮説

フィリピンにおける地方からマニラ首都圏への移住理由の多くが求職である（中西　1988）。しかしマニラにおける雇用形態は、６か月以内と期間が区切られた契約労働が増加している（中西　小玉　新津　2001）。つまり都市での不安定な就労が増加しているといえる。そこで筆者らはスラム街に住む人々は「都市で仕事が見つかる」という期待感を持って移住したが、安定した職を得ることができず、スラム街にとどまっているのではないかと推測し、「雇用機会は得たが収入が不安定であるためスラム街から抜け出すことができない」という仮説を構築した。

## 3．仮説検証方法

マニラの都市貧困地区ナボタスにおいて、筆者らは４グループに分かれ、計８世帯に半構造化インタビューを行った。「住み続ける」理由を明らかにするため、ナボタスに暮らし始めて１年以上の家庭をインタビュー対象者として選定した。

## 4．仮説検証・分析

仮説は支持された。その理由は、多くの家庭が１日の収入が支出を下回っているからだ。これは収入が不十分であるといえる。さらに「スラムに仕事があること、農村にもう自分の家はないこと、農村に戻るまでの交通費がないことから、農村

Hosei University Repository

に戻りたくても戻れない」「他に選択肢はない」と答えた人がいたことから仕方なくスラム街に住んでいることが伺える。

また、以上の理由の他にスラム街に住む３つの新たな要因がわかった。１つ目は都市貧困層を支援する住民組織 ”KADAMAY” の存在である。住民はKADAMAY から支援を受けている。例えば、スラム街に住むことを認めてもらうための政府への申し出のサポートや、子供への再教育や家の再建築の手伝いなどである。２つ目は近隣住民との助け合いだ。インタビュー対象者全員が近所の人との助け合いをしている。台風や地震などの自然災害時には互いに注意喚起をし、時にはお金の貸し借りを行っていることがわかった。３つ目は子供への教育である。子持ちの家庭の世帯主は、子供がナボタス地区の小学校に通っており、子供への教育や子供の友人関係のためにもここを離れることはできないと述べた。金銭面以外での、スラム街に住む理由が新たに明らかとなった。

## ５．結論

「劣悪な環境であるにもかかわらずスラム街に住み続けるのはなぜか」という問いに対して筆者らは「収入が不十分でありスラム街から抜け出せないが、一方で住民組織や近隣の住民が彼らの生活の中で重要な存在であるから」という結論を提示する。

## ６．考察

既存文献から筆者らのスラム街に対するイメージは「臭い」「汚い」など悪いものであった。実際にスラム街を訪れたところ、確かに住居の周りには捨てられたゴミが散乱し、悪臭が漂っていた。また住居に入った瞬間に汗が噴き出るほどの暑さを感じ、筆者らはスラム街の住環境の酷さを実感した。しかしインタビューを通して、移住前はなかった雇用機会に恵まれ、住民組織や近隣住民にも支えられる環境にあることがわかった。このことから筆者らはスラム街に住む人にとって、スラム街というのは実は、住みやすい条件もある場所であり、彼らはスラム街から抜け出せないのではなく、抜け出さないのではないかと考える。

## 参考文献

・中西徹ら、2001、「アジアの大都市４　マニラ」、日本評論社
・中西徹、1988、「フィリピンにおける都市貧困部門（Ｉ）- マニラ首都圏のスラム住込み調査から - 」、アジア経済研究所
・安食、2004、「フィリピン・レイテ島集落からの人口移動について」、三重大学人文学部文化学科研究紀要
・佐々木一恵、1999、「ニューラル・セルラーオートマトンを用いた土地利用 － 人口モデルの構築 － フィリピン , メトロマニラ都市圏を対象として -」、都市計画 . 別冊 , 都市計画論文集

Hosei University Repository

須江玲奈（松本ゼミ）

●発表タイトル

# 在日外国人の精神疾患から考えるグローバル化

本論文の目的は、在日外国人の精神疾患について考察することである。筆者は身近に精神疾患を抱えている者がおり、その深刻さを目の当たりにしてきた。ましてや異国で精神疾患を抱える外国人の困難はなおさらだと考える。この分野における国内唯一の組織の多文化間精神医学会によれば、在日外国人が深刻な精神疾患を抱えている一方で、十分な対応がなされていない。そこで本論文は、「なぜ精神疾患を抱える在日外国人への対応が進んでいないのか」という問いに取り組む。

仮説を構築するために、多文化間精神医学会誌や在日外国人の精神疾患に関する文献をレビューしたところ、在日外国人が精神疾患を抱える理由は大きく２つあることがわかった。１つ目は、家庭内や職場など個人の属する環境で起こる対人関係によるもので、もう１つは日本には欧米出身者を受け入れる素地があるが、それ以外の国の人々に対して十分開かれているとは言えず差別を受けているというものである（平野 2001）。

筆者は、２つ目の問題、すなわち日本には移民が少なく、比較的単一民族国家に近い（石倉 2014）ため、在日外国人は言語や文化の壁を感じやすく、その結果として精神疾患を抱えてしまうのではないかとの仮説を立てた。日本がより多くの外国人を受け入れて開かれた社会となっていく事で外国人の精神疾患を減らすことにもつながるのではないか。換言すれば、日本よりも多くの移民を受け入れている多民族・多文化社会の国や地域では、日常的に多文化に触れ合うため日本のような問題はあまり起きないのではないかと考えた。

この仮説を検証するため、多民族・多文化社会であり、心理学が発達しているアメリカのニューメキシコ州でアジア系移民への精神的なサポートを行っている Asia Public Center の園田京子氏へのインタビュー調査を行った。Skype を通じて約１時間程度のインタビューを４回実施した。

調査の結果、多民族・多文化社会でもマイノリティの側に深刻な精神疾患を発症していることが分かった。

園田氏によれば、アジア系移民が精神疾患を抱える原因は大きく３つある。１つ目は、言語環境の問題である。アジア系移民の DV 問題をめぐる裁判で、英語でのコミュニケーションの欠如からアジア系移民の主張が十分に反映されないまま判決が下されたケースがある。２つ目は、移民１世と２世の世代間の摩擦で起こる家庭環境の変化による問題だ。１世と２世の間の価値観の違いにより、子どもがアイデンティティを持てずに非行に走るという。３つ目は、アジア系移民に

Hosei University Repository

対する「モデル・マイノリティ」という考え方である。アジア系移民はアメリカ人よりも所得平均が高い（野村 1997）というが実際には白人以上に働かないと同等の生活を送れず、十分な行政サポートも受けることができないことから、精神的にも肉体的にも追い込まれるということである。

つまり、日本に住む外国人と同様に移民社会であるアメリカ・ニューメキシコ州のアジア系の人たちも英語で十分なコミュニケーションをとれないという個人的な問題と、差別や偏見を許容する社会的構造ゆえに精神疾患に苦しんでいた。外国人や移民の精神疾患は、その国や社会に多くの外国人や移民がいるかどうかというのは直接関係なく生じている可能性が高い。従って、日本において精神疾患を抱える人への対応が遅れるのは必然である。これが本論文の結論である。

少子高齢化の中で日本は外国人労働者を受け入れる方向を模索している。大学もグローバル化のもと積極的に留学生を受け入れようとしており、今後在日外国人が急増する可能性が高い。それによって外国人が疎外感を感じずに、コミュニケーションを取れる環境が整って、精神疾患を抱えなくなるかというと、アメリカの例を見る限りそのようではない。個人的な問題はさておき、在日外国人の労働環境や言語環境など在日外国人の精神疾患の原因になる社会的要因は、その数が比較的少ない現段階から対応策を考えるべきである。グローバル化の推進が外国人の精神疾患を解決するのではなく、外国人の精神疾患に向き合うことがグローバル化を望ましい方向に導くのであることを忘れてはならない。

**参考文献**


・平野（小原）裕子著『九州における在日外国人の精神的健康に関する研究』、九州大学医療技術短期大学部紀要、vol28、pp129-137、2001 年

・石倉瑞恵著『日本における道徳性の構造と学校教育の役割―道徳教育の比較分析を通して―』、石川県立大学年報：生産・環境・食品：バイオテクノロジーを基礎として、vol25、pp35-44、2014 年

・野村達郎著『アメリカにおける多文化主義とその限界』、アメリカ研究シリーズ、vol19、pp28-49、1997 年


---

永瀬雄一（松本ゼミ）

●発表タイトル

## 日本におけるチベット亡命政府の活動

本論文の目的は、東京に事務所を構え、東アジア地域を管轄するチベット亡命政府（以下 CTA）の日本代表者へのインタビュー調査を通じて、日本で亡命政府が活動する理由を明らかにすることである。

Hosei University Repository

「亡命政府とは元来所有する領土の外側から、その領土と政治的体制を取り戻そうと闘争しているグループ」のことを指す。そして、この目標を達成するには「同胞の動員」と「国際的な支援」の獲得が必要不可欠だとしている（Shain 1991）。しかしCTAは日本における活動で、この2つの目標成立条件を満たしていない。ラクパ・ツォコ前日本事務所代表によると、在日チベット人には個々人に様々な帰属の選択が存在し、必ずしもCTAに動員されることに積極的ではない。また日本事務所が設立された1975年から現在までの国会議事録の分析から、日本政府はCTAやチベット問題への関与にについて、消極的な姿勢を持ち続けていることが分かった。そこで筆者は「在日チベット人の動員と日本政府による支援が欠如しているにもかかわらず、チベット亡命政府はなぜ30年もの間、日本での活動を続けているのか」という問いに取り組む。

この問いに対する仮説を構築するため、「亡命政府」の研究がほとんどない日本においても比較的研究の蓄積や文献が存在する「政治亡命者」に目を向けた。日本政府は政治亡命者の取り扱いに関する国際的なあらゆる条約を締結せず、いかなる国内法も制定していない。そのため、亡命者それぞれの性質に合わせた取り扱いを可能にし、その問題自体を曖昧にして、亡命者に一定の自由を与えるケースが多い（本間1974）。日本への政治亡命者である孫文も、日本政府から直接的な支援を受けたわけではないが、その曖昧な対応の最中で、多くの理解者と出会い、清朝を打倒することに成功した（田所2000）。こうした事実から、「CTAは、日本政府から支援も抑圧もされない曖昧な領域の中だからこそ30年間自由に活動することができたのではないか」という仮説を立てた。さらに、CTAが日本においてどのように「同胞の動員」と「国際的な支援」については「日本を拠点に置くことで東アジア各国への自由な渡航を可能にし、在日チベット人のみならず、東アジア各国に在住するチベット人の動員を実現している」「政府からの支援を獲得できないが、草の根活動の自由があり、非国家アクターによる支援の獲得を実現している」という可能性を考えた。

仮説の検証のためCTAのルントック日本事務所代表へ2度のインタビューを実施した。その結果から以下のことが明らかになった。第1に、東アジア諸国への自由な渡航の有無は職員の国籍によって明確に線引きされているということである。ルントック代表によると、オーストラリア人女性と結婚し、豪州国籍を持つラクパ・ツォコ前代表は東アジアへの自由な渡航が可能だった一方、ルントック代表はインド政府が発行する無国籍のイエローパスポートによって日本に訪れるため、他国への自由な渡航が制限される。そのため、以前は東アジアでのイベント開催などを通じて各地へ離散するチベット人の動員を試みることが可能であったが、現在はそうした活動が困難である。第2に、民間への啓蒙活動は行っているが、支援を獲得するほどの影響力を持たないということである。政府から支援

Hosei University Repository

を得られないことから発生する資金・人材面の不足が継続的な活動を困難にしていた。また、デモ活動など公けの場での主張は、事務所が自ら曖昧な領域を超えかねないと自粛していることも明らかになった。

今回の調査からCTAは、極めて限定的な領域の中だからこそ30年間活動を可能にしてきたことが分かった。本論文のテーマでもある「亡命政府の活動」の研究を始めた当初、亡命政府とは本国を奪還するために尽力する、「闘争する組織」という一面で述べられていた。しかし亡命政府とは「闘争」の一方で、平時は組織の「存続」のために地道な作業に尽力せざるを得ないというジレンマを抱える組織と言えるのではないだろうか。

**参考文献**

・田所竹彦（2000）『孫文　百年先を見た男』 築地書館.
・本間浩（1974）『政治亡命の法理』 早稲田大学出版部.
・Shain Yossi（1991）'Governments-in-Exile in Contemporary World Politics' Routledge.

---

奈良宏美（熊田・守屋ゼミ）

●発表タイトル

## 「多文化共生政策」～横須賀市と飯田市を事例に～

今回の発表では、日本における「多文化共生政策」に関するこれまでの議論に教わりながら、かつ「多文化共生政策」が実践されている現場を事例にあげ、理論と現実の乖離や理論そのものがもつジレンマなどの問題についていくつかの点を明らかにしたい。なお、これらの作業に先立って、確認しておきたいのは、その定義と対象が明確とは言い難い「多文化共生」という「政策用語」である。「多文化主義」と「共生」という言葉を合わせて作られたこの言葉は、1990年代以降外国人支援に取り組む市民活動団体のあいだで広まり、2000年前後から自治体の外国人住民施策のスローガンとしても広まった経緯がある。

「多文化共生政策」について「日本の多文化共生政策がめざすものは、多文化主義的な統合政策」であると規定する近藤敦によれば、「統合政策」とも「多文化主義政策」とも呼ばずわざわざ「多文化共生政策」と呼ぶ理由は、次のようなものがあるという。まず、「統合」という言葉が帯びているニュアンスへの日本語への抵抗が強いことや同化主義、管理主義的な意味合いとして受け取られる恐れが一方にあり、他方では他の諸国（―たとえばオーストラリアやカナダなどの国で進められている政策）のそれとも背景事情が異なるという理由があるという。

「共生」とは、「ともに生きる」と訓読できるように、向かい合う相手があって

Hosei University Repository

始めて成り立つものであるが、植田晃次によれば、良いイメージが付与される「共生」という言葉には、イデオロギー性・政治性の危険性が見え隠れするという。植田は「共生」という名前が重要なのではなく、その内実にこそ目を向けるべきだと指摘する。

一般的に社会の差異を肯定的に受け止める態度のことを指す多文化主義は、客観的で、価値中立的なスローガンではなく、同化主義、分離主義、融合主義、多元主義、相対主義などのいずれかの原則と結合するかによってその目標と内容が変わりうる。つまり、その言葉自体が多分に政治性を帯びているのである。以下では、米山リサの分類に拠りながら大まかに三つの立場を俯瞰しておこう。第一に「リベラル・マルティカルチュラリズム」があるが、この立場は自由主義的な諸前提の上に相対的文化の多様性を歓迎する。中心と周縁という言葉で表現されるような文化の優劣関係の存在という問題がその理念のもとに隠蔽されることやそれが国民文化の再規定につながり、場合によっては同化主義に陥る場合がある。第二に「企業的多文化主義」は、人材の確保、消費者の拡大、新たな市場の開拓、安価な労働力確保のために差異を取り込んでいく。いわゆる「空間の差異」、「時間の差異」が商品価値を生み出しているが、この立場は「文化の差異」それ自体に「商品価値」を生む働きがあるとみなす。たとえば、コリア・タウンやリトル・トウキョウがそれである。第三に「批判的多文化主義」は、国家や資本主義などの維持のために多文化主義が用いられている点を批判しつつ、同時にその変革的な意義の回復、促進を図ろうとする。

それでは「多文化共生政策」を自治体ではどのように実践しているだろうか。これについては飯田市と横須賀市の活動を取り上げたい。その理由としては、「多文化共生」という名のつく自治体独自の政策がある地域とない地域との比較ができること、飯田市ではSJ（Study Japan）でその取り組みの一つに参加し、横須賀市では報告者が小学校でボランティアとして外国とつながる児童への支援活動に実際に携わっていることが挙げられる。

多文化主義や、共生という言葉はどのように使われるかによってその意味を変化させる。「多文化共生」という、良いイメージが持たれがちなこの言葉が使われているその現場では実際にどのようなことが起こっているのかということに目を向けていく必要がある。それを自覚しつつ、その社会や文化を創る一人として自分にできることは何かを考えていきたい。

Hosei University Repository

舘美月（熊田・守屋ゼミ）

●発表タイトル

# 3.11 震災後のアート～再生と心の癒し～

2011 年 3 月 11 日、東日本を中心に起こった未曾有の大震災による課題がいまだに多く残っている。また、そのようななかで、社会・経済や文化・芸術においても新たな様相となっていることも見逃せない。その一つとして、私が注目しているのは、「アートプロジェクト」という芸術活動である。今回の発表では、私の祖母の家であった「清航館」が拠点となった「中之作プロジェクト」を具体例として取り上げることで、広くは 3.11 以降の「復興」とアートの関わりについて考察していく、というのがこの報告のねらいである。

今日のアートプロジェクトは、人間の日々の営みや表現を展示して見るという受動的なものだけでなく、実際に参加することで多くの人を巻き込みながら現状の問題意識を持って行う活動であり、目的、担い手、内容など常に形を変えながら多様化を続けている。そして、新たな発見や出会いを生み出し、様々な人々をつなげてコミュニティを形成する役目を担っているのだ。3.11 震災後のアートプロジェクトのキーワードは、コミュニティと再生であると考える。

今回私が取り上げた「中之作プロジェクト」は、福島県いわき市の沿岸部、江名・中之作地区で行われている。江名・中之作地区は古い港町で津波・地震の影響を受けたのにもかかわらずしっかりと建つ古民家が残っていたが、震災復旧の解体助成により、まだ使える建物や価値のある古民家、軒並みも解体撤去されている状況であった。そのようななか、「中之作プロジェクト」は、美しい漁港の街である中之作を守るため、古民家を修復しながらワークショップを通して物の大切さ、手塩にかける喜びを学び、人と関わることで楽しいコミュニティをつくろうという思いから立ち上げられた。この活動拠点となっているのが、「清航館」と「中之作プロジェクト」によって名づけられた、私の祖母の家である。築 200 年の古民家だが、地震と津波の被害を受けたために修復を諦め、手放すことを考えていた。しかし、このプロジェクトによってこの家は新たな役割を担う舞台となったのである。調査の一環としてフィールドワークと祖母へのインタビューを行った。フィールドワークでは、「清航館」の中を見学し、お茶会のワークショップに参加。実際に足を運んでみて、以前まで何とも思っていなかった家の造りや茶碗に素朴な美しさがあると気が付いた。また、ワークショップには一体感があり、つながりの強いコミュニティが形成されていると感じた。しかし、密だからといって外部の人が入りにくいわけではない。寧ろ、家族のように温かく受け入れてくれるのだ。インタビューで祖母は、震災によって家を手放した当時と今とで心境の変化があったと言う。「当時、ご先祖様から代々引き継いでいる家を自分の代で終わ

Hosei University Repository

らせてしまうのは、申し訳なく、切ない気持ちになり、自分の思い出が薄れていくようで少し寂しいと感じた」と語った。しかし、「今では、地域再生のために役立ててもらえて嬉しいとだんだん思えるようになってきた」と言う。このように、今もなお複雑な思いを抱えているのも事実だが、「中之作プロジェクト」によって家や街が再生していることから、現実を前向きにとらえられるようのなったのだ。人の心を癒すことはなかなか難しいが、アートプロジェクトはそのきっかけとなり、大きな可能性を秘めているのではないだろうか。

このプロジェクトの役割は、大きく分けて三つある。一つ目は、次世代へ歴史、文化や地域の暮らしを伝えること。二つ目は、貴重な場所や風景を未来に残すこと。三つ目は、住まいを住み継ぐ仕組みを新たに構築すること。「家は家族が住み継ぐもの」から、「家を守るために家族以外が受け継いでもよい」へ価値観の再生であることがわかった。さらに、古民家の再生をすることで地域の活性化や街の再生につながり、最終的には心の再生＝心の癒しになるであろう。その際に、3.11以前の状態に戻すのではなく、本当の意味での再生を考えていかなければならない。そのために、震災、津波、原発事故で出来た「被災地」という枠組みを越えて、新たな街の在り方やその地域の人々の生き方、コミュニティの形成を模索していくことが必要となろう。

---

原理沙（島野ゼミ）

●発表タイトル

## 日本社会におけるエイズ・パンデミック対策の一例としてのピア・エデュケーションの必要性

日本で起こり始めているエイズ・パンデミックに対する打開策の一例としてのピア・エデュケーションの必要性に関して述べる。ピア・エデュケーション（Peer Education）とは、Peer が意味する“対等な仲間”の間で行われる HIV ／ AIDS の基礎知識や予防法等を扱う性教育を指す。

現代の日本社会でエイズ・パンデミックが起き始めている理由は日本国民のエイズに対する無関心さが原因である。エイズを発症させるウイルスである HIV 検査を受診している人数は厚生労働省のエイズ動向委員会の調べによると、年間で約 100 万人と人口の約 0.01％という驚くべき低さでしかない。また、同委員会の報告によると 2013 年度の HIV 新規感染者は 1106 人であり、一日に約 3 人が感染している計算となる。人々の関心度が低いまま、エイズは静かに、かつ確実に日本全体に広がり続けている。

統計上に見えるほどエイズが身近な病だと感じている日本人はそれほど多くは

Hosei University Repository

ないだろう。一般的な日本人が、エイズから連想するのは「同性愛者の病気」や「セックスワーカーの病」、「薬害エイズ」といったものであり、エイズは自分とは関係のない病であると考えているからではないだろうか。

医療設備や制度が整っている日本において、エイズは命に関わる病気ではない。しかし、不治の病であることには未だ変わりなく、HIV に感染した人々は周囲からの差別や偏見を受けることは避けられない。死に至らない病とはいえ、毎日の体調管理に気を抜くこともできない。不治の病である限りエイズは十分に人々を苦しめ続ける病気であり、感染者と患者の QOL（Quality of Life）を確実に下げるのである。

それでは、なぜ、日本でエイズへの理解がこれほどまでに低いのだろうか。性の話題をタブー視する風潮の根付く日本において、学校や家庭における性教育には限界がある。場合によっては、性教育の実施さえも不可能である場合がある。

また、教員や親と若者の間にはジェネレーションギャップや立場の違いが存在するため、双方が距離を感じる関係性となる。非常にパーソナルな内容にも踏み込むこともある「性」の話題を扱う場合には人と人との間柄が重要となってくる。

そこで、同世代同士、同性同士等といった「対等な」立場に立つもの同士の関係性が性教育を行うのが、有効な手段として提案された（高橋 編著、2005『思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアル』小学館）。

水面下でのエイズ・パンデミックを打開する危急かつ不可欠な対策としてだけでなく、ピア・エデュケーションによる性教育は今後の日本社会に必要不可欠である。また、東京都と神奈川県の中高生に対して独自に行った調査によると、「自分の身体や性の悩みを相談できる相手」に対して 58%、「完全に治すことのできない性病」に対し 73%の中高生が知りたいと答えた。このデータより、ピア・エデュケーションのニーズが中高生に存在するといえるであろう。

ピア・エデュケーションによる性教育を普及させるためには、教育者であるピア・エデュケーターの養成とピア・エデュケーション自体の社会での認知度や理解を高めることが必要不可欠となる。

以上のことを実現させるために、行政が主導のピア・エデュケーター養成講座、及び研修の実施を提案したい。具体的には、保健所に勤める公衆衛生の専門家である保健師が養成講座と研修を行うのである。私は産婦人科医の主催するピア・エデュケーター講座の受講を経てピア・エデュケーターの資格を取得したが、そういった場合は主催が個人となってしまい、資格も民間資格となる。保健所を始めとする行政が主催となれば、組織的に活動を展開しやすくなり、資格自体の信頼性も上がるといった利点がある。

日本で起き始めているエイズ・パンデミックがこのまま進むと、日本社会全体に影響を及ぼすことは確実であろう。エイズに対する知識を十分に持たない人々

Hosei University Repository

はエイズウイルスに対する恐怖からパニック状態となり、HIV 感染者とエイズ患者に対する過度な拒絶や蔑視をしてしまうことは回避できないであろう。また、単純に HIV 感染者の増加は健康に問題を抱える人の数が増えるということであり、HIV によって多くの社会人や学生の健康が蝕まれることになれば社会機能の持続性も危ぶまれると言えるであろう。よって、国の存続にも影響を及ぼしかねないエイズ問題への対策は国が主体となって行わなければならない。

---

馬塲咲歩（松本ゼミ）

●発表タイトル

## なぜ留学生は増えたのか―法政大学と明治大学の比較から―

本研究の目的は、多くの留学生を獲得するためには大学に何が必要なのかを明らかにすることである。

2014 年現在、日本にいる留学生の数は 13 万人である。日本政府はこれまでに、「留学生 10 万人計画」など数々の政策を掲げて留学生数を増やそうとしてきたが、この数は先進国の中でも極端に少ない。留学生の受け入れは、その数を増やしたい日本において重要な研究課題である。これまで国全体の留学生を増加させるために必要な施策については論じられてきた（鈴木 2011）。しかし、留学生の大きな受け皿となる大学に焦点をあてた研究はほとんどない。大学側のいかなる要因が留学生をひきつけるのかを明らかにするのが本研究の目的である。

この目的を達成するのに適した研究対象は、留学生数が数年間で大きく差が付いた 2 つの大学を比較することである。そこで、筆者は明治大学と法政大学に着目した。ともに都心の大規模私立大学で 2001 年頃は留学生数が拮抗していたが、その後、10 年間で明治大学の留学生は約 4.6 倍に増え、法政大学の 2 倍になった。「なぜ 10 年間で、2 つの大学の留学生数に大きく差が開いたのか」、本研究ではこの問に取り組む。

筆者は、授業内容などを留学生のニーズにあわせて改革し大学の魅力が増したためだという仮説を立てた。この仮説は、大学生予備軍とも言うべき日本語学校の生徒 48 人へのアンケート調査から構築した。大学を選ぶ際に優先度の一番高かったものは、授業内容・授業形態であった。これを本研究では新学部の設立や留学生向けの授業の導入などを想定した。

仮説検証の方法は両大学の公開された資料に基づくドキュメント分析と大学職員へのメールによる聞き取りである。その結果、仮説の一部は支持された。明治大学で最も留学生数が増えた 2008 年度に国際日本学部が新設されており、新学部創設が大学全体の留学生数増加の要因だと考えられる。留学生のニーズをふまえ

Hosei University Repository

た学部ができたことで留学生数が増加したと言える。しかし、これだけでは2000年代前半の明治大学の留学生増加を説明できない。その頃、カリキュラムの大幅な変更も新学部の設立もないからである。

そこで、大学の制度の変更と改革に向けた強い意志に着目した新たな仮説を構築した。具体的には、奨学金と入試方法、そして目的・戦略の明確化である。日本全体の留学生数を増加させた要因は、ビザの規制緩和などの制度や政策の改善だった。裏を返せば、留学生の興味やニーズに直接関係なく、制度そのものが留学生数の増加に影響している。また、政府が「留学生10万人計画」を打ち出し受け入れに本腰を入れたたとき、留学生のアルバイトを解禁し人数が増加した。このときの政府同様に、大学が真剣な諸策を打ち出しているのではないかと考えた。

調査の結果、この仮説も一部支持された。奨学金については両各大学とも2000年度以前から独自に給付しており直接関係があるとは言えなかった。入試方法については出願書類に限定して調べたところ、明治大学の入試方法が変更されて日本語能力試験の提出を廃止した2003年度に留学生数が急増していた。つまり、2003年度の留学生増加は入試改革によるものと考えられる。明治大学の担当職員へのメールによる聞き取りでも、この点を増加原因に挙げていた。

また、法政大学の留学生数が徐々に増えはじめた年度の事業報告書を調べたところ、留学生の受け入れについて作業部会が設けられていたことがわかった。つまり、以上にあげた2点に加えて大学側の真剣度も大きく影響すると言える。

２つの大学の比較から言えるのは、大学が留学生の受け入れを増加させるには、留学生のニーズに応えることに加えて、出願書類変更のような入試制度改革や留学生をより多く受け入れようとする大学側の姿勢そのものも重要であることがわかった。

この研究は２つの大学を対象としており、全ての大学に適用することは難しい。今回の結果を受けて、他の大学の留学生の受け入れも分析をする必要がある。しかし、留学生に関する情報は機密事項である場合があり、外部に公開してくれないことが多かった。したがって、情報を公開し日本全体で大学同士が競争と協力をすべきである。

**参考文献**

・鈴木洋子（2011）『日本における外国人留学生と留学生教育』春風社

Hosei University Repository

今津健太（松本ゼミ）

●発表タイトル

# なぜヤクルトがスラム街で飲み続けられるのか―貧困削減のための BOP ビジネス―

本研究の目的は、フィリピンにおけるヤクルトの BOP ビジネスの分析を通して、BOP ビジネスが貧困削減に貢献するための条件を探究することである。

BOP とは、Base of the Pyramid の略で、年間所得約 3,000 ドル以下の人々を指す。BOP 層は商品やサービスへのアクセスが困難なため高いコスト（BOP ペナルティ）を負担している。BOP ビジネスはこのコストを軽減することで貧困削減に貢献すると考えるもので、多くの研究がなされている。しかしそれらは、BOP ビジネスの「成功」を売り上げで評価しており、これでは通常のビジネスと何ら変わらない。本研究の意義は BOP ビジネスを貧困層の視点で捉え直すことにある。

日本企業による BOP ビジネスの「成功」例として挙げられるのがヤクルトである。嗜好品といえるヤクルトが、マニラのスラム街で広く飲まれていることに驚いた。なぜ、スラム街の貧困層がヤクルトを飲み続けるのか。本研究はこの問いを通して BOP ビジネスと貧困削減のつながりの一端を解き明かす。

既存研究に基づく仮説は 2 つある。

第 1 に、「薬よりは安価であるため、薬代わりにヤクルトを飲む」ためである（菅原 2012）。薬が高額である上、医師の汚職による不必要な医薬品やサプリメントの押し売りが貧困層を苦しめている（勅使川原 2013）。医療への不信感が健康志向を生み、腸内環境を改善するヤクルトを飲むことにつながっているのではないか。

第 2 に、「企業が現地のことをよく知り、啓蒙活動を行っている」ためである。既存研究（プラハラード 2010；菅原 2012；小林他 2011；ユヌス 2012 等）では、一般に BOP ビジネスの「成功」は、現地の人々の協力を得てニーズを正しく把握することや、提供する商品が及ぼす影響を正しく伝えることで達成されるとしている。現地育成したヤクルトレディの訪問販売がそれを担っているから受け入れられるのではないか。

仮説を検証するために、今年 8 月に 5 日間現地を訪れ、現地語の通訳を介してスラム街に住む 26 人に半構造化インタビュー調査を行った。また、調査結果の裏づけのため、マニラで宅配販売を行う 3 名のヤクルトレディへのインタビュー調査や、公立病院や薬局への視察も行った。

その結果、第 1 の仮説は支持された。通常の医薬品に比べてヤクルトは安価である。また、安くても効果が薄いと住民が信じ込んでいるジェネリック医薬品よりは、効果的だと住民は考えていた。

第 2 の仮説は棄却された。ヤクルトを飲み始めた理由も、飲み続ける理由もヤ

Hosei University Repository

クルトレディの啓蒙活動によるものではなく、家族や近所の人の影響が大きかった。また、多くの消費者がヤクルトを万能薬であると信じ込んでいたが、それはヤクルトレディによる啓蒙活動の真意とは異なるものだった。

では、この結果はBOPビジネスと貧困削減のどのような関係を示しているか。ヤクルトのケースのBOPペナルティは貧困層の医療サービスへのアクセスの困難さであり、それを「代替」したことでヤクルトは「成功」した。筆者自身、病院や薬局の視察を通じて、貧困層の患者への差別や質の悪い診察などマニラの医療問題を実感した。矛盾だらけの医療に金を使うより、健康維持のためにヤクルトを飲む方が経済的だというのは理解できる。しかし、ヤクルトは薬ではないため医療の代替手段になりえない。

ヤクルトの事例研究は、BOPペナルティとその解消として提供される商品やサービスの性質の違いに目を向ける必要性を示している。貧困層の信用不足による金融へのアクセスの困難というBOPペナルティをマイクロファイナンスで補うことに比べ、医療不足というBOPペナルティを健康飲料で代替することは問題の解決にならない。前者は市場原理に任せてBOPビジネスで貧困削減を目指せるが、後者は代替商品ではなく本来の公的医療サービスの充実を図るべきである。BOPビジネスが貧困削減に貢献するためには、BOPペナルティの性質に沿って公共サービスとの住み分けをする必要があると言える。（1591文字）

**参考文献**


・C.K. プラハラード、2010、『ネクスト・マーケット』、スカイライトコンサルティング訳、英治出版
・菅原秀幸、2012、『BOPビジネス入門』、中央経済社
・小林慎和他、2011、『BOP　超巨大市場をどう攻略するか』、日本経済新聞出版社
・勅使川原香世子、2013、『医療アクセスとグローバリゼーション―フィリピンの農村地域を事例にして』、明石書店
・ムハマド・ユヌス、2012、『貧困のない世界を創る』、猪熊弘子訳、早川書房


---

土屋好輔（松本ゼミ）

●発表タイトル

## 「開発援助における補償問題の考察　―フィリピン・サンロケ多目的ダムを事例として」

本研究の目的はフィリピンのサンロケ多目的ダム（以下　サンロケダム）を事例にとり、なぜ開発援助事業によって被害を受けた住民の補償に対する意見に、受け入れられる意見とそうでないものが存在するのかという問いを明らかにする

Hosei University Repository

ことを通じて、開発援助における補償問題を考察することである。

フィリピンのルソン島北部に位置するサンロケダムは、日本企業である丸紅株式会社と関西電力が、運営会社であるSan Roque Power Corporation（以下SRPC）を設立し、1998年当時の日本輸出輸入銀行（現在の国際協力銀行）の融資を受けて建設されたものである。住民にもたらした影響は深刻なもので、彼らの多くは立ち退き、ダムによる川の枯渇等によって営んでいた生活の変更を余儀なくされた。現在、SRPCは生計手段を失い生活に苦しむ住民に対し補償を行っている。

2014年夏、筆者らは所属しているゼミのフィールドワークでフィリピンを訪れ、サンロケダムについて調査を行うことになった。事前学習でダムによる被害を受けながらも補償を求め闘い続けている住民の存在を知り、彼らの抗議活動に注目することにした。既存研究では、開発援助事業に伴う現地住民への負の影響と、それに対して補償を求める住民たちとの闘争が論じられてきた。しかし、それらは闘争の中でいかに被害住民の意見が補償に反映されないかを論じるにとどまり、受け入れられたものに対して目を向けていない。そこで本研究では、被害住民の受け入れられた意見に注目し、「なぜ受け入れられる意見とそうでないものが存在するのか」を問いとして設定する。

問いを明らかにするため、筆者らは２つの仮説を立てた。第１の仮説は「住民の出す意見そのものの性質によるのではないか」である。佐藤（2007）の人の決定意志で物事が決まるのではなく、対象物のもつ性質が物事を決めるという考え方に着目する。第２の仮説は「誰が誰にどのように意見を出すかによるのではないか」である。栗田（2008）によれば、被害住民は意見伝達の手段をもっている。そこからある手段をもつ人の意見が通りやすいのではないかと考えた。

これらの仮説を検証するため、筆者らはサンロケダム周辺の３つの村及びSRPCを訪れた。短期間で多くのデータを集めるため、参加学生16人をそれぞれ３つの村に振り分け、ダムによって被害を受けた住民に計３日間の聞き取り調査を行った。

調査の結果、両方の仮説が支持された。住民組織へのインタビューから、彼らは「金銭」と「持続可能な生計手段」を求めていたが、実際に行われた補償は生計手段としての「牛の提供」のみであったことが分かった。「金銭」ではなく「牛」が提供されたのは、「牛」の方がよりファンジビリティが低かったためではないかと考えられる。また、住民によっては住民組織や地域の有権者などの相手に意見を伝達できる人もいれば、伝えることができる相手がいないという住民もいた。行政の最小単位であるバランガイのキャプテンも、すべての住民の意見をくみ取ることはできず、さらに「牛の提供」は住民組織の一握りの上層部とSRPCのみによって合意されたことから、現地住民の中には意見を持ちながらも切り捨てら

Hosei University Repository

れている人が存在していることが明らかになった。

以上の仮説検証から、本研究では「なぜ受け入れられる意見とそうでないものが存在するのか」という問いに対して、受け入れられる意見はファンジビリティが低い性質を持ち、権力や複数の意見伝達の相手を持つ住民の意見であり、それ以外の意見は切り捨てられてしまうからではないかと結論付ける。

サンロケダムの事例は開発援助における補償問題を提示している。調査を通じ、住民側と SRPC 側の間にうまくいかない補償に対する「認識のズレ」があることが判明した。住民側は補償そのものに問題があると指摘する一方、SRPC 側は住民のやる気に問題があると考えていた。上記の結論が受け入れられるかどうかの要因ならば、「認識のズレ」は過去の補償の失敗例を生かせず、不適切な補償が行われ続ける一つの要因ではないか。

**参考文献**

・栗田英幸（2008）「サンロケダム闘争史：なぜ、大規模資源開発は失敗するのか？」愛媛大学法文学部総合政策学科

・佐藤仁（2007）「財は人を選ぶか　―タイ津波被災地に見る稀少材の配分と分配―」国際開発研究第 16 巻第 1 号

---

三角静那（曽ゼミ）

●発表タイトル

## JAPAN ブランドとしての「おもてなし」―外国人に人気の高い宿泊施設からのヒント

昨年は、我が国におけるインバウンド観光にとって記念すべき年となった。9 月に東京が 2020 年の夏期五輪開催都市として選定され、12 月には目標であった訪日外客数 1,000 万人に史上初めて到達した。『観光立国推進基本計画』（2012 年）にて、2016 年までに 1,800 万人、2020 年初めまでに 2,500 万人にするとの目標が定められており、五輪を契機とした中長期的なインバウンド戦略が求められている。

昨年 9 月、IOC 総会におけるスピーチで「おもてなし」という言葉が使用されたことで、日本のおもてなしは世界に通用する魅力のひとつとして注目されている。「おもてなし」という言葉は、ホテルや旅館など、いわゆるサービス産業では一般的に「心を込めて客に対応する、心を込めてモノを提供する」という意味で使われてきた。サービスそのものと同時に、そのサービスの背景にある“もてなす側の人の考えや気持ち”に重要性をおいているのである。一方、英語圏で使われている“hospitality”は物質的、環境的なサービスに重きを置いている。「気持ち」に重きを置く日本の「おもてなし」文化は、日本独自のサービスを象徴するもの

Hosei University Repository

になっていると言えるかもしれない 。

世界経済フォーラムによる『旅行･観光競争力ランキング』（2013 年）によれば、総合ランキングで日本は 140 カ国中 14 位と高い評価を得たが、「外国人観光客への友好度」という、ホスピタリティをはかる項目では 74 位に位置している。つまり、日本ならではの魅力であるはずの「おもてなし」は、世界に通用する JAPAN ブランドにはなっていないようだ。外国人が求めるホスピタリティと日本人が従来考えてきたおもてなしにはどうも差異があるようである。そこで、日本の首都である東京を訪れた外国人が必ず体験するであろう宿泊施設に焦点を当て、訪日外国人に人気の高い宿泊施設の「おもてなし」がどのようなものなのかを調査した。具体的には、浅草、築地において実施したアンケートや TripAdvisor にて訪日外国人客から高評価を得ている２つのホステルと２つの旅館でインタビュー調査を行った。

調査した４つの宿泊施設では予約はインターネットを利用しており、年間宿泊客の８割以上が外国人であるため施設内の表示も多言語化されていた。旅館「澤の屋」の館主・澤功さんは「何もしないこともおもてなしのひとつだ」と述べていたが、澤の屋では畳に布団という旅館スタイルは守りつつ、仲居が布団を敷くのではなく、最初から布団を敷いておき、いつでも横になれるという快適さを提供していた。また、ホステル「カオサンワールド」では、畳より一段高いところに客が自分で布団を敷いて寝るようにしたり、元ラブホテルの設備を活かした客室を楽しんでもらっていた。訪日外国人に好評な「おもてなし」にもいろいろあることがわかったが、いずれの宿泊施設でも、周囲の商店などと協力し、街ぐるみでもてなし、地元の人との交流を図れるようにしている点が共通していた。

国際化が進む中で、Wi-Fi 環境の整備や多言語表記など、受け入れ体制の更なる改善が求められている。しかし、調査から見えてきたことは、環境面のさらなる充実だけでなく、ホスピタリティに日本的な気配りや日本ならではの体験ができることが「おもてなし」になるということである。

**参考サイト**

・観光立国推進閣僚会議（2014）「観光立国に向けたアクション・プログラム 2014 ―「訪日外国人 2000 万人時代」にむけて― http://www.mlit.go.jp/common/001000830.pdf
・国土交通省　観光庁（2014）「宿泊旅行統計調査」 http://www.mlit.go.jp/common/001046408.pdf
・国土交通省　観光庁（2014）「宿泊施設の情報提供の現状・課題と今後の方向性」 http://www.mlit.go.jp/common/001038641.pdf　最終確認日（11 月５日）
・日本政府観光局（2014）「世界各国、地域への外国人訪問者数」 http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/visitor_statistics.html

Hosei University Repository

**参考文献**

・作者不詳（2007）「【シリーズ】世界からつどうー未来への遺産（第五回）」『東建月報』2007 年 5 月号掲載

---

佐藤萌衣（曽ゼミ）

●発表タイトル

## 東京に生きる～アイヌから学ぶ多文化共生への道

2013 年度末現在、206 万人、192 の国・地域の外国人が日本で暮らしている。1990 年の出入国管理及び難民認定法（入管法）の施行から外国人登録者および定住者は年々増加しており、今年 6 月には成長戦略の一環として、優れた能力を持つ外国人を呼び込むため、経営者や技術者を対象にした新しい永住権の創設を検討する出入国管理法の改正案が可決された。

このように日本のグローバル化が進むなか、今後日本が多文化共生社会になっていく可能性がある一方で、異なる文化や宗教を背景に持つ多様な人々が混住することにより、偏見や差別といった問題がこれまで以上に顕在化する危険性も帯びている。その意味で、今私たちは日本社会の多民族化、多文化化に真剣に向き合う必要がある。

翻って近代以降の日本の歴史を見ると、近代国家建設のために北海道を「開拓」し、沖縄を併合することによって、アイヌや沖縄の人たちに同化を強いてきた。特に、アイヌの人たちに対しては、北海道旧土人保護法の制定に象徴されるように、徹底した同化政策がとられ、強制的に農民化を強いられたため、生活圏を侵害され困窮化が進んでしまった。そして、アイヌの人たちに対する根強い差別と偏見を生むことになってしまった。

長年にわたるアイヌの人たちの地道な活動や国連の人権条約機関からの勧告もあって、1997 年にはアイヌ民族の自立と人権保護を求めるアイヌ文化振興法が成立し、2008 年には国会でアイヌ先住民族決議が採択され、アイヌ独自の文化を尊重し、先住民族としての権利を確保していこうとする動きが出てきている。しかし、2014 年 8 月、札幌市議で自民党会派に所属する議員が短文投稿サイト「ツイッター」に「アイヌ民族なんて、いまはもういない」と書き込むなど、公人としてあるべからず言動が、よりによって北海道で起こってしまった。ここまで極端な言動はともかく、無知ゆえの偏見や差別は後を絶たないのが現状である。

曽ゼミ移民チームは、日本の多文化共生社会の実現に向けて何をすればよいのか、これまで偏見と差別を受けてきたアイヌの人たち自身に話を聞くことでヒントを得たいと考えた。それと並行して、法政大学の学生を対象に、アイヌに関す

Hosei University Repository

るアンケート調査も実施した。「アイヌ民族を知っていますか」という問いに対して「はい」という回答は94パーセント占めたものの、「現在、東京にアイヌ民族がいることを知っていますか」という問いに対しては「いいえ」という回答が87パーセントを占めた。実は、アイヌの人たちは厳しい差別から北海道ではなかなか仕事につけないため、職を求めて東京に移住した人たちが多く、現在、首都圏には移住したアイヌやその子孫たちが5千人から1万人ほど居住していると言われている。

アンケート調査に協力してくれた人たちと同様、私たち移民チームのメンバーも今回の調査研究を行うまで、アイヌ民族が同化政策によって、独自の文化や言語を一方的に奪われ、経済的にも精神的にもいまだに偏見と差別に苦しんでいるという事実を知らずに暮らしてきた。一言でいえば、無知ゆえにこうした偏見や差別を放置してきたと言わざるを得ない。今回、私たちは東京や首都圏でアイヌ文化復興の活動を行っているアイヌの方々にインタビューを行い、アイヌに対する理解を深める活動にも参加してみた。勉強を始めてまだ日は浅いが、アイヌ文化復興の動きだけでなく、アイヌであることで受けた差別や自身の葛藤、生き方なども知ることができた。こうした学びのなかから、偏見や差別を無くすためには、まず「現状を知ること」が非常に大切であることを強く認識するようになった。

学会発表では、インタビューしたアイヌの方々と、その活動に焦点を当てながら、多様なマイノリティが共生できる日本の未来を創造していくために、私たち一人一人がどのような視野を持てばよいのか、何をすればよいのかを、ともに日本の未来を担っていくみなさんと一緒に考えたい。

**参考文献**

・長谷川由希（2005）「アイヌ　日本の先住民族アイヌ」『講座　世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在01　東アジア』pp87-105, 明石書店
・上村英明（2008）『知っていますか？アイヌ民族一問一答』解放出版社

---

遠藤千晶（松本ゼミ）

●発表タイトル

## 「カッコよく撮って」―ソーシャル・サファリングを抱える被写体の「社会性」と「個」をめぐる考察―

高校時代、白い肌と白い髪の子ども達が笑っている写真に目を奪われた。キャプションには「タンザニアのアルビノの厳しい現実」とある。タンザニアでは先天性遺伝性疾患であるアルビノの体が秘薬として高値で売られるため常に命を奪われる危険にあることを初めて知った。筆者は悲惨な現状に衝撃を受けただけで

Hosei University Repository

なく、苦しみを抱える人々が写真に撮られていることに関心を抱いた。本研究の問いは、アルビノのように「写されたくないであろう人々が、なぜその姿を写真に撮られ人前に曝されるのか」である。

この問いに対し、「撮影者が人々の道徳心に訴え社会の支援を仰ぐために写真を撮り、被写体もその社会的意義に説得されるから」という仮説を提示する。クライマン他（2011）は苦しみの文化的表象には「社会的効用」があると説く。例えば、ユージン・スミスが写した「入浴する智子と母」は、目を背けたくなるような水俣病患者の姿を通して悲惨な事実を伝えた。苦しみを抱える被写体は、個人としてではなく社会的意義を持った存在として複製される。反面、被写体の反応は厳しい。紛争地を撮る長倉洋海は「撮られたくない」という被写体からの拒否（長倉 2010）を受けている。それに対応するため、撮影者は被写体の日常に入り込み、信頼関係を築こうとする。しかし、「写真を撮る行為は、多かれ少なかれ撮られる側を傷つける」（桑原 1989）。社会的意義はそれに対する弁明でもある。

筆者が衝撃を受けた白い肌の子ども達も社会的意義のために印画紙に焼き付けられたのか。仮説を検証するため、アルビノや顔・身体に生まれつき痣（あざ）がある人々の写真展を開催する NPO 法人マイフェイス・マイスタイル（以下、MF）を対象に質的調査を行った。アルビノに限らず「見た目問題」（MF による呼称）を抱える人々は差別ゆえに人前に曝されたくないであろうと考えたからである。筆者は写真展の被写体である N さん（39 歳男性）と M さん（23 歳女性）にライフヒストリーインタビューを実施した。ライフヒストリーを研究方法としたのは自己の変化の過程や内面からの意味把握（プラマー 1991）に適しているからである。また、２人の語りを補足するため、MF の活動を参与観察しながら撮影者の富樫東正（とがしはるまさ）氏と MF 代表の外川浩子（とがわひろこ）氏に聞き取り調査を行った。

延べ 10 時間以上に及んだ聞き取りから導かれたのは、「『見た目問題』を抱える人々が写真に撮られ人前に自らを曝すのは、社会的意義ではなく個人の興味・関心による」という仮説とは異なった結論である。撮影者は社会の関心を引くために撮影を行ったのではなく、また被写体も社会的意義に説得されたわけでなかった。先天性リンパ管腫で顔が膨れている N さんは、撮影を「ごく自然に」承諾するとともに、「自分が１人ではないことに気付きたい」のかもしれないと話す。また、顔面が委縮して変形するロンバーグ病の M さんは「モデルになれる機会なんて滅多にないチャンスだったから」と撮影を引き受けた。そして、「写真展に出て良かった」という２人の語りからは、自らの社会的意義を写真展開催後に認識した様子も伺えた。つまり、社会的意義はむしろ結果的に認識されたのである。

さらに、聞き取りは写真に関わる三者の関係性も浮き彫りにした。外川氏は写真展の開催を意図していなかったが、情報誌用の写真を「カッコよく撮って」と富樫氏に依頼した後、三者が相互に影響し合い写真展につながった。「見た目問題」

Hosei University Repository

を抱える人々の写真展は、仮説が示唆するような被写体と撮影者だけの直線的な関係ではなく、主催者を含んだ三者の重層的な関係から生み出されていたのである。

１枚の写真には一見完成されたメッセージしか表れない。しかし、そこに写されているのは社会性を帯びた被写体ではなく、個人の「ライフ」である。本研究は限られたケースに基づいたライフヒストリー研究だが、「写されたくないであろう人々がなぜ写真を通してその身を曝すのか」という疑問に対して、従来の「社会的効用」説と異なる視点を提供した点に意義があったと言える。

**参考文献**

・クライマン、A. 他、2011、他者の苦しみへの責任―ソーシャル・サファリングを知る―、坂川雅子訳、みすず書房.
・桑原史成、1989、報道写真家、岩波書店.
・長倉洋海、2010、私のフォトジャーナリズム、平凡社.
・プラマー , K. 、1991、生活記録の社会学、光生館.

---

芳川真人（松本ゼミ）

●発表タイトル

## なぜ合意に至れないのか？ー国際開発機関のアカウンタビリティ制度における問題解決機能に関する考察ー

本論文の目的は、開発援助によって引き起こされた援助側と被援助側における紛争がなぜ解決されないのかを明らかにすることである。

開発援助は必ずしも便益だけをもたらさない。例えば道路やダムの建設による強制立ち退きで生活を奪われた人たちからの異議申し立ては 1970 年代から続いている。こうした紛争に対応しようと 90 年代から国際開発機関の内部に作られるようになったのが「アカウンタビリティ制度」と呼ばれるもので、通常は被害を受ける住民らからの申し立てを受けて第三者が紛争状況を調査する。当初は援助した国際開発機関側の過失を審査する「法令遵守」が主流だったが、次第に紛争当事者である被害住民らと開発者側の間を取り持つ「問題解決」の機能が中心になってきた。

国際開発機関への異議申し立てに関する研究は少なくないが、国際法や国際機構など法制度の面からのものがほとんどで、紛争解決の視点に立った分析がほとんどない（佐俣 2010; Bissel and Nanwani 2009）。当事者にとっては問題の解決が一番の関心事のはずである。そこで本研究では、国際開発機関のアカウンタビリ

Hosei University Repository

ティ制度のうち「問題解決」機能に焦点を当て、どのような時に問題が解決につながり、どのような時につながらないのかを事例研究によって明らかにする。

事例として挙げるのは米州開発銀行（IDB）である。アカウンタビリティ制度を備えている国際開発機関の中で、「法令遵守」ではなく「問題解決」を求める申し立て件数が最も多いからである。また、日本でIDBに関する研究は全くなされておらず、学術的な貢献になると考えた。

研究方法はドキュメント分析である。一般の裁判での調停同様、「紛争解決」では非公開のやり取りが多い。しかし、IDBの場合、申し立て内容、申し立ての適格審査報告、紛争状況の評価報告書、問題解決に向けた協議報告書などが英語やスペイン語で部分的に公開されている。本研究ではこれら公になった文書を分析した。対象とした申し立て案件は、2010年から2013年に申し立てられた24件で、そのうち、すでに問題解決を目指した協議の過程まで終了した10件を詳しく分析した。問題解決の要因を探るという研究目的に照らして、この10件を問題解決に向けて「合意に至った6件」と「合意に至らなかった4件」に分けた。そして、合意に至らなかった要因を前述した公開文書から読み取り、その要因が合意に至った6件に不在であったかどうかを検証した。

分析の結果、合意を阻んだ3つの要因が明らかになった。（1）当事者が意見の隔たりの大きさゆえに、協議に入っても解決できないと最初から諦めていること。（2）協議の過程でどちらかの側の内部で力関係に変化が起き協議に消極的になること。（3）どちらかの側に最初から協議を望まない強い声が存在すること。

つまり、紛争が解決しないのは、話し合いの結果物別れに終わるというよりは、そもそも問題解決に向けた協議の入り口にすら立てないからだと考えられる。では、これら3つの要因は、合意に至った6つのケースでは見られなかったのか。

さらなる分析の結果、合意に至った6つのケースでは、合意を阻む3つの要因は不在であった。つまり、この3つの要因が問題解決のための協議を阻む結果、開発援助が引き起こす紛争が解決されないといえる。

これまでの合意形成に関する議論は、協議の存在を前提にその中で両者がどのように合意に至るかという点に重点が置かれており（サスカインド・クルックシャンク 2008）、「そもそも協議が成り立たない場合」についてはあまり議論されていない。そのため、この点を指摘したことに本論文の学術的な意義がある。また、合意に至ったケースが示唆することは、協議を成立させるための条件づけや環境づくりを行うことが、協議に入れないケースを減らし、さらには紛争の解決の促進をうながすのではないかということである。この示唆に関しては、さらなる検証が必要である。

**参考文献（英語）**

・Bissell, Richard E and Nanwani, Suresh, “Multilateral Development Bank

Hosei University Repository

Accountability Mechanisms: Developments and Challenges," Manchester Journal of International Economic Law, Volume 6, Issue 1: 2-55, 2009

**参考文献（日本語）**

・サスカインド、ローレンス・E 、ジェフリー・L・クルックシャンク『コンセンサス・ビルディング入門―公共政策の交渉と合意形成の進め方』、城山英明・松浦正浩訳、東京：有斐閣、2008 年
・佐俣紀仁「国際開発金融機関の独立査察制度における『アカウンタビリティー』概念の展開」、GEMC journal no.3, 2010

---

伊藤拓斗（松本ゼミ）

●発表タイトル

# 多国間援助における国益

本論文の目的は、国際開発機関のアジア開発銀行（以下 ADB）の意思決定に日本政府の意見がどのように反映されるのかを明らかにすることを通じて、多国間援助における利害調整を各国はどのように行っているのかを考察することである。

筆者のゼミでは昨年、マニラの ADB 本部で日本政府代表の理事らにインタビュー調査を行った。そこで垣間見えたのは ADB の意思決定に間接的にでも日本の利害を反映させようとする姿であった。しかし、一般に多国間援助では特定の国の利益を反映させることは難しいとされている（S・ブラウン、安田訳、1993、65 頁）。だとすれば、「ADB ではどのようにして日本の利害が反映されるのか」、これが本論文の問いである。

仮説の構築にあたって ADB 理事会の 2013 年 1 月から 2014 年 5 月の議事録を分析したところ、議案のほとんどが承認されていた。各国には異なる利害があるにもかかわらず、すんなり承認されることに違和感を持った。同じく多国間援助機関の世界銀行では「理事会では、基本的にコンセンサスが重視され」ており（大芝、2013、318 頁）、事前に意見の調整が行われている。このことから ADB の理事会で否決される議案がほとんどないのは、事前に各国で意見調整が行われているためだと考えられる。この意見調整の際に日本も自らの利害を反映させているのではないか。以上から「理事会前の意見調整が各国間で行われるために、多国間援助機関である ADB でも日本の利害を反映することが可能である」との仮説を立てた。

ゼミではこの仮説を検証するために 2014 年 8 月 29 日、現地時間で午後 4 時から 1 時間程度、フィリピンにある ADB マニラ本部にて日本理事及び理事補に対する半構造化インタビュー調査を実施した。質問は理事会前の日本の動向を探る内

Hosei University Repository

容だった。

インタビューの結果、以下の３点が明らかとなった。第１に、理事会よりも前の段階で各国間で意見調整が行われている。第２に、各国間での意見調整が難航する場合には、各国で ADB を管轄する財務省間でも話し合いが行われる。そして第３に、意見調整をする中で否決されることが明らかな議案は理事会に上げられず、取り下げられてしまう。これら３つの事実のため理事会では一見すると対立が少なく、ほとんどの議案が承認されている。

また、エネルギー、予算、金利などの議案では意見が大きく対立するが、日本が得意とするエネルギーなどの分野では日本の利害が反映されるように、「非公式な会合」などで「折に触れて」自国の利益に繋がるように調整を試みていた。ただし、日本の利害調整は一筋縄ではいかないと考えられる。なぜなら、日本はアジアに位置すると同時に先進国の一員でもあるので、時に両勢力間の板挟みにあうからである。また ADB への出資額が最も多い日本に期待されるのは ADB を円滑に機能させることであった。

以上から、「理事会前の意見調整が各国間によって行われるために、多国間援助機関である ADB でも日本の利害を反映することが可能である」という仮説は支持された。ただし意見調整は各国の代表理事間だけでなく、財務省間でも時折行われていた。よって、議案を審議する前に各国間で意見調整を行うことで多国間援助でも特定の国の利益を反映させることが可能であると考えられる。

意見調整をする中で反対意見が多い議案は理事会に上げられないこともあるため、結果的に理事会ではほとんどの議案が承認されていた。しかし議事録を見ると否決された議案も数は限られるがある。では、なぜ理事会に上がっているのに否決される議案があるのだろうか。これらの議案は事前の意見調整ではどのような判断を下されていたのだろうか。今後の研究テーマとして考えていきたい。

---

野村茉優（松本ゼミ）

●発表タイトル

## 何故ボホール震災復興は進まないのか？

1．背景と問い

2．本論文の目的は、ボホール震災の被災者が 10 か月以上経っても苦しい生活を強いられている理由を探ることで、復興支援の難しさを考えることにある。2013 年の松本ゼミで訪れたフィリピン・ボホール島が、その約２か月後の 10 月 15 日マグニチュード 7.2 の大地震に見舞われた。2014 年フィールドワーク前に現地コーディネーターから復興が進んでいない状況を知った筆者ら

Hosei University Repository

は、「どのような要因が復興を妨げているのだろうか」という疑問を抱いた。

3．仮説

4．大きな震災が起きれば、各国から支援金が集まる。そこで今回筆者らは「復興支援」という援助の形に目を向けた。被災地では現地の混乱、広域な支援対象、被害の格差などの困難が存在する。上記の理由から、復興支援は援助側が非援助側のニーズを探ることが複雑であり、より困難であると考え、「支援する側が支援される側のニーズに答えていないから復興が進まないのではないか」という仮説を導いた。

5．仮説検証方法

6．上記の仮説を検証する為に、現地での聞き取り調査を20名のフィールドワーク参加者で行った。聞き取り対象者はそれぞれ、我々を受け入れてくれた現地NGO、実際に我々が救援物資を提供した現地住民組織、家の建設ボランティア時インタビューに協力してくれた周辺住民３名である。住民組織は数が大きいため２グループに分けて聞き取りを行った。援助側であるNGOと、被援助側である住民組織や住民から双方のニーズを聞くことで仮説を検証していく。

7．仮説検証・分析

8．聞き取り調査の結果は以下のとおりである。「震災直後に一番大変だったことは何か」という問いに対してはNGO、住民組織、住民１名が「食糧不足」挙げ、残りの２名は個人の家庭事情により「医療」を挙げた。このことから「食糧」というニーズは一部では一致している。しかし「食糧不足」を緊急支援の一つと考え、復興の前段階と捉えると「医療」における復興を求めたニーズには沿えていない。次に「今現在、一番大変なことは何か」という問いではより明確に意見の食い違いが見られた。NGOが「新しくコミュニティを作り、今までなかった避難施設を共同管理すること」を挙げたのに対し、住民組織の２グループは「仕事」を共通し挙げた。また住民の１人は「『仕事』もあり一日をしのぐことができているため、必要なものはない」と答え、もう一人は「病気の為『仕事』ができないので、食べるものが一番必要である」と答えている。現在の困難という点において、被援助側のキーワードは「仕事」であると言える。ここでもまたニーズの不一致がみられた。

9．考察

10．聞き取り調査の結果から「復興が進まないのは援助側と被援助側のニーズの不一致である」という仮説は支持された。しかしそれだけでなく、それぞれのニーズの特性に目を向けると新しい側面が見える。「現在大変なことは」という問いで援助側が挙げたのは被災前には存在しなかった新しい計画である。一方住民が挙げたのは、失ってしまった「仕事」を依然と同じ状況に回

Hosei University Repository

復することである。つまりNGOは「新しい方法での問題の解決」を望んでいるが、住民は「元通り」にすることを望んでいるのだ。防災辞典によると、復旧とは被災前の状態や機能を回復することであり、復興は暮らしと環境を再建するだけでなく、被災前以上に活力を持たせること（日本自然災害会 2002）である。これに当てはめ考えれば、援助側は「復興」を求め、非援助側は「復旧」を求めていると言える。まず「復旧」を行い、その次に「復興」を行う必要がある（林勲男　2010）にもかかわらず、援助側は復旧よりも先に復興を目指している。援助側が目に見える成果を求め「復興」を押しつけてしまう、このことが復興を妨げる一因となるのではないだろうか。

## 論文部門【院生・学外】

蘇　穎（中島教授）

●発表タイトル

# 『菊と刀』の中国語訳本から見る中国人の日本像

**研究背景：**

日本での日本人論ブームは戦後日本の高度経済成長期から始まった。特に、数多くの日本社会の成功に焦点を当てる著書が出版された。一方、中国では、日本の日本人論ブームにやや遅れ、文化大革命の終結と改革開放の到来をきっかけとした第四の日本研究ブームが起こり始めた。ブームの到来により、日本研究の論文や訳書の数は以前より大幅に増加している。そして、北京日本学研究センターの設立、大学での日本語学科の開設、日本研究誌の発行などにつれて、日本の経済、教育に関する研究がさらに推し進められた。1980年代以降の中国研究者によって行われた日本研究では、依然として日本経済への関心が一番強かったが、それと同時に、日本の社会や文化への関心は年ごとに高まっていき、特に2000年に入ってから経済を超え、関心度が一番となった。

しかし、2005年の小泉元首相の靖国神社参拝以降、現在に至るまで日中関係は悪化し続けている。日本に対する反発が高まる一方で、研究者以外でも日本理解を求める中国人が増えている。理解するための手段の一つとして、新渡戸稲造の『武士道』、戴季陶（たいきとう）の『日本論』を読むことが増え、特に、多くの中国人がルース・ベネディクトの『菊と刀』を読み始めた。実際、2000年後の日本認識研究の引用文献については、ケンブリッジ大学の梁萌の統計・分析によると、最も引用されている著作は『菊と刀』（８回）、土居健郎の『甘えの構造』（４回）

Hosei University Repository

と中根千枝の『タテ社会の人間関係』（3回）である。現代の中国の日本研究者たちはこのような日本人論の影響を受けているのではないかと考えられる。

『菊と刀』の中国語訳本は1987年に初めて出版された。日中関係の悪化という時代背景にもかかわらず、『菊と刀』は近年中国で大ベストセラーとなった。現在までにすでに百種以上翻訳本や関連書籍が出版されている。しかし、1948年に『菊と刀』の日本語版が出版されてからすでに60年が経っており、その間に日本の社会が大きく変化している。事実と違う内容を正しい日本理解として読む中国人は、日本への誤解をかえって深めている恐れがあると考えられる。

**研究目的：**

中国語版の『菊と刀』に反映している中国人の日本像を分析し、そして中国の日本理解にどのような影響をもたらすかを解明することにより、日中間の相互理解、関係改善のための方策を検討したいと思う。

**研究内容：**

『菊と刀』の中国語訳本、日本語版との違い、中国人読者の反応などについて分析し、現在の中国人の日本理解に関する問題点について研究を行う。

**先行文献：**

龍谷大学アフラシア平和開発研究センター、2008、よみがえるルース・ベネディクト――紛争解決・文化・日中関係――シンポジウム報告書

**１、訳本の問題点**

①原著の謝辞をすべての中国語訳本は無視したこと 。②原著の用語解説と索引を訳していないことである。

③訳者についての紹介がないことである。 ④本文に誤訳や配慮不足があることである。

**２、挿絵つきの訳本**

中国の訳本にある特徴がある。それは挿絵つきということである。そして、訳者の理解で、実際本文とあまり関係がない挿絵が入れられることが多い。

**本研究の独自性：**

今までに『菊と刀』や「日本論」あるいは「日本人論」についての研究は多いが、2005年以降『菊と刀』のブームという現象に対する分析はそれほど多くはないように見られる。

アメリカの視点から見る日本論が現在の中国人にどう捉えられているかについて分析

**今後の研究計画：**

文献資料の分析

１『菊と刀』各中国語版の比較・分析

２『菊と刀』の中国語版、日本語版、英語版との比較・分析

Hosei University Repository

3『菊と刀』に関連する文章・著作を読む
4中国の日本論や日本人論の著作を読む

---

楊宇（浅川教授）

●発表タイトル

# 文化的自己観と恋愛観・結婚観の関連に関する研究
# ――日中大学生の比較から――

## 研究背景

### 1．恋愛・結婚観を文化心理学視点から研究する必要性について

恋愛観及び結婚観についての研究は、従来から様々な領域でなされてきているが、それらの多くは事例紹介や著者の経験論的知見に基づくものである。このことについて松井（1993）は、経験論的に書かれたものは著者と読者が同じ体験を共有できる保証がないこと、人間関係は所属する集団によって異なること等の理由から、より客観的、科学的な知見に基づく研究の必要性を主張している。

また、D. マツモト（2001）は、人間の行動や自己、アイデンティティの形成に影響を及ぼしているのは「文化」であると述べている。人は文化環境内で育ち、その文化環境が自己という感覚を形成し、さらにその自己が、われわれ人間の心理的な習性や特徴、行動などを形成する。したがって、文化と心を切り離して考えることは難しい。

集団が共有する価値観（文化）の一側面である恋愛観･結婚観が､その文化によって構成される心の働きと密接に関わっていることを、心理学の視点からより明確に、かつ科学的に研究することは必要である。

### 2．文化的自己観と恋愛観・結婚観の関連について

マーカスとキタヤマは（1991）は、個人が自己を認識する際に用いる概念枠である「自己観」が持つ意味や､それが行動に及ぼす機能に伝統的文化差があるとし、自己観はそこで暮らす人々の認識、感情、動機づけなどに対して大きな影響を与えていると述べた。こうした「文化」によって定義される自己観が「文化的自己観」である。人々の自己認識は文化により異なり、さらに日本人は他者とのつながりを感じたいという強い欲求をもっていると指摘されている。一方、中国は日本と同じアジア文化圏に属しているが、日本との間には価値観の違いも多く見られ、自己の捉え方にも違いが存在すると考えられる。また、マーカスとキタヤマの自己観のモデルは、自己と他者の関係性に基づくものであり、恋愛にも影響すると考えられる。したがって、実際の恋愛と結婚の場面において、相互独立的な傾向を持つ人と相互協調的な傾向を持つ人は、重視するポイントあるいは傾向に

Hosei University Repository

違いが見られるのではないだろうか。

仮説：中国人は日本人よりも相互独立的な自己観を持つ傾向が強い。

仮説：個人の価値観や考え方を強く持っている相互独立自己観の強い人は、集団の決まりなどに左右されることなく、思いのままの行動を取る。そのため、伝統的な考え方に左右されることが少ないため、恋愛観・価値観においては開放的な傾向がある。

**３．日本と中国の恋愛観・結婚観の違いについて**

男性が結婚相手に「処女性」を求め、女性が「童貞性」を求める傾向が強いのは、男女交際が原則として伝統的であることを示している。日本では男女の自由な交際が広く見られるが、中国では純潔の要求が根強く残っている（日本・米国・中国結婚をめぐる意識と生活）。相手に求めることだけを見ても、日本と中国の若者の恋愛観・結婚観に大きな違いが存在する。さらに山田昌弘は、その著書「婚活現象の社会学」（2004）中で、現代の日本も中国も恋愛と結婚に様々なものを求め過ぎるようになったため、両国ともに結婚難が始まっているが、結婚に何を求めるかという点で中国と日本は正反対の方向に向かっていると指摘している。そこで、本調査ではまず現代日中の若者の恋愛観・結婚観の差を探る。具体的には以下の仮説を検証する。

仮説：中国人の方が相互独立的な自己観を持つ傾向が強いと思われるが、恋愛観に関しては、中国人の方が保守的だと考えられる。もしそうであれば、相互独立的自己観の強い中国人の恋愛観の方が日本人のそれに比べ保守的傾向に向かうのはなぜかを、日中の文化、社会、歴史の差異に基づいて、検討する。

**研究目的**

本研究では、日中の若者の自己観の違いと恋愛・結婚観の違いにもとづき、日中の恋愛と結婚が今後どこに向かうのか、またその問題点はどこにあるのかを検討し、その実態を明らかする。特に差を生んでいる要因として両国の文化的価値観に焦点を当て、検証する。

また、恋愛と結婚についての考え方は、近年大きな変容を遂げてきているので、現代のライフスタイルに即した恋愛観と結婚観を測定する尺度を作成する必要があると考えている。

Hosei University Repository

桑原恭平（松本教授）

●発表タイトル

# ボランティアに関する文献研究

2014年の夏、筆者は初めてボランティアに参加した。そのボランティアは筆者の指導教員が学部のゼミで行ったフィールドワークの1つであり、2013年10月に発生したボホール島沖地震で倒壊した家屋の修繕である。言語の違いから会話は難しかったが、相手の様子や顔色からコミュニケーションを取り現地の人と一緒に活動した。だが、初めて訪れる地で何の知識もない学生がどれだけ役に立てるかはわからない。それでも、彼らは私たちを迎え入れ帰り際には笑顔で見送ってくれた。この経験をきっかけに筆者はボランティアの研究をするに至った。

本稿ではボランティアに関する文献研究を行う。

ボランティアの語源はラテン語のボルンタス（voluntas）であるとされており、1600年ごろから志願兵、義勇兵という意味で使われ始めた（中島 1999；内海 2001）。日本では1960年代からボランティアという言葉が朝日新聞に現れているが（木下 2005）、それ以前からボランティアに類する活動は行われている。仁平（2011）は1890年代から1910年代までに行われたボランティア的活動を慈善事業と呼び、1910年代から第二次世界大戦前の間には奉仕活動と呼ばれる活動もあったとしている。慈善事業とは富を持っている人が持っていない人を助けることである。奉仕事業とは誰かに対する行為ではなく社会という集団に対する行為から行為者も利益を得るものである。木下（2005）によると、第二次世界大戦中は、国家に強制的に動員されることで慈善事業や奉仕活動は見られなくなったが、戦後から再びそれらの活動が見られるようになった。そして1960年代から朝日新聞にボランティアという言葉が現れ始めた。この頃のボランティアは時間に余裕のある人の活動であり、主婦や学生が主な担い手であった。1970年代はボランティアが自発的無償的な活動として広がりをみせ、1980年代は自己実現や充実感を求めてボランティアを行う人が増加し、1990年代にはこれまでボランティアを担ってきた主婦や学生に加えて、高齢者も参加しボランティアがさらに広がっていった。1990年代以前は奉仕や献身のボランティアであり、1990年代以降は自己実現や生きがいのボランティアである（木下 2005）。

これまでの日本のボランティアを見ると2種類に分類することができる。それは社会のための活動と自分のための活動である。社会のための活動とは、高齢者や障がい者、子どもへの活動に加えて福祉社会の構築やそれを構築するための市民活動などである。自分のための活動とは、ボランティアを通して技術を学んだりボランティアそのものに価値を見つけたりすることである（米山 2006）。内海ら（2012）は、社会のための活動を公益性と呼びボランティアをする側の必要な条件

Hosei University Repository

であると捉えている。公益性の他に、経済的な報酬を目的としない無償性や自らの意思のもとボランティアを行う自発性もボランティアをする側の必要な条件である。また、田尾ら（2004）は自分のための活動を自己実現性と捉え、ボランティアに参加する人たちは自らの可能性を引き出すために参加する。そしてボランティアに参加する人たちは何らかの報酬をもらっているとされる。その報酬は経済的なものではなくボランティアに参加した人それぞれで異なるものであり、お金には変えられない価値がある（金子 2013）。

ここまでの日本のボランティアの歴史やボランティアの参加の理由などを整理してきた。ここからは、日本のボランティアが一気に広がりを見せた事例に着目する。その事例はその年がボランティア元年と呼ばれるきっかけとなった 1995 年 1 月 17 日に起きた阪神淡路大震災である。阪神淡路大震災はそれまであったボランティアの否定的なイメージを一新し、ボランティアの参加によって得られる満足感など肯定的な意味をもたらすようになった（菅 2011）。また、多くのボランティアが被災地に訪れたことで彼らをどうすれば効率よく運用できるか、ボランティアの活用方法を明確にすることも必要になった（米山 2006）。

ボランティアに関する既存研究で明らかになったことは、ボランティアに参加する人たちや参加の理由、ボランティアの広がりのきっかけなどである。しかし、ボランティア研究には欠けている視点が存在する。それはボランティアを受け入れる側の人たちである。この視点について、原田（2000：72）は「これまでのボランティア論の最大の問題点は『される側』の意思とはほとんど無関係にボランティアが論じられてきた」と述べているように、そもそもなぜボランティアを受け入れるのかを研究することはこれまでのボランティア研究から見て重要な視点であると言える。

**参考文献**

中嶋充洋『ボランティア論 共生の社会づくりを目指して』、東京：中央法規出版、1999 年.

原田隆司『ボランティアという人間関係』、京都：世界思想社、2000 年.

内海成治『ボランティア学のすすめ』、京都：昭和堂、2001 年.

田尾雅夫 川野祐二『ボランティア・NPO の組織論 - 非営利の経営を考える - 』、東京：学陽書房、2004 年.

木下征彦『朝日新聞紙面に見る戦後日本におけるボランティア像の転換過程 - ボランティア像の歴史分析 - 』、日本ボランティア学会 2003 年度学会誌、vol5、pp98 ～ 117、2005 年.

米山岳廣『ボランティア活動の基礎と実際』、東京：文化書房博文社、2006 年.

菅磨志保『日本における災害ボランティア活動の論理と活動展開 -「ボランティア元年」から 15 年後の現状と課題 - 』、社会安全学研究、vol 1、pp55 ～ 66、

Hosei University Repository

2011 年.
仁平典宏『「ボランティア」誕生と終焉』、愛知：名古屋大学出版会、2011 年.
内海成治 入江幸男 水野義之『ボランティア学を学ぶ人のために』、京都：世界思想社、2012 年.
金子郁容『ボランティア もうひとつの情報社会』、東京：岩波書店、2013 年.

---

鵜澤光佑（大中教授）

●発表タイトル

## ブルキナファソの栄養不足の問題に関する考察

本発表の目的は、ブルキナファソ（以下、ブ国）の現状を把握し、今後の研究課題を提示することである。

ブ国は北にマリ、東にニジェール、南東にベナン、トーゴ、南にガーナ、南西にコートジボワールと国境を接する西アフリカの内陸国である。モシ族、デュラ族、プゥラ族、サモ族、マルカ族、ハウサ族、トアレグ族など、60 以上の部族から成り立ち、最大勢力はモシ族である。

近年、ブ国は GDP にして 5.5% 以上の経済成長を記録している。金の採掘量の増加や綿花の輸出量の増加によるものが大きい。しかし経済成長の恩恵は一部の国民だけが受けるなど、利益の還元のされ方が不平等である。ブ国は依然として、降雨量の少なさ、国際的な経済危機の影響、石油価格の高騰、地方の非安定性に悩んでいる。

ブ国に関する統計データを用いて同国が現在抱えている栄養に関する問題を整理した。世界で最も貧しい 10 ヵ国の 1 つであり、2014 年の人間開発指標によると 187 位中 181 位であった。2009 年のデータでは人口の 46.7% が絶対的貧困線以下の生活をしている。人口の大部分が基本的な社会サービスへのアクセスがなく、飲用水や衛生設備の不足に苦しんでいる。国際連合食糧農業機関によるとブ国の飢餓人口は 2001 年には 350 万人であり、その数値は 2012 年には 440 万人にまで登っているのだ。

統計データを整理したところ、ブ国では地域毎の貧困格差と栄養不足の格差が必ずしも一致するわけではないことがわかった。1 人辺り 82672 FCFA（約 130€）の収入を有しているかどうかを貧困線とした際、以下の地方では、2003 年に貧困線以下の生活をしている住民の割合が国家の平均（46.1%）を下回っていた。北部（68.6%）、中央南部（66.1%）、ブークル地方（60.4%）、中央平野（58.6%）、南西部（56.6%）、中央東部（55.1%）である。一方、同じ年の女性の栄養不足は、以下の地方で国家の平均（23.6%）よりも悪い結果が確認された。中央平野（37%）、

Hosei University Repository

中央南部（33.3%）、サヘル地方（27.5%）、北部（26.5%）、カスカッド（24%）である。

また、食糧生産が十分にある地方でも、５歳以下の子供が栄養不足に見舞われることが確認できた。国際連合世界食糧計画（2014）によると、2013年のブ国で食糧生産が十分であり、住民が経済的な困難を抱えていない割合の最も高い地方はカスカッド地方（70%）であった。しかし、同じ年に子供が栄養不足に陥る割合では、カスカッド地方は41%と最も高い数値を記録した。食料は十分にあるが、生活の他の面での支出に問題を抱えている割合がサヘル地方（65%）や東部（53%）は５歳以下の子供の栄養不足が高くなる傾向が見られた（サヘル地方は39%、東部は39%）。

以上のことからブ国の栄養不足は貧困や食糧生産の不足する地域と、一致するわけではない。ブ国の栄養不足は食糧生産ではないほかの要因から引き起こされているのだ。

こうしたブ国の抱える栄養問題に対し、米国国際開発庁（USAID）や国際協力機構（JICA）による既存の研究では栄養不足の問題が深刻な地方を支援の対象とした個々の支援を行う必要性を説いている。主要な開発プログラムの対象地域から外れてしまっていることが、栄養不足問題が解決しない理由であるとしている。

こうした先行研究で挙げられている要素に加え、ブ国の政治、民族、文化的な要素も栄養不足の一因になっていると考える。政治的な要因としては国民の一部が法の下で平等な扱いを受けていないと主張している割合がブ国は近隣の国に比べて高いことが確認されている（Estelle et al 2014）。民族的な要因ではブ国の政治は伝統的な支配者層であったモシ族とのつながりが強く、独立後の政治でも政権に敵対する者は排除されたことが報告されている（GADO 2003；Ouedraogo 2003）。そして、文化的な要因としては女性が農地を管理する権利を伝統的に有していなかったなど、ブ国では男性優位の社会が形成されていたのだ（Juste 2014；Maïga 2014）。以上のことから、ブ国の栄養不足の問題と政治、民族、文化的な背景の関連を探ることが今後の課題である。

---

小林亜佑美（山根教授）

●発表タイトル

## ヤンソンの文学作品における＜相互理解の不可能性＞に関する分析：短編「人形の家」を中心に

児童文学のムーミンシリーズ（1945-70、全９巻）は、作者トーヴェ・ヤンソン（1914-2001）が＜子どもの世界＞とみなす内容を描くものとして始まり、次第にそこを脱する過程をたどった。

Hosei University Repository

＜子どもの世界＞を描く作品は、出来事を記述する筋書きに重点が置かれているが、ムーミンシリーズ後期作品以降では筋書きに代わって心理描写が作品の中核を担っている。＜子どもの世界＞を描くことから離れたヤンソンは、その後文学作品によって何を表現したのか。

彼女はムーミンシリーズ以降大人向けの小説および短編の作品を書いた。これらの作品のいくつかにおいては、＜相互理解の不可能性＞という共通の主題を見出すことができる。それゆえこの主題は、さまざまなモチーフを使用しながらヤンソンが文学作品によって表現を試みた内容のひとつであるといえるだろう。本発表では、短編集『人形の家』（1978 年刊行、原題 Dockskåpet och andra berättelser（典））に収められている「人形の家」を題材としてこの主題の具体的な表現を提示し、さらに今後の研究課題である＜相互理解の不可能性＞の創作背景についての考察の見通しを述べる。

**発表内容の詳細**

**１．作家と作品について**

画家であり作家でもあるヤンソンは、漫画やエッセイの執筆など幅広い分野で表現活動を行った人物である。児童文学のムーミンシリーズを書いたことにより彼女の作家活動は本格化した。＜相互理解の不可能性＞はムーミンシリーズ後期作品ですでに扱われ始めており、シリーズ終了後に刊行された大人向けの作品に引き継がれている。

短編「人形の家」は、室内装飾師のアレクサンデルが退職後に住居の一角に作り始めた小さな＜家＞の製作過程における、彼とその同居人のエリク、＜家＞の電気配線を手伝うボーイの三人をめぐる作品である。

**２．目的と方法**

ムーミンシリーズから大人向け作品にかけて作品の主題が変化したことに着目し、大人向け作品における表現内容とその意図を探ることを目的とする。

方法としては、まず作品を詳細に分析し、その結果にヤンソンの思想や人生を照応する。こうした視点に立つのは、ヤンソン自身が語った、あるいは伝記によって語られたものには顕著に現れてはいないことが、文学作品に潜んでいる可能性を考慮し、作品を構成するさまざまな要素を漏らさず検証するためである。

**３．「人形の家」の作品分析**

アレクサンデルの同居人であるエリクを中心人物として分析を行う。

アレクサンデルは自分の作る＜家＞を幻想的・理想的な意味を含む＜完全無欠な家＞と考えている。エリクはこれを単なる模型としての＜人形の家＞とみなす現実的な認識を持っており、この点はボーイも同様だ。しかし、エリクが＜家＞をアレクサンデルと彼の二人のものであると認識しているのに対して、ボーイは実際に制作に携わるアレクサンデルとボーイのものであると認識しているため、

Hosei University Repository

エリクはボーイに対抗心を抱く。エリクは＜家＞についてのアレクサンデルの非現実的な認識に接近しようとするが、最後まで＜人形の家＞と発言しており、アレクサンデルに認識への理解には至らない。「人形の家」は、他者に対する理解の試みと挫折が描かれている作品であり、これがヤンソンの作品における＜相互理解の不可能性」の表現の一例である。

**４．その他の作品における＜相互理解の不可能性＞**

『ムーミン谷の仲間たち』(1962)、『ムーミン谷の十一月』(1970)、『誠実な詐欺師』(1982)、短編集『クララからの手紙』(1991) における「絵」など、ムーミンシリーズ後期作品以降扱われ続けている主題である。

**５．ヤンソンの大人向け作品に関する一考察**

言語的に少数派であり言語対立の時代に生き、芸術家の家庭という特殊な環境で育ったことは他者との認識の差をヤンソンに意識させる要因だったのではないか。晩年には母語の異なるパートナーと造語を作りながら意思疎通を図っていたが、その中でも＜相互理解の不可能性＞を感じていたのかもしれない。

---

若林祐利（川村教授）

●発表タイトル

## 世界で読まれる「村上文学」の力

**１　はじめに**

21 世紀のグローバル化の時代、世界の国々で政治、経済、文化などあらゆる分野で国際交流が推進されている。多種多様な文化が相互に依存しながら成立している国際社会を、インターカルチュラル・コミュニケーション、すなわち異文化間の理解と交流によって成立するのが「国際文化」という概念に立って、日本の作家・村上春樹における文学の力を探求し、村上文学の世界的な現象論を試みる。

**２　国際社会に発信する日本文学**

日本文学の海外への発信は、明治時代に岡倉天心『茶の本』、鈴木大拙『禅と日本文化』などの文献があるが、近代日本の文学作品が本格的に紹介され始めたのは第二次世界大戦後の 1950 年代に入ってからである。谷崎潤一郎、三島由紀夫など当時、日本を代表する作家の文学作品が英訳され、その後、日本の文学作品は多くの言語に翻訳されるようになった。

ここ数年、毎年のようにノーベル文学賞の有力候補に名を連ねている現代作家・村上春樹の作品は、世界の多くの国で翻訳されるとともにカフカ賞などの国際的な文学賞を受賞し、村上文学が国際文化に認知されていることが伺える。2014 年の今夏、台湾の淡江大学に村上文学の国際的な研究拠点「村上春樹研究センター」

Hosei University Repository

が開設されたことは、村上文学が国際文化、国際交流の推進に果たす役割は大きいといえる。

**３　村上春樹の原風景**

作家の原点はデビュー作といわれる。村上春樹が「小説を書こう」と唐突に思い立ったのは、神宮球場でプロ野球の観戦中、1978 年、29 歳の時であった。『風の歌を聴け』（「群像」新人文学賞受賞）でデビューする前のエピソードである。

**４　村上文学への視線**

村上春樹は 1949 年京都市生まれの、いわゆる「団塊の世代」の作家である。文学新人賞を受賞した翌年には早々と話題作『1973 年のピンボール』を刊行し、以降、常に第一線の作家として数々の問題作、衝撃作を発表し続けている。

村上文学を構築するひとつのキーワードに「国際性」がある。アメリカ、ヨーロッパなどでの海外暮らしや旅を重ね、また海外文学の翻訳にも取り組むなどエネルギッシュな作家として、日本のみならず世界へ発信している。国際社会の中で「世界はムラカミハルキをどう読むか」など村上文学が世界的な文学として捉えられ、また＜ハルキブーム＞が起きるなど特異な現象をもたらし、各方面からも村上文学に対するさまざまな視線が注がれている。

**５　スピーチを読む**

国際社会における情報メディアとネットワーク社会における作家の行動と発言が、作品とは無縁なメッセージとして世界の人々にインフォメーションされる。作家の発言は、その作家の作品以上に影響を及ぼす側面もある。

**６　作品分析**

『スプートニクの恋人』　村上春樹 50 歳の時の作品。主な舞台は東京、ギリシャ。前作までの作品の主人公の表記は「僕」を今作品は「ぼく」に転換し、「自分の文体をいろいろな角度から試した」という自身の文体を実証した意欲作。

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』　東日本大震災後に書かれた初の長編。主な舞台は東京、名古屋、フィンランド。単行本発売前後のフィーバーぶりはメディアが取り上げ大きな話題となる。

---

葉念覊（浅川教授）

●発表タイトル

## 在日留学生のカルチャーショックと異文化適応―文化的知性と言語習得のフロー経験の視点から

2012 年に、世界中の留学生の人数が 4 百万人以上に超えている。2000 年より世界全体の留学生の増加は大幅に成長している（UNESCO、2014）。2011 年には日

Hosei University Repository

本で「留学生 30 万人」政策が実施されたことにより、現在の在日留学生はおよそ 19 万人に上る（法務省、2014）。在日留学生の数は年々増加しつつあり、留学生の異文化適応問題も生み出していくようになっている。ここで、在日留学生がカルチャーショックを受けた際、異文化適応における日本語能力のフロー経験の役に立ち度合いと文化的知能の役割を探求する。

**〈カルチャーショック〉**

カルチャーショックという言葉は、アメリカの文化人類学者のオバーグによって初めて用いられた。カルチャーショックとは、一般的に言うと、個人が自身の文化が持っている生活様式・行動規範・人間観・価値観とは多かれ少なかれ異なる文化に接触した際、当初の感情的衝撃、認知的不一致として把握されることが多いが、決してそれだけに留まらず、それに伴う心身症状や、累積的に起こる潜在的・慢性的パニック状態である（星野、1980；川岸・武内・阪上、2014）。オバーグによると、カルチャーショックには主に 4 つの段階がある。ハネムーン期、敵対期、神経質な衰弱期、そして適応期である。留学生は新しい環境で生活を始めると、多くの場合、カルチャーショックに遭遇する。オバーグは、カルチャーショックは異文化状況で起こる文化ストレスに適応するための過程であり、その積極的な意義を認めている。その意義を認識しつつ、カルチャーショックにどう対処するかが、留学生のその後の適応を左右する。

**〈異文化適応〉**

異文化適応とは、ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なる新たな環境に次第に慣れてゆく心理的な過程をいう。（Lysgaard、1955； Oberg、1960；高井、1989）。また、留学生の異文化適応に関する先行研究をみると、日本語能力も在日留学生の適応に影響を与える重要な要因の一つとして挙げられている（岩男・萩原、1988；松倉、1997；譚・渡邉・今野、2011）。事実、語学力と適応感には強い関係があることが報告されており（樋口、1997；松倉、1997）、それを裏付けるように、留学生の語学能力と社会適応に正の相関があることが、これまで多くの研究によって明らかにされてきている（Hull、1978; Heikinheimo & Shute、1986; Marion、1986; Cox、1988; 原田、2013）。

**〈文化的知性（略称：CQ）〉**

カルチャーインテリジェンスは、人が効率的に新たな文化に適応する可能性と定義されている（Earley & Soon、2003）。CQ は人の異文化適応の度合いが予測できる。その中で、 4 つの要素がある。メタ認知知能（Meta-cognitive CQ）、認知知能（Cognitive CQ）、動機づけ知能（Motivational CQ）、そして行為的な知能（Behavior CQ）である。先行研究では、行為的な知能は全般的な文化適応との関連性がある。また、動機づけ知能は適応的な結果と一致し、動機づけ知能が仕事、社交的な交流活動、そして全般的な適応を推測できることが明らかにして

Hosei University Repository

いる（Ward、Wison & Fischer、2011）。一方、他の研究でも、CQ が高ければ高いほど、情緒の統御能力も高くなると示している（Crowne、2008）。したがって、CQ は一つ重要な指標として、留学生の異文化適応度合いと将来で適応できる予測因子を測定基準である。

**〈フロー経験〉**

アメリカの心理学者ミハイ・チクセントミハイによって提唱されたフロー理論によれば、人はフローという自己の没入感覚を伴う楽しい経験を通して、より複雑な能力や技能をもった存在へと成長していくという。日本人を対象とした浅川の調査（2010）は、フロー経験が人々の精神的健康や心理的ウェルビーイングを促進する可能性を示唆している。心理的ウェルビーイングとは、人が心理的に健康で、社会の一員としてやるべきことをし、健全に生きていることを意味する。従って、フローは人々のウェルビーイングに重要な役割を果たし得る経験といえる。このような視点から、留学生達が日本語習得の過程でフロー経験を通じて、留学生の心理的健康を促進するための方策を検討することをその目的とする。

**〈結論〉**

このグローバル化社会では、異文化間を接触する際、不可避な緊張や葛藤が発生し、人が適応不良な場合もある。カルチャーショックを緩和しながら、適応できるようになるため、相手国の言語を習得する同時にその国の文化を知る必要がある。フロー経験を通じて、留学生の心理的ウェルビーイングを促進することを期待している。

---

市岡　卓（中島教授）

●発表タイトル

## シンガポールの言語政策と中国語方言話者

シンガポールでは、英語に加え３つの主要民族の「母語」を公用語とする多言語政策の結果、「母語」とされた華語を習得できない中国語方言話者の周縁化が進んでいる。本発表では、人口統計を活用しながら、高齢化が進むシンガポールの中国語方言話者の抱える問題を明らかにし、今後の方向性を展望する。

**（発表内容）**

**１　シンガポールにおける多言語政策**

シンガポールは、華人（74%）、マレー人（13%）、インド人（９%）、その他（３%）の４つの民族からなる多民族国家である。1965 年にマレーシアから追放され独立した後は、敵対する隣国マレーシア・インドネシアに配慮しながら、国内の民族紛争の再発を回避して治安の安定を図り、国家としての生存をかけて経済開発を

Hosei University Repository

目指すために、多数派の華人への同化による統合ではなく、すべての民族を平等に取り扱う「多人種主義」を推進してきた。

言語政策面では、英語の使用を中心としながらも、英語に加え、３つの主要民族の「母語」とされた華語（中国標準語）、マレー語、タミール語を公用語とする多言語政策が進められてきた。

## ２　中国語方言話者の周縁化

華人はほとんどが中国南部沿岸からの移民やその子孫であり、母語は福建語、潮州語、広東語などの中国語方言であった。独立後の多言語政策の下で育った華人は、英語とともに本来の母語ではない華語を「母語」として学校で教えられ、また、政府による華語普及キャンペーンや中国語方言メディアの廃止などにより、英語・華語話者が中心となっている。

独立前は、中国語方言話者が人口で多数を占め、また、特に福建語が広く通用するなど、中国語方言話者は言語マジョリティであった。しかし、独立後、中国語方言話者の中で英語も華語を習得できなかった人々は、政府の言語政策の結果として４つの公用語のうち一つも十分に使うことができない言語マイノリティとなった。人口統計からは、中国語方言話者の経済的・社会的地位の低さが明らかであり、彼らが経済活動への参画機会を奪われ、周縁化されてきたことがみてとれる。政府が福祉国家化を拒否し、国民の自助努力を旨とするシンガポールにおいて、高齢化する中国語方言話者の貧困の問題は深刻である。

## ３　中国語方言話者への支援の動き

2011 年の総選挙で与党・人民行動党（People's Action Party）が後退した結果、権威主義的統治体制を維持してきた政府も、国民の声を聴く政府への転換をアピールするようになり、大きな政治環境の変化がもたらされた。この中で、政府が中国語方言を容認する動きがあり、注目される。

2012 年から 13 年にかけては政府と国民との対話 “Our Singapore Conversation” が実施されたが、この際、４つの公用語に加え、３つの中国語方言（福建語、潮州語、広東語）でも意見聴取が実施された。

また、政府は本年９月から高齢者の生活支援対策 “Pioneer Generation Package” を実施しているが、その周知が不十分であるとして、４つの公用語に加え６つの中国語方言（福建語、潮州語、広東語、客家語、海南語、福州語）で広報を行っている。

このように、政府が国民に歩み寄ろうとし、また、高齢者への支援が重要な課題になる中で、中国語方言話者に対し本来の母語でアプローチする動きが出てきている。

## ４　まとめ

シンガポールでは、華人とマレー人との経済的・社会的格差が問題とされるが、

Hosei University Repository

人口統計を用いた分析の結果、中国語方言話者の華人が経済的・社会的に低い地位にあることが明らかになった。

社会の高齢化の進行により、低学歴・低収入の人々への支援措置の充実とあわせて、その周知が一層重要な課題になる。本年８月には、新たな高齢者支援対策として、公営住宅の居住権の一部買戻し・現金化による支援措置が発表されたが、こうした支援措置の内容の難解さが、問題を一層困難なものにする。これまでは中国語方言の使用が抑制されてきたが、今後は、多言語政策により周縁化された中国語方言話者への、言語面での支援がさらに重要になると考えられる。

**（参考資料）**

Chua, Beng Huat (2005), *Taking Group Rights Seriously: Multiracialism in Singapore*, Working Paper No.124 October 2005, Asia Research Centre, Murdoch University

Housing & Development Board (Website), *Lease Buyback Overview*, http://www.hdb.gov.sg/fi10/fi10325p.nsf/w/MaxFinancesOverviewLeaseBuyback?OpenDocument

Our Singapore Conversation (Website), http://www.reach.gov.sg/Microsite/osc/index.html

Our Singapore Conversation Committee (2013), *Reflections of Our Singapore Conversation*

Pioneer Generation Package (Website), http://www.cpf.gov.sg/pioneers/pg.asp

Singapore Department of Statistics (2011), *Census of Population 2010*

Singapore Government (Website), *Pioneer Generation Package Materials*, http://www.gov.sg/government/web/content/govsg/classic/subsite/pgpmaterials

The Straits Times 関連記事

---

李　蕾（曽教授）

●発表タイトル

# 中国帰国者について

**１　研究の動機：**

私は、中国の遼寧師範大学で日本語を専攻し、その後国内の大学で日本語を２年半勉強した。私がその時在籍していた中国の大学は、ちょうど日本の北陸大学と提携校だった。そのため、日本語専攻の学生であり、なおかつ北陸大学から出

Hosei University Repository

される試験に合格さえすれば、そこでの留学が可能であった。日本語を勉強している私にとって、日本への留学は欠かせないことだった。そして試験に合格し、順調に日本留学の準備に入ることができた。

日本にいる遠い親戚は、私が日本に留学することを知ると、偶に電話してきてくれた。彼女は日本の孤児の一人であり、時々孤児について話してくれる。　私は、彼女を通して、日本にいる孤児の存在や彼女たちの悩みについて詳しく知るようになった。私の故郷が中国東北部の一番大きな街瀋陽で、孤児や残留婦人などの言葉はよく耳にはしていたが、詳しいことまでは知らなかった。なぜ彼らが中国にいるのか。そして彼らが中国人と同じように中国語を話すのに、なぜ中国人ではないのか。また、彼らがなぜ日本に帰ってきたのか。このような疑問が次々と浮かんできた。そこで私は、残留孤児や残留婦人などのことについて、本格的に研究することにした。

**２　中国帰国者について**

「中国帰国者」という言葉は一般的によく知られているのだろうか。いや、知る人は少ないだろう。なかには、文字通りに「中国に帰国した人たち」と勘違いする人も少なくはないだろう。そして、たとえこの言葉を知っていたとしても、彼らがどのような人たちで、どこでどのような日常生活を送っているのかについて知る人はもっと少ないだろう。彼らはどのような歴史を生き抜き、今日の日本社会で生きているのか。そして、自己と日本社会とをどのように位置づけているのだろうか。

中国と日本という二つの文化間で生きる人生、そして彼らが日本社会についてどのように考えているのかについて言及する人は僅かしかいない。蘭信三は中国帰国者について、「第二次世界大戦時あるいはそれ以前に中華民国、関東州および『満州国』に居住し、ほとんどの日本人が敗戦直後の集団引き揚げで日本に引き上げた後も、約 30 年余以上にわたってそこに、『残留』し、日本と中国が国交を回復する 1972 年以後に、中国から日本に『帰国』してきた『日本人』およびその家族。つまり、中国帰国者とは、1970 年代以後に中国から日本に『帰国』してきた『中国残留日本人孤児』や『中国残留日本婦人』とその家族のことなのである。」と定義している。

彼らは日本社会に完全に融け込めるわけではなかった。帰国支援や自立支援が行われても、多くは職場や学校、地域で周辺に追いやられ、社会的に排除され孤立していった。彼らが抱える一番の問題は、自己アイデンティティに対する不安である。中国では「小日本鬼子」といじめられ、やっと日本人として祖国に帰国してきた。しかし、日本社会は一時的に迎えてくれたが、定着するに従って、冷たくなり、「日本人なのに、日本語ができない」と彼らは排除されてきた。そのように、彼ら「中国帰国者」たちは、日本人だから日本人になれという同化圧力の

Hosei University Repository

下で、生活適応に努力してきた。彼らは単なる引き揚げ者ではなく、異文化を生きてきた人たちであった。帰国者たちは、国民として日本社会に迎えられるものの、一方で排除されるという現実に悩まされなくてはいけなかった。以上、中国残留の経緯、日本への帰国などの歴史的背景を踏まえながら、発表したいと考えている。

---

村上一基（学外（一橋大学大学院・日本学術振興会特別研究員）、2006 年国際文化学部卒業）

●発表タイトル

## フランス・大都市郊外におけるムスリム移民の家庭教育――社会統合とアイデンティティ

### １．問題の所在

本報告の目的は、フランス・パリ郊外で子どもを育てるムスリム移民の家庭教育を、子どものフランス社会への統合と、家庭内でのアイデンティティ、特に宗教や文化の伝達という２つの関心事に着目し、考察することである。

フランスにおいて、大都市郊外の大衆地区は失業、犯罪、移民、人種差別や「都市暴力」といった社会的困難が集積した地域であり、セグリゲーションやゲットー化などの問題と関連付けられてきた。ここで家族の問題は常に重要な争点のひとつをなしている。つまり、家族や親は、子どもの犯罪や不登校に関して教育関係者や政治家などからその責任の欠如を問われ、親は子どもの教育を「放棄」していると批難されるなど問題視されてきた。特に移民の家族は、大家族やひとり親家族（特にシングルマザー）、一夫多妻の家族といった家族構造、さらに親のフランス語能力や文化背景の違いからとりわけ問題視されてきた。

しかしながら、移民である親は本当に教育を放棄しているのだろうか。移民の家庭教育に関するフランスの先行研究では、子どもの社会統合の問題に対する関心から、もっぱら学校教育の問題が議論されてきた。だが、移民の家庭教育を理解するためには、文化や宗教、アイデンティティなど学校教育に限られないより広義の教育的関心からアプローチしなければならない。本報告では、ムスリムの親が子どもの社会的統合に関心を持ちつつも、学校との教育様式の違いや地域の社会環境への懸念といった教育上の困難を抱えていること、その一方で家庭内で文化や宗教など子どもたちにアイデンティティを与えることに重きを与えていることを明らかにする。

### ２．研究方法

本報告では、2010年10月から2013年３月まで、パリ郊外の２つの大衆地区で行った調査結果を用いる。調査では、中学生以上の子どもを持つ親、地区で育った若者、中学校の教職員、そして教育の分野で活動するアソシエーションや自治体の職員、

Hosei University Repository

計162名にインタビューを行った。また人びとの生きられた経験を理解するために、民族誌調査もそれぞれの地区で実施した。

## ３．考察

インタビューを実施したすべての親は、学校での成功を子どもの将来のために必要不可欠なものとして捉えていた。しかし、こうした認識にも関わらず、かれらがフランスの公立学校で求められる形で子どもの学校教育に関与することはなく、家族と学校の間には文化的な距離がみられた。また子どもの地域社会での交友関係への懸念は、インタビューで最も強調された主題のひとつであり、地区における若者の悪影響や犯罪の危険から子どもを守ることが重要だとされていた。そのため、親は地区の社会生活から距離をとろうとしていた。

調査を行ったムスリム移民の家庭教育において積極的になされるのは、家族における伝統的な家族の価値や文化の伝達であった。移民を背景に持つ親は、子どものフランス社会への統合と家庭内における文化の伝達のバランスを模索しようとしていた。特にラマダンの実践やハラール食品の選択、１日５回の礼拝など、家庭内における宗教の実践は頻繁に見られる。しかしそれは子どもの教育に対して、何らかの「コミュニティ」のサポートを求めるものでも、移住先社会で「エスニック・コミュニティ」を作ることを目的とするものでもなく、それぞれの家族が家庭内で伝え、実践するためのものであった。このことを通じて、親は自分たちの尊厳を守るのと同時に、子どもたちや家族を地区やフランス社会の悪影響から保護し、拠り所を与えようとしていた。

## ４．結論

移民である親は子どもの学校での成功によって、社会における「制度的」承認を獲得する。そのことは自らの移住先社会での「成功」の証しとなる。だが同時に、家庭内で伝統的教育を維持することで、かれらは子どもたちに対する威厳を保ち、さらに社会における文化的な承認を手に入れようとしていた。

Hosei University Repository

## ポスター部門

山田直弥、鈴木格、江原早紀、笠原美咲、田中希帆、齋藤眞美、佐藤紘輝、雑賀諒太郎、金井晶、藤田萌、田中祐希、鈴木真理、中島春世、鹿瀬健太郎（中島ゼミ）

●発表タイトル

### セブンイレブンの海外展開

私たちの生活の一部となっている、コンビニエンスストア。コンビニ大手各社による国内の出店も限界が近づきつつあり、いわゆる国内市場の飽和状態といっても過言ではない。大手コンビニ各社は、次々と海外に店舗を増やしていき、その中でもセブンイレブンの海外成長は群を抜いている。今や多国籍企業としての地位を確立したセブンアンドアイホールディングスは、私たちのゼミにとっても研究対象となりうるので今回の発表ではこれを取り上げた。

５枚のポスターを用いて発表する。１枚目がセブンイレブンの基本的な情報とコンビニ業界やコンビニエンスストアの定義など根本的な説明をしていき、導入を行っていく。２枚目は大手コンビニ３社、セブンイレブン、ファミリーマート、ローソンを扱い、各社の業界での売り上げや規模などデータや国内外の戦略を比較していき、セブンイレブンの特徴をつけいく。３枚目は、セブンイレブンのこれまでの海外展開や戦略について説明していき、どのようにセブンイレブンを海外に広めていったのか、またどのように経営しているのかなどを掘り下げて説明していく。４枚目は、海外にある少し変わった特徴をもったセブンイレブンや海外ならではのセブンイレブンの紹介と海外店舗の撤退などや発展について扱う。５枚目は、セブンイレブンが迎えた新局面での海外展開とこれからの海外戦略について例をあげながら説明していく。

---

郭林艶、藤村茉由、望月智美（松本ゼミ）

●発表タイトル

### 続・大学生版海外フィールドワーク論

近年、海外でのフィールドワークを行う大学生が増えている。我々松本ゼミもそのうちの１つだ。ゼミ生 22 名は今年の夏、松本悟准教授のもと昨年に引き続きフィリピンでフィールドワークを行った。目的は、聞き取りや視察を通じてボホール震災の復興状況やマニラの都市貧困、サンロケダム建設の影響を調査する

Hosei University Repository

ことである。しかし大学生がこのように海外で調査を行うのは簡単なことではない。現に昨年のフィールドワーク参加者は現地で様々な困難や課題を経験し、大学生が海外でフィールドワークを行う際には３つの制約（時間、資金、興味･関心）が存在することを明らかにした。そしてそれらを昨年の国際文化情報学会においてポスターの部で発表し、大学生自ら「大学生版海外フィールドワーク論」を構築することが必要だと呼びかけた。よって、我々は今年もこのテーマでポスター発表を行い、大学生が海外でフィールドワークを行う際何を考慮し実践すべきなのか、今年のフィールドワークでの経験を紹介しながら説いていきたい。

フィールドワーク論の構築には実際の経験が必要不可欠である。そこで我々は、昨年の制約を克服することを目標として今年のフィールドワークに臨んだ。大きく変えた点は日程を「前半・後半・全日程組」に分けたことである。個々が金銭的事情や興味関心、体力を考慮して自分に合ったフィールドワークを行うためだ。それに加え、今回は事前に現地で気をつけるべきこと・やるべきことを記した実施方針案を作成し、現地の調査に臨んだ。これは、途上国でのフィールドワークの経験が豊富な人間環境学部の武貞稔彦教授へのインタビューをもとに作成したものである。主に焦点をあてたのは昨年の参加者が陥った困難であり既存文献でも書かれていた「余裕のあるスケジューリング・通訳者とのコミュニケーション・周辺地域の把握」の３つである。日程を変えたこととこれら３つの改善策は効果的だったのだろうか。

結論からいうと、今年は昨年よりも大幅に質の高いフィールドワークになったといえる。ゆとりのあるスケジュールのなかで良好な体調で調査に臨み、調査結果をその日のうちに皆と共有できたこと、通訳者と事前打ち合わせを行い意思疎通の向上を図れたこと、そしてそれによりインタビュー中に分からない地名が出てきても通訳者に助けてもらえたなど様々な要素が関連し合い良い方向に繋がったためである。またそれぞれが自分の選んだ日程で満足のゆくフィールドワークを行えたことも事後アンケートから明らかになった。

ただ、今年は参加人数が 22 名と昨年の 13 名から大幅に増えたことによる問題も起きた。例えば集合や移動に時間がかかる、会場設営が大変といった問題だ。しかし複数のグループに分かれて調査を行い、それを共有することで短期間に多くの調査結果を得られたため利点のほうが大きかったともいえる。時間やお金があまりない大学生が多くの興味関心を満たすフィールドワークにするためには、人数という視点を持つ必要もある。今後は、より良いフィールドワークにするために、昨年の３つの視点（余裕のあるスケジューリング、通訳者とのコミュニケーション、周辺地域の把握）に人数という新たな視点も加えてフィールドワーク論を考えていきたい。

今回構築したフィールドワーク論は、今後学生にとって効果的な指標になるで

Hosei University Repository

あろう。しかし、これはあくまでも円滑な調査を行うためのルールのようなものに過ぎない。フィールドワーク論を根底に据えつつも、フィールドワークで経験するもの全てが学びになるということを我々は今回のフィールドワークを経て実感した。現地でフィールドワークを作り上げるのはフィールドワーク論ではなく、自分たちだということを忘れてはならない。

---

佐野亜美、小川有奈、高瀬悠人、中野柚菜、袁思澄、鈴木佳子、並木祐佳、柳穎美、脇萌実（曽ゼミ）

●発表タイトル

## 東京どうでしょう ’14

私たち曽ゼミガイドブックチームは「日本のインバウンド観光活性化につながる情報の発信」を目標とし、東京を中心にして調査研究を進めてきた。今年度は箱根を取り上げ、Web ガイドブックを作成した。箱根を取り上げた理由は JNTO（日本政府観光局）による調査報告書『訪日外客訪問地調査 2010』において「観光客が訪日前に日本に期待したこと」の３位歴史的景観、４位自然、５位温泉のいずれをも満たし、手軽に訪れることができる場所は東京近郊にある箱根だと考えたからである。ちなみに、期待したことの１位食、２位ショッピングは東京での滞在で十分に満たすことができ、昨年作成した Web ガイドブックにも関連する情報を掲載している。

これまでの研究を通して、今年度の調査ではインバウンド観光における二つのズレに着目をした。一つ目は、ガイドブックにおけるズレである。既存のガイドブックでは、制作者側が勧める食べ物や観光スポットを紹介することに重きをおいているが、訪日外国人観光客はそうした情報以上に、観光スポットへのアクセス方法や両替所の場所などの情報を欲している。話を伺った VISIT JAPAN 大使の高橋正美さんは、「食べ物や施設の紹介だけでは本当の “ ニーズ ” に応えることができない。既存のガイドブックには訪日外国人観光客が本当に欲している情報が欠けている」と指摘している。箱根に関しても全く同様のことが言え、こうした “ ニーズ ” に応えられる情報を多く掲載するように心がけた。

二つ目のズレは、訪日外国人観光客が期待するものと実際の旅行での行動にズレが生じていることである。JNTO による『訪日外客訪問地調査 2010』によると「観光客が訪日前に日本に期待したこと」に、温泉は第５位にあげられている。特に、訪日外国人の約７割占める韓国、台湾、中国、香港などの国・地域を見ると温泉は全て３位以内に入っている。そして、地元箱根側でも温泉に来てくれることを望んでいる。しかし、実際に箱根の温泉に入る外国人は多くない。入浴方法がわ

Hosei University Repository

からないこと、温度が熱すぎることなどを理由に敬遠されるようである。Web ガイドブックでは温泉を利用しやすい情報を盛り込むようにした。このように本 Web ガイドブックは「地元側と訪日客側の架け橋となる」ことを目指している。

ガイドブックの構成は、去年同様、情報を「食」「交通」「文化」というカテゴリーに分け、見やすいよう整理して作成した。「食」のページでは、箱根ならではの食べ物をただ紹介するだけではなく、どのような言い伝えがあるかなど、食にまつわるストーリーを掲載している。箱根観光案内所を訪れる人からの一番多い質問内容は交通機関についてであるというデータがある。そこで「交通」のページでは、便利な「箱根フリーパス」の紹介、またどのようなルートで回るのがお勧めなのか、そして箱根での交通機関の上手な使い方を紹介している。「文化」のページでは、温泉の入り方などを紹介した。

私たちの研究成果は昨年製作した Web サイトに更なる情報を加える形で情報発信をしていく。箱根観光案内所や箱根の観光に関わる方、更に実際に箱根を訪れていた外国人の協力を得ることができたため、まだ箱根を訪れたことのない外国人にはもちろん、何度も訪日したことのある方にも役立つ魅力的な情報が発信できると考えている。また今年は、ページの多言語化を試みた。英語のページに加え、中国語、韓国語、フランス語、スペイン語の５カ国語のページを作成し、それぞれをパソコンだけでなく、スマートフォンからでも閲覧できるようにした。利便性が格段と増し、情報発信がより広く多く行われることを期待している。

このように、これまでのガイドブックにはない本当に訪日外国人観光客が求める情報を掲載し、多言語化やスマートフォン仕様にすることによって、より実用的な Web サイトを作成した。この Web サイトを世界中に発信し、日本のインバウント観光促進につなげていきたい。

**参考文献**

観光庁（2011）「観光立国の推進」国土交通省

神澤隆、堀和秀（2014）『翔び立て！ニッポンの航空・観光』右文書院

国土交通省観光庁参事官（2013）「訪日外国人の消費動向」『平成 24 年 年次報告書』pp.20 の図 4-4

http://www.mlit.go.jp/common/000992929.pdf

日本政府観光局（2011）「『JNTO 訪日外客訪問地調査 2010』結果概要」国際観光サービスセンター

http://www.jnto.go.jp/jpn/downloads/110126_houmonchi2010_attach.pdf

Hosei University Repository

新井康平、古賀健四朗、横畑元希、芳賀樹生、田村琢、杉山美波（甲ゼミ）

●発表タイトル

# 生活圏は国境を越えて ―国際学生寮の空間デザイン―

## １．はじめに―研究目的

法政大学は現在、持続可能で平和な地球社会の構築に貢献する大学を目指すべく、「法政大学グローバルポリシー」を掲げており、今後推進するプロジェクトの一つに「国際学生寮等の整備」がある。その一方で、国際文化学部には全員参加の必修留学プログラム「Study Abroad プログラム（以下 SA）」があり、毎年 200 名を超す学生が 10 カ国 16 大学で、寮生活やホームステイ生活をおくった実体験を持ち、充実した留学体験も不満の声もある。留学での重要な位置を占めるはずである寮やホームステイといった生活圏は、海外からの留学生を迎える学生寮を構想する際にも参考になる点も多いと思われるが、その実態は十分に明らかであるとは言えない。

本研究は第一歩として、国際文化学部生に対して、留学先の寮生活やホームステイに焦点を置いた SA 体験の調査を行い、その分析結果を基に人と人の交流の場に重点をおいた国際学生寮を検討し、その一部を建築模型として具体的に提案する。

## ２．従来の研究

国際学生寮は近年、多くの大学で整備・拡張が進められているが、明確なコンセプトをもつ国際学生寮の先行例として早稲田大学の国際学生寮「WISH」、国際教養大学「こまち寮」、上智大学の「国際交流会館」が挙げられる。また、小規模なコミュニティを基盤とする建築空間の先行研究として、たとえば山本理顕らによる「地域社会圏モデル」がある。

## ３．基礎研究・質的調査

本研究を始めるにあたり、実際に留学をしてホームステイや寮に住んだことのある国際文化学部生及び、留学経験のある人（計 10 ヶ国 25 人）に対して、留学中の寮やホームステイでの生活での実体験、困った事象、充実した体験等を、深く、リアルに、詳しく抽出するために、半構造化インタビュー法を用いた質的インタビューを個別に行い、計 15 時間分の調査データを得た。それらのデータをカードに書き起こし、KJ 法に基づいて留学生活における問題事象や魅力的事象を組織化し整理・分析した結果、

・プライベートな空間は必要だが、他人とも交流したい
・異なる文化圏の人との交流で受ける充実感・摩擦と、同郷人どうしの交流の安心感への欲求
・生活規則を緩和する要望、厳格化する要望

Hosei University Repository

などの相矛盾するユーザ要求があることが分かってきた。またこのような各国、各大学にまたがる留学先生活の問題事象や魅力的事象をまとめた「寮生活体験グローバルマップ」を作成した。

**４．国際学生寮の設計**

分析した結果を基に、新しい国際学生寮の設計指針を検討した。その際に特に困難であったことは、上述した相矛盾するユーザ要求事項を空間デザインとして解決することが国際学生寮の空間設計において要求されるという点である。どのように国際学生寮に発生する問題事象が解決され、どのように魅力的事象がそこから生じるのか、その解決策として、コミュニティづくりを指向する建築設計の先行研究も参考にしながら具体的な空間デザインの一部を建築模型として提示した。

**５．　結論**

留学経験者一人ひとりに対して行った質的インタビューから抽出された、一見相反する矛盾したユーザ要求事項を基に空間デザインを検討し、その一部を具体的な建築模型を制作した。この提案の妥当性を、寮生の視点、実現可能性の視点から評価を行うことが今後の課題である。

---

森田あかね、石田恵子、居合晴菜、加藤法子、田原雅基、伴弥奈美、樋口達也、宮下夏実、安藤紗英、遠藤里菜、久保田直悠、齊藤結衣、笹野真衣、柴翔太郎、高島洸太、武田有史、濱地大志（佐々木直美・渡辺ゼミ）

●発表タイトル

## ありのままの白川郷―世界遺産とサステイナブル・ツーリズム

世界遺産条約とは、普遍的な価値を持つ文化遺産ならびに自然遺産の保護のために設けられた制度であり、観光振興を目的にしたものではない。しかし現在の日本では、世界遺産とは有名観光地である、というイメージが定着している。実際、国内で新たな世界遺産が登録されると、日本中で話題になり、多くの人が観光客として世界遺産に足を運ぶ。旅行を計画する際にも、世界遺産を目的地として旅行の予定を組む人が多い。

しかし、世界遺産として登録された観光地の中には、「目的地」ではなく「他の目的地へ行く途中に寄っていく場所」として、多くの観光客や旅行会社に位置づけられている場所がある。それが白川郷である。世界遺産登録の前後には話題となり、合掌造りを見に訪れる観光客が急増したが、現在では立山黒部アルペンルートや近くの温泉郷、そして外国人にも人気の高い高山市などを訪れる際に、「ついでに」訪れる場所となっている。この様な特徴を持つ観光地は「通過型観光地」

Hosei University Repository

と呼ばれている。バスツアーで白川郷を訪れる観光客の場合は特に顕著だが、観光客たちは数時間滞在するだけでここから去って行く。こうした通過型観光地は宿泊者数が少ない為、観光収入は少ないのに対して、トイレ休憩やごみ捨てなどによる様々な問題がもたらされ、こうした収支の面を考えると、世界遺産に登録されているにも関わらず、観光による恩恵をそれほどは受けていないようにも思われる。

白川郷は、実際に今も人が住んでいる世界遺産である。世界遺産登録時を最盛期としたピークが去った今、白川郷の住民の人たちはではどのように観光をとらえているのだろうか？白川郷に住む人々は観光客に対し白川郷をどう見せていきたいと考えているのか？そして、観光客は白川郷訪問をどのように位置づけているのだろうか？今年９月のゼミ合宿ではこうした問題意識について調査するため、白川郷最大集落である荻町集落を訪れ、観光客・住民・資料館の方々へのインタビューを行った。具体的には、周辺住民や観光事業者の皆さんは住む場所／観光地としての白川郷をどう捉えているのだろうか、観光客は本当に白川郷を通過点として捉えているのだろうか、通過型観光のメリット・デメリットは一体どのようなものがあるのだろうか、といった点についてお話を聞かせて頂いた。

後期のゼミでは、こうしたインタビューの結果と、前期に読んだ文献から得た知識をもとに議論を行ってきた。特に、インタビューで複数の住民から聞いた、周りの自然を含めた「ありのままの」白川郷を見ていってほしい、ということばを出発点として、白川郷の人たちは、過度な商業化を避けつつ観光地本来の姿を求めていこうとする、サステイナブル・ツーリズム（持続可能な観光）を実践しているのではないか、との考えに至った。今回の学会では、インタビューから得られた回答を中心に、白川郷におけるサステイナブル・ツーリズムのあり方やゼミのメンバーの考察を、ポスター発表の形にまとめていく。

また、ポスターとは別にパンフレットを作成し、白川郷でのフィールドワークにおける調査結果についてより詳しく紹介し、世界遺産の制度についての解説、さらには白川郷が世界遺産に登録された際の経緯、特にどのような点が評価されたのかなど、関連する情報をまとめる予定で準備を進めている。ポスターの記載事項と併せて、このパンフレットを読んで頂くことで、私たちの発表内容について更に理解を深めてもらえるのではないか、と期待している。

日本においては観光のイメージが強い世界遺産制度だが、その遺産の観光地としての見所を知るだけでなく、世界遺産に登録された経緯や評価された点、現在遺産が抱える問題点など、旅行用のガイドブックには掲載されていない実体を知る事で、その遺産についてのより深い理解が可能になり、それと同時に、世界遺産を訪ねる私たち一人ひとりにとって、より深い学びや感動をもたらしてくれるのではないか。それが、私たち世界遺産ゼミのメンバーが、学会で皆さんに伝え

Hosei University Repository

たいと考えているメッセージである。

最後に、日本は今、東京オリンピックを6年後に控え、より一層の観光立国を目指している。今回私たちが調べた、白川郷におけるサステイナブル・ツーリズムの事例を、今後の日本の観光の在り方について考えるきっかけにしてもらえれば、と考えています。

---

野田彩乃、秋山明日香、大澤菜摘、熊谷駿希、新海真菜、曽我旭、田口剛、藤田佐和子、矢口恵利花、八幡響子、吉岡沙織、大竹望、井上琴代、齊藤翔大、島さえの、新海彩夏、陳子詒、時崎剛生、李章圭、山本敬喜（衣笠ゼミ）

●発表タイトル

## 日本における北欧像　―あなたのイメージはどこから?―

昨今、日本では北欧諸国の気配を身近に感じることが多くなってきた。巷では「北欧ブーム」が起きているとも言われている。そもそも距離も遠く離れ、また政治的関係も薄い北欧に対して日本人の持つイメージは、いつ、何によって、どのように形成されてきたのだろうか。私たち衣笠ゼミでは様々なメディアに記述され、描かれてきた「北欧」を調査し、日本における北欧イメージの形成過程を分析した。取りあげるのは、戦前から現代までの新聞記事、雑誌記事や、昨今の映画やテレビ番組の映像、それに加えてゼミ生が実際に街で北欧ブームの調査を行った。

まず新聞記事を中心に、時間軸に沿って北欧イメージの流れを追ってみる。新聞に北欧の名が多く上がり始めたのは1930年代の事である。1959年には「北欧調」のデザインが増えてきていると書かれ、1970年代には北欧家具による日本で最初の北欧ブームが起きた。この頃の記事の北欧は豊かな自然や心豊かな人々といった好意的な描き方をされている。二度目の北欧ブームは1987年、北欧官僚理事会の北欧文化キャンペーン「スカンジナビア・ツデー」によって起こった。この頃の記事は、北欧を福祉国家、ハイセンスな文化、美しい自然などと理想郷視する傾向にあった。このイメージは日本人の中に定着し、2000年代には再び大きなブームを引き起こした。これこそが我々の感じている「北欧ブーム」である。

日本人が北欧と聞いて思い浮かべるものの一つに、デザイン（インテリア）が挙げられる。旅行雑誌『るるぶ北欧』は1998年から刊行されているが、その頃から最近のものまで必ず北欧デザインが特集されている。2002年には北欧をテーマとした日本初の雑誌『北欧スタイル』が創刊され、北欧のインテリアや北欧モダンデザイン、北欧家具が紹介された。2006年に公開された映画『かもめ食堂』では、そのストーリーもさることながら劇中に登場する北欧家具も注目を集めたようだ。北欧インテリアは明るい白壁に木材、温かみのある照明を基本とし、カラフルな

Hosei University Repository

小物をアクセントにする。これらは日本でも多用する木材を用いながらも、新しく、おしゃれで、日本人にとって安心できる身近なデザインとして受け入れられたのであろう。これはスウェーデン発のインテリアショップであるIKEAが流行する一因ともなった。

「北欧」が多く新聞に登場するようになった1930年代から変わらない北欧のイメージは、豊かな自然である。テレビで北欧が取り上げられる際には必ずと言っていいほど豊かな森や湖の映像が用いられる。映画『かもめ食堂』でもシーンの合間にボートや湖、噴水が登場している。「北欧の大自然」という定型化したイメージが、こうした描写につながるのだろう。

こうして歴史を辿ってみると、我々日本人が持つ北欧イメージはメディアを通して形成されることが多く、そのほとんどがポジティブなものである。それは大自然、先進的なデザイン、福祉といったものであり、そこから想像されるのは心豊かでのんびりしたお国柄だ。しかしこれらは極めて断片的な情報を増幅させて作られたものにすぎない。日本との政治的利害関係の少なさ、ライフスタイルの相違もそれを後押ししているのかも知れない。ユートピアと呼べるほどにまで理想化された北欧のイメージは、その実態を見ることなく我々が作りあげ、享受しているものであるともいえる。

---

山本祐人、長尾梨帆、内藤秀宜、平安山良志、保坂拓海、石井千佳、清水美沙、古田麻菜美、小口夕香、柏倉妃香里、中村桃子、寺島裕香、田中直美、藤本理沙、金賢廷、崔眞僖（佐々木一惠ゼミ）

●発表タイトル

## 日本における「うたごえ運動」のコンテンツと日本社会における位置づけの変遷

本発表では、戦後初期に始まった「うたごえ運動」という社会運動の文化的コンテンツと社会における位置づけの変遷を取り上げる。

「うたごえ運動」は、1948年に日本共産青年同盟の音楽部門として中央合唱団が創立されたことに始まる、合唱を主体としたサークル活動を基盤とする大衆的な音楽活動である。ロシア民謡を歌うことから始まったこの運動は、時代の流れの中で社会の動きに深く結びついていった。例えば、1950年代には原爆反対の歌が歌われ、「原爆許すまじ -1954年日本のうたごえ祭典」が共立講堂や東京都体育館で開催され、約1万5000人が参加した。60年代には安保闘争の歌、70年代には沖縄返還を要求する歌やベトナム戦争の反戦歌が歌われるなど、反米・反戦という政治的メッセージを強く打ち出すようになった。しかし、1970年代以降、安

Hosei University Repository

保闘争などの大衆社会運動の衰退とともに、「うたごえ運動」の政治性は影を潜めていった。そこから、「うたごえ運動」がどのように人々の間で展開され、変化を遂げていったのかという疑問が生まれた。

したがって、私たちは各年代における①「うたごえ運動」推進母体の運動の取り組みの変化②歌われている歌と歌詞の変化③「うたごえ運動」に対する人々の認識の変化を分析し、「うたごえ運動」のコンテンツと社会における位置づけの変遷を明らかにしたい。

研究方法は以下の３つである。１つ目は、『うたごえ新聞』の記事を年代ごとに比較することで、「うたごえ運動」推進母体の運動への取り組みの変化を分析する。２つ目は、歌のカテゴリーや歌詞の内容を、年代ごとに比較することでコンテンツの変化を探る。また、歌の歌詞をロシア語、フランス語、韓国語、英語、などからの翻訳対比を行う。３つ目は、「うたごえ運動」のサークルと、「うたごえ運動」の全盛期であった1955年前後に流行した歌声喫茶の関係者にインタビューを実施し、人々の「うたごえ運動」に対するイメージの変化を研究する。

発表方法としては、上記３点の研究方法を通して明らかになったことを、６枚のポスターにわかりやすくまとめ掲示する。また、「うたごえ運動」を知らない方々にうたごえ運動をイメージしていただくため、実際に「うたごえ運動」の映像を流し、ポスターに当時の様子を写した写真を掲載する。見学者の方々に対してのポスター内容の説明や、質問の対応のために発表場所には常に学生４名以上を配備する。

---

山田真之、吉松京香（重定ゼミ）

●発表タイトル

## 色で画像を検索するアプリケーション

**・作ろうとした動機**

日常生活において私たちはスマホでよく画像を見ます。自分の撮影した写真を家族や友人に見せたい時、あるいは自分が写真を眺めたくなった時、写真を誰かと共有したい時など様々です。しかし時に、積もり積もった画像の中から今自分が求めている画像を探し出すのはなかなか難しいものです。現在、デジタルな世界にあるデータの集合において、私たちは検索という手段で目的のデータを探し出しています。知りたい単語、音楽、人、道、あるいは他人のプライバシーまで検索できてしまう時代です。そんな時代において私たちはスマホに入っている画像一枚探すのにとても苦労しています。そこで私たちは画像に含まれている色データを利用して目的の画像を検索する手段の一つとして、ここに提案したいと思い

Hosei University Repository

ました。今のところ Visual Basic を利用した PC 上のアプリケーションとなっていますが将来的にはスマホでより効率的に画像を絞り出せるアプリケーションを作れたらなと思います。

**・作品紹介**

画像を色で識別し、検索してピックアップできるアプリです。たくさんの画像の中から見たい画像を「色」でもって抽出し、検索結果に反映させることで効率よく画像を見つけ出します。また画像に記録されている撮影時間のデータを利用して「いつ撮影したか」でもって画像を抽出できます。この二つを組み合わせることでより精度の高い検索が行えます。

**・使用方法**

上記の内容に沿ったものですが、画像を保存しているフォルダを選択するとピクチャーライブラリのようにフォルダ内の画像のサムネイルが一覧できる形で表示されます。カラーパレットのように複数の色のボタンがあり、それを押すことでその色の画像を上位にピックアップしていきます。正確には「画像の中にその色がどれだけの割合で含まれているか」でもって割合が多い順に並び替えています。撮影時間においても探したい画像の大まかな時間でもって同様に検索できます。

**・仕組み**

①選択されたフォルダ内に含まれる画像ファイルすべての色情報を引き出します。一枚の画像が大まかに何色であるかを調べるために 1 ドット単位で（画像サイズによっては間引くことも考えている）色情報を引き出します。色情報は RGB で表現され、三次元座標として考えることができます。色の明るさはパソコンのウィンドウ上では 0 ～ 255 の数字で表すことができるので、光の三原色である赤（R）、緑（G）、青（B）を軸として一辺が 255 の立方体 RGB カラーモデルと色情報の三次元座標の点の位置関係でその色が「色空間内のどこに存在するか」が分かります。

②立方体 RGB カラーモデルにおいて立方体の頂点はそれぞれ赤・黄・緑・シアン・青・マゼンタ・黒・白になります。頂点と色情報の点の座標の数値を使って、その色が頂点の色からどれだけの距離にあるかを算出します。

ここまでの流れを例でもって説明すると、ある 1 ドットに含まれる色情報が RGB 表記で（R:200　G:50　B:50）だったとするとその色情報は立方体 RGB カラーモデル上で（200, 50, 50）の座標を持つ点 R と考えることができます。そしてその点 R は立方体の各頂点の座標と比較でき、その間の距離を算出することができます。

③そしてその色情報と各頂点との距離が任意で設定した数値と比較します。この数値は「頂点の色がその色をどこまでその色として識別できるかを判断し、

Hosei University Repository

その範囲を各頂点を中心とした球（もしくは楕円体）で考えたときの半径に当たる数値です。つまり、頂点との距離とその球の半径を比較し、「頂点との距離がその半径の数値よりも小さい」時は、頂点の色の範囲内に存在することを意味します。たとえば(200, 50, 50)の座標を持つ点Rと赤の頂点(255, 0, 0)の間の距離が約 90 と算出され、任意で設定した数値 = 頂点の色の範囲が 100 だとすれば、赤の頂点を中心に半径 100 の範囲内に存在するため点 R の色情報は「赤」だと決定されます。

④①～③までの処理をすべての画像ファイルに施します。ユーザーはその頂点の色の中から自分の求めている画像の色に近い物を選択することで、その色の割合の大きい順に画像を並び替えることができます。

※説明するために立方体の頂点との比較のみをしましたが、頂点の色以外にもユーザーが選択できる色を用意します（茶色や紫色など)。その場合、色の範囲は頂点ではなく特定の座標を中心とした球もしくは楕円体の半径となります。

---

小野奈々、北原一樹、木村朱里、田中学、寺山敬依子、長谷川里菜、福井佑記（岡村ゼミ）

●発表タイトル

## 東京オリンピック ~ 街が変わる ~

2014 年は、1964 年にアジアで初めて開催されたオリンピックである、東京オリンピックの 50 周年だ。昨年には、2020 年に再び東京でオリンピックが開催されることが決定した。今回は、1964 年と 2020 年のオリンピックを比較し、オリンピックとともに変わった東京の街を調べ、発表を行う。

特に、オリンピックというと問題になる、交通の便について、2020 年のために建設されることが問題にもなっている競技場、選手村を中心とする。

---

鈴木友理香、石川憂季、牛津七海、江尻治世、神長倉理恵、林田紗央莉、中森望（今泉ゼミ）

●発表タイトル

## コーンなところにとうもろこし！？～食糧依存大国日本～

本報告では私たちにとっての“食糧危機”を“トウモロコシ人間としてのわたし”を解剖することを通じて考えてみたい。

Hosei University Repository

『KINGCORN』（アーロン・ウルフ監督・製作、アメリカ、2007年）というドキュメンタリーをご存じだろうか。ウルフ監督はアメリカ人の体のほとんどが“トウモロコシでできている”ことに驚愕し、その理由を克明に追跡してみせた。ところが、日本に暮らす私たちも、一日の食事の中で、知らず知らずのうちに大量のトウモロコシを食べ続ける“トウモロコシ人間”だった。

日本人が最も食べる穀物といえば主食の米というイメージがあるが、日本の米の年間消費量が720万トン前後となっている一方で、トウモロコシは年間1億64万トン消費している。またその消費しているトウモロコシのうち、日本で生産されているのは年間たった20万トン前後、北海道で主に生産されており、ほとんどは海外から輸入している。そして輸入しているトウモロコシのほとんどがアメリカから来ているのである。今や日本の食生活は海外に依存することで成り立っていると言っても過言ではないが、こうした数字を見ただけでもアメリカからやってくるトウモロコシが、目に見えない形で私たちの命を支えていることがわかる。

そこで本報告ではまず①私たちが普段食べているものの中にある、目に見えないトウモロコシの存在を明らかにし、次に②日本ではいつ、どうしてトウモロコシの消費が高まったのかについて、日本人のライフスタイル、食生活の変化との関係から探る。そして③トウモロコシに大きく依存するようになった生活を、第二次世界大戦後のアメリカの食糧戦略とそれに対する日本側の対応を中心に解明する。以上から、日本に暮らす私たちの”トウモロコシ人間”化のプロセスを解明し、現状を確認する。日々の暮らしの中で、自分の生活を見直すきっかけは何度もある。食糧危機といえば、まずアフリカでの旱魃による食糧不足をイメージするのではないだろうか。遠い問題のように見える食糧危機は、実は日本に暮らす私たちとは決して無関係ではないのだ。例えば普段食べているものがどこから来ているのか、考えたことはあるだろうか。一つの食べ物が私たちの手元に来るまでにたくさんの国や人が関わっている。日本だけで起こっている問題と思われることでも、実は世界とつながっているのである。しかし国内外で起こるさまざまな問題について学ぶたびに、難しい議論に思えてしまい、頭を悩ませているのではないか。しかもいざ自分のこととなると、自分にとっての問題とは何か、がなかなか見えにくく、実感が沸きづらいのも事実だ。トウモロコシを通じて、私たちの命を支える食糧についてもう一度見直すことが出来るのではないだろうか。最終的には、私たちはトウモロコシの輸入が途絶えてしまったら生き延びられないのか、トウモロコシを食べ続けることが私たちの命を支える不可避の道なのか、自由貿易化が進んでいくと日本はトウモロコシの安全にどう対応していくのか―つまりトウモロコシを手掛かりに、遠いようで実はとても近い“食糧危機”について考えたい。

Hosei University Repository

田村隼士（大嶋ゼミ）

●発表タイトル

# メディアアート制作のためのシステム構築論的検討（1）ー Pure Data 環境での各種 HID の活用と機能の汎用化ついてー

## １．研究の概要

本研究はプログラミング言語 Pure Data 上で各種ヒューマンインタフェースデバイス（Human Interface Device, 以下 HID と略す）、特にゲームパッドやジョイスティックなどを使用する際に、接続した HID を Pure Data が提供するスイッチ、ラジオボタン、スライダーボリュームなどの要素にマッピングし、制御用途に即した数値入力や動作指令を得るように加工する、デバイス機能の汎用化に関するものである。このような検討を通してプロトタイピングの効率化や作品制作時の利便性の向上を図る。同時にこれらの機器要素を含むデモシステムの構築を試みる。

## ２．研究の背景と問題解決の検討

我々の研究室ではメディアアート作品とその制作環境について関心をもって取り組んでいる。なかでもオープンソースのソグラフィカルなプログラミング環境 Pure Data とその拡張版 Pd-Extended（以下総称的に Pd と略す）を主要な開発ツールとしてインスタレーション作品やライブデモシステムの構築を目指している。Pd はオーディオ、MIDI、ビデオ、グラフィックスなどを総合的に扱う実験的なメディアシステムの構築とそのプロトタイピングに適している。また既存のゲーム機器のコントローラからの出力データを処理する機能が内蔵されており、多様な入力インターフェースの利用が可能である。またシステム間の接続性にも優れており、LAN 環境でのマルチプラットフォームな機器の相互運用なども可能である。

Pd においては、HID からのデータを制作者が自らプログラム中で処理することで、自由な作品構想を直接に実現する。例えば Pd 上では接続したゲームパッドのジョイスティックを上下、左右に傾斜させることで刻々と変化する出力数値をリアルタイムで取得できる。ここでジョイスティックを左または上に傾けると出力値は減少し、下または右に傾けると値は増加する。またゲームパッドのボタンやスイッチについては押下した瞬間に’1’が、指を離した瞬間に’0’が取得できる。Pd が内蔵する要素としてはスイッチ、ラジオボタン、スライダーボリュームなどの制御機能が用意されているので、HID から取得した値をこれらのいずれかに割り当てて使用する。

しかし、HID の値が制御データとしてプログラム中でそのまま使われる局面は

Hosei University Repository

むしろ限定的であって、一般には実行状態のさまざまな変化を引き起こす指令となりうる。例えばジョイスティックの中立状態は3Dグラフィックスにおいて「現座標に静止」の指示にも「原点（ゼロ座標）へのリセット」の指示にもなりうるし、スロットル用途であるならば「現在値（速度）を保持」「等加速度で減速」などの指示内容がありうる。ゲームパッドのボタンをスイッチとして使用する際にも単純なモーメンタリ、オルタネートの違いのみならず、例えば押下継続で「キーリピート（いわゆる連射機能）」が求められる場合もあろう。そこでいくつかのシナリオを想定して、用途に沿ったHIDの活用を検討することは有用と考えた。

### ３．研究内容とまとめ

実験中のデモシステムに合わせて、特定のHIDで扱う数値の範囲やボタンの効果の選択方法を検討した。同時にゲームパッド、ジョイスティック、ヌンチャクなど身近にある代表的なゲーム機などのコントローラをHIDとして利用するときの機能的特徴を検討した。さらにいくつかのケーススタディを通して、これらのHIDをPdプログラムの外部制御機器とし、Pdの機能要素であるトグルスイッチ、スライダーとプログラム要素などを組み合わせて、想定される制御機能を実現する構成法を検討し、デモシステムを構築した。今回の検討結果の活用によりPdでの各種HIDの操作とプログラムの実装がより見通し良く実現すると期待される。

---

田中勇太（大嶋ゼミ）

●発表タイトル

## メディアアート制作のためのシステム構築論的検討（２）
## ー Windows 環境での Leap Motion の活用についてー

### １．研究の概要

Windows上のPure Dataプログラミング環境において、補助的にvvvvを稼働させることで、システムに接続したトラッキングデバイスLeap Motionからの３次元データをリアルタイムで取得しPure Dataでのプログラム実装に利用した。本研究ではその結果を報告する。

### ２．研究の背景と問題解決の検討

我々の研究室ではメディアアート作品とその制作環境について関心をもって取り組んでいる。なかでもオープンソースのソフトウェアでありながら高い表現能力を備えたグラフィカルなプログラミング環境Pure Dataとその拡張版であるPd-Extended（以下総称的にPdと略す）を主要な開発ツールとしてインスタレーション作品やライブデモシステムの構築を目指している。Pdはオーディオ、MIDI、ビデオ、グラフィックスなどを総合的に扱う実験的なメディアシステムの構築と

Hosei University Repository

そのプロトタイピングに適している。Pd には既存のゲーム機器のコントローラなどHID（Human Interface Device）としてその出力データを処理する機能が内蔵されている。またシステム間の接続性にも優れており、ネットワーク環境でのマルチプラットフォームな機器の相互運用なども可能である。

これまで我々はゲーム機のコントローラなどを含む多様な HID 機器を Pd プログラムの制御デバイスとして使用してきたが、今回新たに Leap Motion への取り組みに着手した。2012 年に発表された Leap Motion は赤外線センサーによりユーザの両手の座標位置データを得る先進的なデバイスであるが、Mac 環境ではいち早く美山千香士氏が公開した Leap Motion for Mac が Pd から利用可能となり注目を集めている。これに対し現時点では Windows 環境で動作するプログラムは存在しないため Windows ユーザの間での Leap Motion の活用は進んでいない。マルチプラットフォーム環境でのメディアシステム構築においても効果的に Leap Motion を利用するには Mac のみならず、できれば Windows 機にも Leap Motion を接続可能としておきたい。

また Leap Motion for Mac はプログラム実行時に周期的に命令を出すことでその瞬間のデータを取得しているが、しかし両手のデータになると、取得するデータも増えデータ間の数値が抜け落ちてしまう。デバイスとしての Leap Motion は手の座標位置やベクトル等のデータの時間変化を連続的に扱えるため、この点をより柔軟に実現することが望ましい。これら 2 点を契機として Windows 環境での検討を行った。

## ３．研究内容とまとめ

我々は前述の課題についてビジュアルプログラミング言語 vvvv を併用することで解決を試みた。vvvv はビジュアルに特化された Windows 環境で動作するプログラミング言語である。現行の vvvv には Leap Motion を認識する機能が搭載されており、両掌の位置と向き、すべての指の位置と向きの情報が実用に十分な反応速度で取得できる。また Pd と vvvv はいずれも OSC によるデータの送受信が可能であり、ネットワーク環境で連携する。スタンドアロン構成では、ループバック接続（localhost）を介して両実行環境が連携するので vvvv 上の Leap Motion のデータを Pd に送信することで、Windows 環境の Pd 上で Leap Motion が使用可能であることが分かった。

ただし、この方法では、一台の PC 上で複数言語の実行環境を稼働させるため処理上の問題が出る可能性がある。その場合には、vvvv 専用の PC を別に用意し、LAN を経由して Pd 環境と連携させることができる。今回の実装では Leap Motion for Mac を参考に、両手の座標位置、指十本分の座標位置、ベクトルのそれぞれを数値として取得する vvvv のプログラムを作成した。次にこれに連携した Pd のプログラムを作成することで、Windows 環境の Pd ユーザが vvvv を導入し

Hosei University Repository

必要なプログラムをダウンロードした時点ですぐにLeap Motionが使用できるようにした。これによりWindows上のPd環境においてLeap Motionの活用に着手する一つの方策を提案できた。今後はLeap Motionの接続端末の小型化などシステム構築に有用な改良を目指したい。

---

大嶋良明（大嶋ゼミ）（教員）

●発表タイトル

# メディアアート制作のためのシステム構築論的検討（3）ーLINUXプラットフォームでの検討ー

## 1．研究の概要

小規模なLINUX上のPure Dataプログラミング環境においてHID（Human Interface Device）の活用法を検討した。本研究ではその結果を報告する。

## 2．研究の背景と現状の検討

我々の研究室ではメディアアート作品とその制作環境について関心をもって取り組んでいる。なかでもオープンソースのソフトウェアでありながら高い表現能力を備えたグラフィカルなプログラミング環境Pure Dataとその拡張版であるPd-Extended（以下総称的にPdと略す）を主要な開発ツールとしてインスタレーション作品やライブデモシステムの構築を目指している。Pdはオーディオ、MIDI、ビデオ、グラフィックスなどを総合的に扱う実験的なメディアシステムの構築とそのプロトタイピングに適している。Pdには既存のゲーム機器のコントローラなどHID（Human Interface Device）としてその出力データを処理する機能が内蔵されている。またシステム間の接続性にも優れており、ネットワーク環境でのマルチプラットフォームな機器の相互運用なども可能である。

これまで我々はゲーム機のコントローラなどを含む多様なHID機器をPdプログラムの制御デバイスとして使用してきたが、プラットフォームとしてはMacとWindowsを中心に活動してきた。今後の総合的なライブデモなどの構想においてはネットワーク環境下においてマルチプラットフォームでのシステムの連携と相互運用が想定されるため、このたびLINUX環境でも同様の検討を始めることとし、PC LinuxのひとつであるUbuntu環境でのPdや超小型コンピュータであるRaspberry Piへの取り組みにも着手した。

## 3．研究内容とまとめ

まずデスクトップPC上でのUbuntu LINUXを実験機として各種HIDのLINUX環境での稼働を検証した。小型ハードウェアでの検証としてはRaspberry Piをプラットフォームとしてシステム的な検討を行った。Raspberry Pi環境での

Hosei University Repository

Pd に関しては、Debian ベースのパッケージ（通称 Raspbian）を導入し Pd を追加導入する方法が一般的であるが、最近では Pd を含む LINUX 統合パッケージとしての Satellite CCRMA が公開され、これを直接インストールする方法も可能となりつつある。そこでこれら二通りの環境構築を試み Pd プラットフォームとしての Raspberry Pi の使い勝手や性能面での特徴を調査検討した。最後に各種 HID を接続し、取得される制御データを観測し、またネットワーク環境での稼働においてマルチプラットフォームのインスタレーション作品やライブデモシステム構築を想定したデバイスのフロントエンドとしての Raspberry Pi の利用可能性を検証した。

## 映像部門

舩橋将人（重定ゼミ）

●発表タイトル

### Android スマートフォンにおけるホームウィジェットパフォーマンスとその応用性

本発表の目的は、Android スマートフォンにおけるアニメーションウィジェットの発表と、その応用性・汎用性の考察および課題の明示である。

私は、Visual Basic や Java といったプログラム言語を用いたアプリケーションの制作を行っている。本年度は特に、任意にデザインされたキャラクターが、フォーム上を歩き回るアニメーションを Android スマートフォンのホームウィジェットで再現し、持ち運び可能にすることを目標に掲げてきた。そこで、Windows 用デスクトップアクセサリの「しめじ」を参照し、類似したアニメーションを搭載させることに成功した。

制作過程では、サンプルプロジェクトの機能の組み合わせのほか、バッテリーと CPU に対する過度な負担が発生する問題が浮かび上がった。この問題へ、本アプリケーションにスリープモードを実装するという対策を講じた。その結果バッテリー・CPU 共に負担を半分以上削減することに成功した。結果として、本アプリケーションは、CPU と電池の負担を同時に抑えつつキャラクターが動く様子を見ることができる、ホーム画面に常駐するアニメーション形式のウィジェットとなった。

また、Android スマートフォンでのアプリケーションの再現を成功させた結果として、本アプリケーションを普及・応用できる可能性が生まれた。Google Play に出品すれば、本アプリケーションは、Android 搭載スマートフォンからインス

Hosei University Repository

トール可能である。さらに、ビジネスモデルの考察を進めることで、クリエイターが自由にデザインしたキャラクターをスマートフォンに表示させるというサービスを事業化できる可能性を提示する。

今後の課題としては、どのようなビジネスモデルを以て本アプリケーションの普及を図るのか、アニメーションで表示されるキャラクターの著作権の問題などが挙げられる。

以上を明確に示すために、本発表は以下のような構成をとる。はじめに、本アプリケーションの制作過程の発表。次に、本アプリケーションを実装したAndroid 機器を用いたパフォーマンス。最後に、本アプリケーションの応用性・汎用性の考察を行う。

---

山城優佳（岡村ゼミ）

●発表タイトル

## Des Photos Pour Rien

◇内容

仏人写真家のファビアンが暗室の作業台の上で、自分の撮った写真を友人に説明する。写真は、東京、パリ、田舎の景色をみつめ、ふたりは都市論を論じるが･･･

写真と説明は次第にずれていく。

◇

ビデオに登場する写真は、わたしと友人のファビアン（映像で写真の説明をしている）が 2012 年から撮りためていたフィルム写真である。今回は、主に都市や建築にまつわるものを選んだ。埋立地、高層マンションや都市開発、踏み切り、廃墟、ベンチ、工場などである。様々な要素が写真を、そして場所を構成している。

都市に関するビデオを作った理由の 1 つに、昔から東京の町並みが好きになれなかったことがある。SA でフランスから帰国した 2012 年から東京を好きになりたいという思いで、東京の町を歩きに歩き、面白い景色を写真に納めた。高層ビルから住宅地、さらには廃墟と、多い日だと 20 キロ以上歩いた。東京に、他の町にない独特な、ポジティブな魅力があるのも確かだったが、「生活する場所」として東京を捉えたとき、自分の中でやはり肯定的に捉えられない部分があることも否めなかった。

"20 世紀の建築は、場所を曇らすために、人々を場所から切り離すために建てられた。僕たちはもう一度、場所をみつめることからはじめなくてはいけない。"

Hosei University Repository

（隈研吾『「都市」が自壊し、「ムラ」がよみがえる』集英社、2011）

と、建築家の隈研吾（1954 －）も指摘しているように、ビデオを通して、私たちの生活する東京について改めて考えてみたいと思い、制作に至った。

また、ビデオの中でたまに台詞と映像にズレがある。これはフランスの映画監督ジャン・ユスターシュ（1938-1981）が『アリックスの写真』（1980）で行っていた手法だ。もともとズレを出すつもりはなかったのだが、編集過程でズレてしまった音源が面白く、そのまま残すことにした。

---

出口由梨奈、星可菜枝、木村優香、小佐野夏実、野澤宏貴、小島優毅、矢吹克俊（山根ゼミ）

●発表タイトル

## おいてけぼり

小さな町に代々伝わる話。

夕方になるとどこからか奇妙な声が聞こえ、その声を聞いてしまったものは、その場に何か一つ物を置いていかなければ呪われてしまうという。

初めは話を信じなかった男女であるが、次第に異変が起き始める。

彼らを待ち受けていたものは…。

---

高田茉友子、福島由衣、高橋優子（大澤・島田ゼミ）

●発表タイトル

## 「密着！大学生バンドマン！！」

何かを伝えるためのツールとして様々な媒体があるが、私達は半年間ゼミで学んできた映像という媒体を選んだ。映像を用いることによって、視覚、聴覚のどちらにも訴えかけることができる。当然のことのように感じるが、この二つをどのように利用するかによって人の心に残るものは大きく変わってくる。

今回は初めてのドキュメンタリー制作に取り組んだ。映像自体の構成はもちろんだが、撮影場所の手配やインタビューする相手とのアポイントメント取り、実際の撮影における光の入りや環境音の問題等に困難を要した。完璧を求めてシナリオ通りに撮りたい気持ちと、撮影中にやってくる思いもよらない良い画や瞬間の狭間で頭を悩ませながら構成を練っていった。ストーリーを元にしたその時々の感情や雰囲気によって背景やアングルを考えるオリジナル映画とは違い、リア

Hosei University Repository

ルな表情を追究するドキュメンタリー作品では必ずしも撮影状況に恵まれるというわけではない。突然訪れる撮影チャンスを見逃さず、且ついかに冷静にカメラを回すことができるか、という点で常に緊張感を持って撮影に当たった。

このドキュメンタリー作品のターゲットとなったのは、発表者である私達の友人の一人でもある稲葉航大くん。身近に数多くいる大学生の中で、学業の傍らアーティストとして活躍している彼に注目してみた。

法政大学キャリアデザイン学部の三年生である彼は、私達と同じように普段は大学にて講義を受け、サークル活動に励み、そしてアルバイトをこなす、普通の大学生。その一方で、放課後のライブハウスでは、普段とは異なるもう一つの顔を持つ男なのだ。

2013 年、西千葉のガザルというライブハウスにて結成された Helsinki Lambda Club というインディーズバンドをご存知だろうか。結成後、数々のオーディションにて頭角をあらわし始め、ついに 2014 年夏、UK PROJECT 主催のオーディションにて応募総数約 1000 組の中から見事最優秀アーティストに選出された、今最も注目されているインディーズバンドである。大舞台である新木場コーストで大物アーティスト達との共演を果たし、更にはワンマンライブまでおこなう程の期待の新生バンドなのだ。彼らは、独創的な歌詞と、ありきたりではなく、どこか新しい雰囲気を持ちつつも懐かしさのある曲調、そしてキャッチーなメロディーによって主に若い世代から人気を博しているが、その最大の魅力の一つが、ベーシストである稲葉君の特徴的な動きである。映像を見ればご理解いただけると思うが、彼の動きはただ単純にユーモアセンスが溢れているだけでなく、リズムとテンポはもちろんのこと、曲の雰囲気やソロなどに完璧に、そして絶妙にマッチしているのだ。

近年、野外ライブやフェスなどを中心として、バンドブームが起き始めている。自身がバンドをやっていたり、関連する仕事をしていたり、という人だけでなく、誰でも気軽に参加できるアウトドアの一つとなり始めているそうだ。その影響を受けてなのか、多くの少年少女、更には私達の親世代の中にも、バンドマンを目指す人は少なくはない。中学生から大人まで、あらゆる世代で人気を得ているバンドがたくさんある上に、仕事や学業を行いつつバンド活動をする人が増えているが、実際花開くのはほんの一握りである。その夢を掴みかけている稲葉君に、大変興味を持ち、同時に尊敬の気持ちをもったため、今回のドキュメンタリー制作に至った。

この作品を通して、私達は稲葉君の活動、活躍を多くの人に広めたい。それが、映像ゼミを選んだ私達の目的であり、夢でもある。メディアに取り上げられるほどではないかもしれないが、身近な大学生の中でこのように夢を追いかけ、努力し、こんなに活躍している人物がいるのだ、ということをこの映像によって一人でも

Hosei University Repository

多くの人に伝えることを願って作成した。

---

油井花穂、松川友姫、矢田真俊（松本ゼミ）

●発表タイトル

## フィリピン・ボホール島震災復興―学生が考える復興支援・ボランティアとは―

私たち松本ゼミは、今年の８月にフィールドワークで行ったフィリピン・ボホール島の震災復興についての映像を制作した。

ボホール島はフィリピンで10番目に大きい島でセブ島の南に位置し、人口約125万人を抱える。昨年10月15日にマグニチュード7.2の地震に襲われ、街の多くの建物は倒壊し、200名近くの死者を出した。松本ゼミでは昨年のフィールドワークでもボホール島に行き灌漑事業に関する調査を行っていたため、その２か月後に起きた震災を他人事とは思えず、またNGOのニュースで震災から８か月経っても復興が進んでいないことを知り、「私たちにも何かできることはないか」と今年再びボホール島へ赴いた。

この映像では、松本ゼミの３年土屋好輔と一橋大学の３年潮崎真唯子の２人を主人公として「何故震災から８か月経っても復興が進まないのか」、「知識もスキルもない学生にできるボランティアとは」という２つの問いを立てた。撮影はiPhoneを使って実際に彼らがフリーハンドで行った。また、日本からボホール島の震災復興を考える立場として、松本ゼミ３年の松川友姫がナレーターを務めた。

まず１つ目の問いを検証するため、ボホール島で被災した住民にインタビューを行った。住民の話によると、ボホール島はこれまでに大きな地震を経験したことがなく、地震に関する知識や対策がなかったことが被害を大きくさせたと考えられる。また、住民たちはフィリピンの自治体組織であるバランガイを通して政府に支援を要請したものの、支援がほとんど得られていないことが明らかになった。フィリピンでは政府に何かを要請するまでにバランガイ以外にも様々な機関を通さなければいけないことや、政府与党にコネがないと住民の声は届きづらいといった実状があることもインタビューを通して明らかになった。こういったことも震災復興が遅々として進んでいない要因の一つと考えられる。

次に２つ目の問いを検証するため、NGOの被災住民へのボランティアに同行させてもらい、ボランティアを受けた被災住民２人にインタビューを行った。ボランティア内容は、震災によって傾いたり全壊してしまった家の修繕・再建の手伝いというものであった。被災住民２人へのインタビューで、「知識もスキルもない学生は役に立つか」という問いに対して、彼らの答えは共通して「役に立った、

Hosei University Repository

復興が早く進んだ」というボランティアに肯定的な意見だった。半日かかってやっと屋根を張れるぐらいの微々たる協力しかできなかった私たちだったが、被災住民たちは「フィリピンには関係のない外国にも復興を願ってくれている人々がいるのだ」と笑顔で感謝してくれた。この彼らの笑顔に私たちがボランティアを行った意義があるのではないか。

今回この映像では実際に被災地で映像を撮影し震災復興について考えたが、この映像の目的は２つの問いに対する答えを出すことだけではなく、被災地には足を運んでいない学生に復興支援について考えてもらうことだ。日本もこれまでに多くの震災を経験し、2011 年に起こった東日本大震災の復興は未だ続いている。こういった経験を持つ日本人だからこそ、海外で地震が起こった際に何かできることがあるのではないか。現地に赴き、実際に目で見て感じることも大切だが、皆が全て被災地に足を運ぶことは、難しい。それが今回のフィリピン・ボホール島のように海外であれば尚更だ。だからこそ大切なのは、現地がどうなっていて被災した人々がどんな思いをしているか想像力を働かせることではないか。

---

新村麻里恵、伊井愛理沙、高岡誠之、中村あずさ、春田拓真（大澤・島田ゼミ）

●発表タイトル

## 「最後の一週間」

私たちがこの作品で書きたかったことが二つある。一つ目は、「何かに本気になることは楽しいことだ」ということである。もちろんすべての学生がそうではないが、日本の大学生たちに自虐的なところを強く感じている。その原因は、受験に失敗したなどの理由だけではない。18 歳であれば、人生において恋愛や挫折などを経験してしまっていることが多い。「人生なんてこんなもの」「自分なんてせいぜいこの程度」という気持ちが多くの学生の話す言葉に表れていると感じられることがある。何事にも本気にならず、できるだけ手を抜いて楽をして、いつも飄々としている事が格好いいと思っている大学生は特に多いと考えられる。そのような人々は、真面目に授業に出て熱心に何かに打ち込む人を「意識高い系」と呼び、冷やかすことがある。同じように恋愛関係がうまくいっている人を、「リアルが充実している」の略称で「リア充」などと呼ぶ。人は長い年月生きれば生きるほど、臆病になる生き物である。過去の失敗がよみがえって、行動に移すことができなくなる。特に人の『心』に関わるようなことには大変気を遣うようになる。だからこそ「大学生にもなって」何かに本気になることは素晴らしいことだと考える。

私たちがこの作品で書きたかったことの二つ目は、「ありえそう」な感覚である。これは「親近感」とも言い換えることができる。なお、これは人が映像を見た時

Hosei University Repository

に感じる感覚であってメッセージではない。なぜ親近感を出したかったかというと、フィクションであっても観た人の共感を呼ぶことができるからである。すなわち、「私の周りでもこんなことが起きるかもしれない」あるいは「起きてほしい」と思わせることができる。今回私はそのターゲットを大学生に絞った。なぜなら、「自分が大学生だから、大学生ならではのものを創ろう」と考え、さらに観た人に共通の話題を提供することができ、楽しませることもできると考えたからである。

私たちは「大学生活の中でこんなことが起きていたら面白いかもしれない」というアイディアからこの作品を創り始めた。大学に入学して間もない頃、希望に満ち溢れている新入生が多くいる。大教室で何百人もの学生が同じ授業を受けているが、必修科目となれば自分の意志とは関係なくその授業を受けている学生も少なくない。その年の新入生が大学生活に慣れてきた頃、その授業では学生の多くが雑談や各自の携帯電話を触り続けるようになる。先生も注意をするが、その状況に呆れてしまっている様子が見受けられる。必修科目に限ったことではないが、自分の興味ある内容ではなく、単に必要単位のためにその授業を受けている学生が多いと、そのような状況が起こり得るのが現状であると考えられる。しかしそれは、生徒の怠惰だけが必ずしも悪いわけではないだろうといえる。どんなに先生の言っていることを一生懸命に理解しようと努めても、理解できないことはありうるからだ。私たちはそのような現状から考えた。授業を聞く気のない学生と、学生を注意することに疲れた大学教授、そして漂う停滞感のなか、もし一人でも先生の話を熱心に聞き、かつ理解している学生にスポットライトをあてれば、なんとなく生活している学生に何かを伝えられるのではないだろうか。人が物語に感動する瞬間は、登場人物が何かに本気になった瞬間にあると考える。もし自分たちがなんとなく過ごしている時間に、本気で何かに取り組んでいる人がいたら、自分もそうありたいと思うのではないだろうか。

以上の理由から、私たちはこの作品を創った。

---

沼澤亜由、百佐保里、猪野広樹、櫻井愛、村上紗規、谷口達彦、宮川陸（山根ゼミ）

●発表タイトル

## PV 作品集

⑴ story of my life

思春期に思い描いていた夢に向かって走り始めた３人の男女が、各々挫折や、挑戦を経て、大人へなってゆく。「人生」を題材に扱い、学生からの視点で描く。

⑵ who says

「都会」という閉鎖空間の中で自分を見失った主人公が、ありのままである「自

Hosei University Repository

然」に触れる事で初心（本来の自分）を思い出し、再出発していく。

**⑶未成年の主張**

順不同

---

古田土瑞希、廣川友利亜　山添千秋　横田香織　山口優貴　三栖尚也
（鈴木靖ゼミ）

●発表タイトル

## 耳塚～アジアから見た日本～

今年７月、韓国を訪問した中国の習近平国家主席は、ソウル大学で行った記念講演の中で、中韓両国の苦難の歴史をこんな言葉で語り始めている。

「四百年あまり前、朝鮮半島で壬辰倭乱が勃発すると、（中韓）両国の軍民は共通の敵に立ち向かうため、肩を並べて戦いました。」

壬辰倭乱とは、文禄の役、すなわち 1592 年に始まる秀吉の朝鮮出兵を指す。日本では、日本史の授業でわずかに触れられるだけのこの事件が、中国や韓国の「負」の対日イメージの発端となっているのである。

明との講和交渉が決裂すると、秀吉は 1597 年、再び朝鮮半島に兵を送る。丁酉倭乱、慶長の役である。焦土作戦となったこの戦いでは、軍功の証として明や朝鮮の人々の鼻や耳が切り取られ、日本に送られた。それらを埋めた塚が、いまも京都や岡山、九州などに現存する。「耳塚」である。

1910 年、日本が朝鮮半島をその支配下に置くと、「耳塚」は被支配者である朝鮮の人々の苦難と屈辱を象徴するものとして、朝鮮のみならず欧米からも非難を浴びた。
いったいこの事実を何人の日本人が知っているだろうか？

1997 年、京阪地区に暮らす在日の人々が「耳塚」建立 400 年を記念して、慰霊祭を始めた。今年も例年通り開催されることになったこの慰霊祭を訪ね、アジアの人々の眼に映る日本の姿を考えてみたい。

---

Hosei University Repository

山崎聡子、馬場あゆみ、藤尾愛美、信江亜由美、堀内美鈴、渡邉美友、青山里奈、小林志帆、松本栞、中田蒼、小磯浩平（鈴木晶・志村ゼミ）

●発表タイトル

## 「フツカヨイ」

ふらつく体、ズキズキする頭。いつもなら清々しく感じる朝日が身も心も焼いているように思える、飲み会の翌日の朝。飲み過ぎてしまったことを強く後悔する、そんな出来事を誰もが一度は経験したことがあるのではないでしょうか。自分の経験に置き換えて見ることが出来る、もしくは自分の身にも起こるかもしれない、ぐっと引き込まれる作品を作りたいという想いからこの作品は生まれました。

私たち法政大学の学生の多くが利用する飯田橋駅のホームでも、辛そうにふらついている人を目にすることが多々あります。そもそも人はなぜお酒を呑みすぎてしまうのでしょうか。酔っ払うのが楽しいから？ストレス解消になるから？嫌なことを忘れられるから？

…では、大切なものまで忘れてしまったら？

この作品は、大切な友人と記憶を酒の荒波に揉まれて置いて来てしまった女子大生たちのお話です。失った友人と記憶、迫るタイムリミット。記憶の鱗片と見つかったヒントを頼りに、彼女たちは人探しに出ます。フツカヨイと戦いながら。

**《撮影の工夫点》**

**○作品全体として**

POV（主観ショット）を用いることで、観客が映像に引き込まれるように工夫しました。

また部屋の中のシーンや捜索シーンでは、登場人物の位置関係を分かりやすく表現することを意識しました。そのために神の視点からの撮影（俯瞰ショット）を用いることで、状況を客観的に映し出しました。

**○浪人生の回想シーン**

浪人生が沈んだ表情で歩いているシーンです。通常映画では歩いているシーンを撮影する場合、ドリーと呼ばれる台車にカメラを載せて撮影します。しかしそのような機材がないため、スタビライザーという手ブレを防止する機材で代用しました。

このシーンは暗い場所での撮影なので、ISO 感度を上げて撮影しました。しかし ISO 感度を上げすぎてしまうと映像にノイズが入り込んでしまいます。そこで、カメラの F 値を小さくする（絞りを開ける）ことでカメラに写りこむ光の量が多くなるよう工夫しました。その結果、ISO 感度を上げ過ぎることなく夜のシーンを綺麗に撮影することが出来、また背景をぼかして被写体を目立たせることが出来ました。

Hosei University Repository

**○花火大会のシーン**

被写体（人）と背景（花火）の明るさが全く違う（花火が極端に明るい）ので、カメラのISO感度を花火に合わせて、複数のライトを被写体に当てることで両方を美しく映像に映すことが可能になりました。

**《映像編集の工夫点》**

**○時間に関する工夫**

・時の流れを表現するために、公園の時計から腕時計へ移るシーンがあります。映像の流れを止めないためにタイトルコールを被せて、タイトルコールは短めにする工夫をしました。

・回想シーンが数箇所ありますが、彼女たちが思い返している、もしくは想像しているシーンなので、色味をくすませるエフェクトをかけることで本編との時間のズレを表現しました。

・早送りの効果

**(1) 飲み会のシーン**

グラスがだんだん増えていく様子を早送りにしました。彼女たちがどれほどのお酒を飲んでいたかを分かりやすくする効果があります。

**(2) 捜索シーン**

周りを見渡し、手がかりを焦って探している様子を表現しました。

**(3) プリクラのシーン**

酔っ払って、楽しく騒いでいて、賑やかな様子を表現しました。

**○映像の見せ方の工夫**

・聞き込みのシーンでは、コメディ要素を取り入れるためにホラーシーンを採用しました。意図としては、ただ聞き込みをしているだけではなく、コミカルに彼女たちの苦労を表現したかったためです。ホラーシーンでは映像の動きを0.2秒単位で上下左右に振り、色味を数箇所変える事で恐ろしさを表現しました。

**○音の工夫**

・コメディ映画のため、コミカルな音楽を使う事でより雰囲気が伝わるようにしました。シリアスな音楽も使い分けることで飽きのこない作品を目指しました。

**○エンドロールの表現**

お酒を飲み過ぎたことで失った記憶の演出にこだわりました。飲み会の行動（カラオケやシーシャ、プリクラなど）がカメラに収められていたという設定で、それらの写真を最後のエンドロールで流しました。この事から、昨夜何が起きたのかが分かるようにしました。

Hosei University Repository

石井健輔、矢吹克俊、宮川陸、山口卓也、櫻井愛、出口由梨奈、斎藤美佳、村上紗規、沼澤亜由、百佐保里、木村優香、星可菜枝（山根ゼミ）

●発表タイトル

どこにでもいる平凡な大学生リクは、携帯を持たない、テレビを見ない、少し頑なな一面を持っている。

決まりきったルーティンの中で生活する彼だったが、ある日いつもとは何かが違っていることに気付く。

街を騒がせているテロのニュース、いつもは鳴っていない公衆電話…

しかしすべての違和感の原因は身近なものであった。

---

星可菜枝、斎藤美佳、矢吹克俊、谷口達彦、小島優毅（山根ゼミ）

●発表タイトル

## ファイナルアンサー

人生は選択の連続である。学校、友達、恋人…その時の選択によって、人生が180度変わってしまうこともある。そんな選択に立ち向かった男、ジョー・アレキサンドロス。一目ぼれした女性を手に入れるために彼が下したファイナルアンサーとは一体…?

---

王城星海、石川真衣、森田直紀、大場将也、小澤有輝、吉野拓磨、菱木麻佐美、村瀬友希、鈴木花奈（鈴木晶・志村ゼミ）

●発表タイトル

## 君がくれた七日間

人の命はとても儚く、いつか消えて無くなるものです。しかし、世の中には自ら命を絶って、死に行く者がいます。嫌な事が重なり、自分の生きる意味や存在価値に疑問を抱いたとき、人は死という道を選択しこの世から消え去ろうとします。ご存知の通り日本の自殺率は世界でも非常に高く、年間で約3万人。そして、私たちと同じ20代の自殺者はそのうちの約3000人もいます。死に関する日本社会のとても悲しい現状です。

では、あなたは死後の世界を想像した事がありますか？目の前が真っ暗になり、二度と目を開けることができなくなる事を。そして、家族や友人と二度と会えな

Hosei University Repository

くなる状況を。あなたはイメージする事ができますか？「死」という道を選んだ人にとって、その道は果たして本当に幸せなものなのか。

私たちはこの作品を通じて「死」や「自殺」と言う物を捉え直し、誰も知る事のない死後の世界を描いてみました。もし自殺を図った者が死後に感じた後悔の念や罪悪感を、次に自殺しようとしている人に伝える事が出来るのであれば、自殺志願者は確実に減るのではないでしょうか。映像だからこそできる表現を活かして、一度自殺を経験した者と、これから自殺をしようとしている両者の関わり合いをご覧になって頂きたいと思います。

**《本作品の技術的な考察》**

**○屋上のシーン**

ここでは女子大学生が屋上から飛び降り自殺を図ろうとします。それを見かけた男が止めようと屋上に向かって急いで階段を登ります。

屋上の端から今にも落ちそうな彼女とそれを止めようと必死に駆け上がる男。二つの視点を交互に映し出すカットバックを行う事で、緊迫感を表現しました。

**○男が徐々に浮き上がるシーン**

幽霊になった彼が路上で目を覚ますシーンです。何もなかった路上から彼が徐々に浮き上がって来るのがわかります。これは何もない路上を映した動画と路上で男が寝そべっている動画を重ね合わせたものです。男が寝そべっている方の動画を、編集ソフトを使って、ゆっくりと透明度を上げて行く事で徐々に浮き上がる表現が可能になりました。

**○男が男をすり抜けるシーン**

これは上と同じように固定された位置で撮った二つの動画を重ね合わせたものである。男が幽霊になった男とすれ違う瞬間だけ、幽霊の男の動画の透明度を下げています。

**○男が道端を歩くシーン**

このシーンは男が一人で考え事をしながら家の周りを歩くものです。歩いているシーンを綺麗に撮影する際はドリーと呼ばれるものを通常使います。しかし、そのような機材を使う撮影環境がないため、スタビライザーという手ブレ防止器具を使いました。背景は動いていますが手ブレがない滑らかな映像の仕上がりになっています。

**○男が自殺するシーン**

このシーンでは暗い部屋を表現しました。通常、暗いところで撮影するとノイズが多く映り込んでしまいます。しかし、この映像ではあまりノイズがありません。これはカメラの方で感度を下げて（暗くして）、実際には電気を付けた明るい部屋で撮影をしました。暗いシーンでもより鮮明でノイズの少ないシーンをカメラの設定により実現することができました。

Hosei University Repository

**○女の子が走るシーン**

彼の元に急いで向かう女の子。駅構内を走るシーンがここであります。走っている姿を正面から撮ったものですが手ぶれがなく滑らかな映像になっています。これも男が道端を歩くシーンと同様にスタビライザーを使ったものです。

**○最後に男が消えるシーン**

最後のシーンで男は抱いていた女の子をそっと離して消えていきます。これも固定カメラで男がいる動画といない動画を重ね合わせて透明度を下げました。

---

王城星海、石川真衣、森田直紀、大場将也、小澤有輝、吉野拓磨、菱木麻佐美、村瀬友希、鈴木花奈（鈴木晶・志村ゼミ）

●発表タイトル

## 厳選！映像研究ゼミが本気で作った映像作品 10 作！

**○ GR 東海の CM**

JR 東海の有名なクリスマスの CM をご存知でしょうか。本作品はその CM のパロディーとして制作しました。遠距離恋愛をするカップル。彼が遠くから会いに来ることを知って、サプライズで駅まで迎えに行く女の子。高まる気持ちと急ぐ疾走感。人ごみの中で彼を見つけたときの安心感。こうした感情の変化をうまく表現しました。

**○ GR 東海の CM　きゅん Ver.**

前述の CM とほとんど変わらない内容ですが最後だけ違います。

最後を変えるだけで見た人に違った印象を与えます。

**○ SUNPORY の CM**

本作品は石原さとみの鏡月の CM をパロディーとして制作したものです。どこまで似せる事ができるのかに挑戦しました。光の加減やカメラの若干の動きに注目してご覧ください。

**○あやしい牛乳**

この作品はサスペンスドラマの予告編をイメージして制作しました。予告だけで完結するのではなく本編を見てもらうために、限られた秒数の中で登場人物の説明とストーリーを少しだけ予告することを意識しました。工夫した点はミステリーの要素を出すために全体の色調を青くしたり、人物の表情に寄ることで映像に動きを持たせた点です。また、効果音を多用し、セリフの音声をすべて後から入れたことで、長い本編から予告として一部を切り取ったように見せるよう心がけました。

Hosei University Repository

○貞子　CM

暑い夏の日。背筋に流れ落ちる汗を、ひやりと冷やす、長い髪の女。

爽やかな飲料として有名である某ドリンクを、ホラーテイストのCMで演出することによって新たな印象を生み出そうと発案したものです。短い中でも恐ろしさを出すため、画面の明度を変えたり、出演者の表情ひとつひとつにもこだわりを持って撮影しました。室内で、逃げられない恐怖。外で、追いかけられ続ける恐怖。お飲み物片手に、どうぞお楽しみください。

○ Tank!!

画面４分割の技法を最大限に利用したミュージックビデオです。テーマは「何度もみたくなるムービー」です。何度も見てもらうならどうすればいいのか？と問い詰めた結果、じゃあ見るべき画面を増やせば良い、という結論に至り製作しました。

現実には不可能な映像だから成し得る技法をたくさん詰め込みました。上下左右の画面のシナジーなど見ていただけると嬉しいです。

タイポグラフィはPremiaで文字と図形を横にパンさせて動かしました。

○ Never Say Never

感動するミュージックビデオを作りたい！をコンセプトに制作したのがこの作品。構成を考える段階から人の心理について議論し、より感動させるためにはどうしたらいいかを追求しました。よくあるカップルの日常を切ないロックに合わせてみました。カメラワークと女の子の心情の変化に注目してご覧ください。

○ Tokyo Walker

ガイドブックには載っていない本当の日本。様々な顔を見せる東京。そんな私たち日本人だからこそ知る東京を、音楽のリズムに合わせて表現しました。

真っ直ぐに歩く人、そして入れ替わる東京。

人はただ真っ直ぐ歩いているだけなのにまるで旅をしている。そんな不思議な感覚には、服装の統一や、カメラと被写体との絶妙な距離、音楽と映像の連動等の工夫が詰まっています。撮影にも編集にも時間をかけた、こだわりのある作品です。

○ Tokyo Reverse

もしも自分が街中を歩いているとき、周囲を行き交う人々が逆向きで歩いていたら。そんな不思議な映像が撮れないかと思い、制作したのがこの映像です。仕組みはとても簡単で出演者が東京の街をひたすら後ろ向きで歩き、それを逆再生にしました。人間の性質的に、初めてこの映像を見たときは真ん中にいる人を基準にして映像を認識します。よって、逆再生であるのにも関わらず、周囲を行き交う人々が本当に後ろ向きで歩いているのでは？という錯覚に陥ります。この錯覚こそがこの映像の持ち味です。

Hosei University Repository

## インスタレーション部門

佐藤里保、仁科えい、平山岐映、奈良宏美、原萌香、大隅倖代、森紗紀子、若田久枝、山田泉絵、松原早紀、蜂屋悠子、毛利優萌、三浦桃、遠藤昂志、宮本みゆき、本橋香那、舘美月、馬可欣、岩田加奈子、小泉晴香、菊池麻里、加登仙一（熊田・守屋ゼミ）

●発表タイトル

# 糸と花～つながり～

異文化とは、国際文化とは、国際関係とはいったいなんなのでしょうか。それらは必ずしも地球規模に及ぶ話ではないと思います。自分と他者の間には必ず関係が存在します。それは「家族」かもしれませんし、「友達」かもしれません。また、もしかしたら「恋人」かもしれません。このような関係の間に生じるものはすべて文化です。つまり、他者と関係を持つということは、自分と他者の文化が接触するのですから、これでもうすでに異文化交流となります。では、文化とはなんでしょうか。辞典によれば、「人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体」とあります。ですが、私たちは、個人が生きてきた中で身につけてきた価値観も文化と言えるのではないかと考えています。ですから、個人と個人というとても小さなレベルの接触でさえ異文化交流であり、それこそが世界の成り立ちだと考えています。今回のインスタレーションでは、二つの要素によって、上記を表現してみました。

**糸**

私たちが生きていくなかで、人との出会いは不可欠です。生まれてすぐに家族と出会い、学生時代に友人と出会い、社会人になって上司と出会います。すべての出会いによって、私たちの人生は彩られ、変化しています。また、「この人のおかげで自分の人生が変わった」と感じる人に出会っている人もいるのではないかと思います。この人との出会いを私たちは糸を使って表現しました。

まず、１本の糸を１人の人と例えます。その１本の糸にいくつかの結び目作ってもらったり、数か所色付けをしてもらうことにより、その人の日常を表現します。１つの結び目は起床だったり、もう１つは夕食だったり、その人なりに意味を持たせた結び目を作ってもらうことにより、その人にしか作れない１本の糸を作ってもらいます。そしてその糸１本１本を結び合わせていき、最後はすべての糸が結ばれ大きな１本となります。この個々の糸を結び合わせていくことで、他人との出会いや新しい関係をつくっていくことを表現しています。また、すべての糸

Hosei University Repository

が結ばれた先には出会いによって変化していく人生を表します。そして、このあらゆる糸の集合体が社会を表現します。

**花**

アイデンティティを形成するためには、他人とのかかわりが必須となります。というのは、自分がだれなのかと問われたとき、所属を名乗らないと答えられません。たとえば、あなたは誰ですか？ときかれたら、「法政大学国際文化学部の」と最初に言わなければ自己紹介もできません。床にちりばめられた花びらは、そのアイデンティティのかけらひとつひとつです。それらの上を通ってもらうことにより、花びらの色が混ざったり、元の形が崩れます。これによって、自分を説明するためのツールをなくします。では、このツールすなわち関係性をなくしてしまったら、自分をいったいどうやって説明しますか？とても難しいあるいはできないと思います。この簡単に崩すことが可能な花びらたちによって、自身の成り立ちを可視化させました。

ここからアイデンティティの再形成をはかったり、自分を見つめなおしていきます。自己というものはとても危ういものであるということを私たちは理解しています。ですが、それを意識はしていません。理解していながら、時に自分は一人で生きているのだと思ってしまうことがあるかもしれませんが、そのようなことはなく、また、自分と隣にいる誰かだけでも世界は成り立ちません。たくさんの人との関係を持って初めて自分が確立でき、世界が出来上がります。

私たちは、これらの作品は新しい文化、関係に触れ、異文化交流を体験してもらえるという役割を果たしていると考えており、参加型アートの「観客の方たちにも作品制作の過程にかかわってもらう」という特性を活かすことによって新しい関係性を生み出し、異文化を共存させたいと考えています。またこのインスタレーションによって、自己は他者との関係があって初めて成立するというアイデンティティの脆弱性、自分は他者によって生かされているということを感じてもらえたらと思います。

---

梅野紗衣、大西優輝、小林稜、鈴木智香、松下直暉、吉田健也（輿石ゼミ）

●発表タイトル

## 『国文大改革』

国際文化学部の学生にとって、SA とは学生生活最大のイベントである。SA を入学の決め手とした学生も多くいる。入学後は SA を大きなモチベーションとして過ごし、それぞれの目的や目標を持って SA に臨み、それぞれが各大学で貴重な時間を過ごす。また、同時にそれは ”『国際社会人』の育成 ” という国際文化学

Hosei University Repository

部の最大の目標達成のための大きな要素でもある。しかし、SA を終えた私たち学生が改めて考えることがある。果たして現在の SA の制度は、『国際社会人』を育てるために最大限の役割を果たせているのかということである。そこで私たち輿石ゼミは、① SA 改革派② SA 代替派の二つの視点から、国際文化学部をより良いものにするための提案をおこなう。まず① SA 改革派の視点からは、各国の過去数年の SA 帰国レポートのデータを元に、SA の改善すべき点を洗い出した。調査の結果、個人の意識の問題とは別に、大学間のコミュニケーション不足に起因する授業内容の欠陥・費用の面での改善点等が浮かび上がってきた。それらを踏まえた上で、SA センター側の意見も取り入れながら既存のカリキュラムに改良を加え、最も効果的で魅力的な SA プログラムを提案する。そして② SA 代替派の視点は、大胆にもそもそも SA は必要であるかという核心に迫っていく。二年後期の教育を SA 先の大学に委任するのではなく、国内での国際文化学部独自のプログラムによる徹底的な指導により、本当の『国際社会人』を育成していくのである。以上の二つの視点による提案をそれぞれ紹介した上で、どちらの案がより魅力的かつ現実的かという争点でディベートをおこなう。私たちの提案を聞き、今後の国際文化学部のあり方について皆さんにも考えて欲しい。

---

石松小百合、石橋春菜、岩本みゆき、牛島春、小島彩、佐合良介、高畑えみ、山田修平、新井健吾、菅野亜美、平田愛佳（田澤ゼミ）

●発表タイトル

## ファッションから見る、日本のスペイン文化

私たち田澤ゼミは今回、日本に進出しているスペイン発のファッションブランドに着目し、どのような戦略や特色を持って日本で展開しているのかについて発表を行う。そして、見に来る人々にスペインのファッションを通じて、スペインの文化に興味関心を持ち、理解を深めることができるようにすることが狙いだ。

現在日本では、いくつかのスペイン文化がその知名度を向上させている。テレビ番組ではスペインの都市や、そこに住む人々の生活、独自の風習を特集するものが多くみられ、今はカタルーニャ自治州の政治的情勢について取り上げる新聞やニュース番組もいくつか見かける。またスペイン風バルなどで食事を楽しむ人も近年増えてきているように思える。

しかしファッションについてはその知名度が高いとは決して言えないであろう。1975 年にスペインのア・コルーニャで第一号店が出店された Inditex グループの ZARA はヨーロッパ・アメリカ・アジア・アフリカと世界中に支店を持ち、スペインが世界に誇るファッションブランドと言えるであろう。また 19 世紀後半にマ

Hosei University Repository

ドリードで誕生したLOEWEもまたスペインで誕生した高級ブランドの一つである。しかしながらそれらのブランドがスペイン発であることを知る人は多くない。

従って今回は日本に支店を持つZARA,Desigual,Camper,LOEWEといった、スペインでは有名なこれらのブランドについて調べ、スペイン国内・世界・日本国内での展開やその販売戦略、そのブランドが持つ商品の特色、日本とスペインでの人気商品の違いを見ることで両国の人々のファッションの趣向の違いなどをまとめ発表する。

また今回は前年に引き続き、インスタレーション形式で発表を行い、実際に購入した商品の展示やポスターの掲示などにより、教室を実際の販売店に見立て、それらが売られている雰囲気を少しでも味わってもらいながら観覧者に見てもらう。

今回の発表を通し我々自身のスペインファッションの現状また展望を自分たちなりに考察し、法政大学の学生や先生方がスペインファッション及びスペインの文化についての興味、関心を抱くきっかけになればと考えている。

---

土居麟馬（無所属）

●発表タイトル

## Rimma Doi Exhibition

学校生活でしてきた事を見直し、
学んだ事を生かしながら、
やりたかった事を以下の方法で表現します。

・写真
・写真 + イラスト
・写真 + オブジェクト
・切り絵

できるだけこぢんまりと、シンプルな美術展のようにしたいと思っております。しかし見るだけではなく作品を写真におさめてもらい、そこで新たな作品が生まれたりする、楽しい内容にするつもりです。白を基調とした空間を作りたいです。

来て頂いた方々に、大学にはこんなやつがいたのか！と知ってもらえたら嬉しいです。

---

Hosei University Repository

奥山友香、高橋千尋、福田光希、奥川のぞみ、北村英子、鈴木結実、西田鈴夏、根岸紘平、菊池冬輝（森村ゼミ）

●発表タイトル

## ペルソナ

皆さんは、いくつの顔を持ち合わせていますか。

学校、職場、友人の前、恋人の前、家族の前、私たちはあらゆる社会的な団体に所属しており、その都度、その雰囲気等に合わせて、見た目だけではなく、言葉遣いなどの話し方や表情、自分の立ち位置などが変わっています。多かれ少なかれ、私たち人間は、かならずしも自分の本心とはいえないような、本来の自分とは異なる顔を持っているでしょう。それはまるで、“仮面”をかぶっているようなものです。それは決して、意識して顔を使い分けているということが起こっているわけではありません。それは自然と、つまり無意識の元に起きているのです。

スイス出身の心理学者で、同時に精神科医でもあったカール・グスタフ・ユングは、この無意識というものに着目し、人間の心について独自に研究を進めてきました。

そして彼は人間が多種多様に使い分けているこの“仮面”のような存在のことを、「ペルソナ」と名付けたのです。

私たちが、この複雑な世の中に適応して生きていくためには、その外の世界にうまく適応していく必要があります。つまり外の世界が求めている姿に、私たちはいなければならないのです。例えば、女性は女性らしく、男性は男性らしく、大人は大人らしくなどのように、その都度、期待される姿や行動をしなければならないのです。もしも、その求められていることにうまく応えられなかったら、人はそれを「不適応」、「異常」であるというレッテルを貼られてしまいます。「ペルソナ」はまるで衣服のようだとユングは述べています。何故なら、大衆の前で裸姿でいたら、「異常」だと言われてしまうからです。

「ペルソナ」は、私たちがこの世の中を生きていくために必要な無意識の要素だと言えます。つまり、「ペルソナ」というのは自分の内的な部分に根差している部分がありつつも、基本的には、外の世界で生きていくために必要とされる役割を演ずるために生まれたものなのです。そしてこの役割が最も重要とされているのは長い人生の中で主に学生時代や社会人になってまだ間もない時間など、人生の前半部分です。ここでいかに外の世界とうまく適応し、人間関係を広げ、自分の地位を上げていくのかということが重要で、「ペルソナ」はそのための重要な役割なのです。

しかし、ユングは、このような見えやすく理解しやすい、外の世界に対する適応の問題以外にも、「ペルソナ」が人間の心、つまり、内なる世界に対する適応の

Hosei University Repository

問題も起こりうる可能性を指摘しています。それは、「ペルソナ」形成に力を入れすぎてしまい、本来の自分の人格を失ってしまうという可能性です。無意識の中で発達しすぎた「ペルソナ」のために人間は個性的な生き方をすることが難しくなってしまいます。これをユングは「ペルソナの同一視」と呼びました。常に周りとの適応を試みるあまり自分のこころと向き合うことを疎かにしてしまうのです。この「同一視」が続くと、神経症などを引き起こす可能性もあるとユングは述べています。

また、逆に「ペルソナ」が未発達の可能性もあります。この場合は、外の世界との衝突が多くなる可能性があります。他人の感情を平気で傷つけたり、もしくは自分が持つ能力をスムーズに表現できなくなるなど、この世の中を生きていく上で多くの障害が発生します。

私たちはこの「ペルソナ」と、本来の自分、ここではユングの言う「自己」とのバランスが、生きていく上で大事なことであると、ユングは述べています。

今回、私たち森村ゼミの発表では、「ペルソナ」というものがいかに身近な存在であり、且つ誰でも持っているものであるということを一人でも多くの方に理解して頂ける様に、イントロダクションとしての映像と鏡を使った発表を行います。鏡に映る、無意識状態の自分と向き合った時、そこに「ペルソナ」が存在するのです。是非、「ペルソナ」を体験しにいらしてください。

---

石丸智子、福元里菜、恩田桃菜、近藤加菜、大場梨沙、深谷仁美、倉持翠、佐々木希美、和田晃太郎、川村里帆子（大沢ゼミ）

●発表タイトル

## 偏見の世界～異文化コミュニケーションを用いて～

「‥‥ちゃん最初は怖くて近寄りづらかった～」、「喋らなければ頭良さそう」、「お兄ちゃんいそう」「あ～B型っぽいよね」…。　このように外見で相手に先入観を抱かれたことは誰しもが経験しているでしょう。人は見かけによらぬもの。しかし、『人は見た目が９割』とも言われる程、良くも悪くも人は外見や最初の印象で判断されることが多いのが現実です。普段、人は他人に対して一体どれ程の偏見を持って生活しているのでしょうか。

大沢ゼミでは、日頃から偏見というものに苛まれている10人が日常に溢れる「偏見」「先入観」について、それらが生まれる瞬間、発生するメカニズムについて２つのセクションに分けて調査、研究を行いました。

１つ目のセクションでは、見た目による偏見です。誰がゼミ長でもおかしくない程個性溢れる大沢ゼミの学生の中でこのゼミを牛耳る人物は誰なのか。誰がゼ

Hosei University Repository

ミ長に相応しいのか（外見上）。人の外見と中身にはどれ程の相違があるのか。それを調査すべく、法政大学の男女100人にインタビューを行い、『大沢ゼミ、ゼミ長総選挙2014』を行いました。この調査から、あなたが普段いかに人を見た目で判断しているか実感することができるでしょう。

２つ目のセクションでは、これぞ偏見の根幹であるとも言える、「血液型」についてです。血液型の占いが支持されるのは日本や韓国くらいだとも言われていますが、なぜ日本にはこれほどまでに血液型による性格分類が根付いているのでしょうか。血液型と性格には本当に因果関係があるのか。血液型に根拠はあるのか。人類はたった４つの血液型で分類されてしまう程個性がないものなのか。大沢ゼミでは『・・型自分の説明書』に基づいて血液型に更なる多様性を見つけることに挑みました。

☑・買い物に行くと、なかなか買うものを決められない　☑・さみしがりや
☑・八方美人　☑・自分にないものを持つ人を素直に認める

おそらく多くの人が２つ以上の項目に当てはまるのではないでしょうか。それでも血液型の話題がよく上がるのは何故なのでしょうか。あなたは血液型による先入観に納得できますか。

・　大沢ゼミではこの２つを軸に日常のあらゆる偏見、先入観を取っ払う、そんな機会をインスタレーションによる形式でみなさんに提供します。これを機に、あなたが普段何気なく抱いている偏見について考えてみてはいかがでしょうか。

---

嶋﨑由依、金秋りさ、橋田悟、池田佳穂、北圃莉奈子、石川理恵、窪田寛大、井口志乃、松橋さやか、最上拓朗、石井陽子、山田茉奈、齋藤瑞季、船越由羽子、山本詩帆（稲垣ゼミ）

●発表タイトル

## 追方夏生　回顧展

**「追方夏生　回顧展」**
**形式：インスタレーション**

追方夏生という一人のアーティストの人生を振り返り、作品を回顧展という形で展示するインスタレーションである。

私たち稲垣ゼミは東日本大震災により起こった原発事故の影響で全村避難となってしまった福島県飯舘村の方々から震災前の飯舘村での生活の様子を伺ったり、日用品などをお預かりして飯舘村のミュージアムを開くという活動に参加している。そんな中、稲垣先生から追方夏生という一人のアーティストを紹介していただいた。追方さんは生前、原発をはじめ様々な問題に関するご自身の主張を

Hosei University Repository

作品で表現なさったアーティストであった。追方さんが原発の問題に取り組んでいたり、ゼミ生が興味を持っていた過去の著名な作品をそのまま自作に利用するアプロプリエーションアートの作品を作っていたこともあって稲垣ゼミと通じるものがあると考え、追方さんの人生や作品を読み取り、学会で追方夏生　回顧展という展示型のインスタレーションを行うことになった。追方さんの作品のテーマとしてメディアへの不信感から情報を鵜呑みにすることの危険性を訴えたものやアプロプリエーションアートを通して、ものの本当の価値とは一体何なのかと人々に問うものがある。これは大学生である私たちが今改めて考えるべきことでもある。追方夏生　回顧展というインスタレーションを通して、情報を鵜呑みにせず自分で信憑性を確かめる必要があること、ものの本当の価値とは何か、価値を見極める目が必要であることを伝えられたらと考えている。